サナトリウムの黒猫

双月　奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サナトリウムの黒猫

【Ｎコード】
Ｎ９７９５Ｓ

【作者名】
双月　奏

【あらすじ】
とあるサナトリウム。
そこの中庭には、いつも真っ黒な猫がいる。
最初は追い出されていたその猫も、何度追い出しても帰ってくるので
いつしか、みんながその風景を受け入れるようになった。
そして噂が流れる。
「あそこにいる猫の鳴き声を聞くと死ぬんだって」
着いた名前は「死神」

不吉と言われる黒猫が、サナトリウムの中庭で死神の名を持つ……。

そんな絶望を知った人達の、最大の皮肉にも動じず、黒猫は今日も日向でのどかに眠る。

そして少女がやって来る。

少女と看護師と黒猫と

「消灯時間は夜の九時です……」
聞きなれた看護師さんの説明。
どこの病院もほとんど同じ、正直に言うと聞き飽きた。
ふと、窓の外を見ると、すごく綺麗な庭が広がっていた。
芝生は丁寧に整えられていて、いくつか置かれたベンチの横には、青葉の生茂る桜の木が、いい感じの日陰を作っていた。
「……羽さん、九月（クツキ）　美羽（ミハネ）さん！」
「はい！」
大きな声で呼ばれて、慌てて返事をする。
「もう、聞いてなかったでしょう？」
若くて、身長が高く、スタイルの良い看護師さんが、むくれた顔で言う。
「あはは～」
ちょっと笑って、私はごまかす。こういうのも、もう慣れた。
「あのね、ここはいつもの病院と違って精神的疾患を抱えた人もいるの。だから人と接する時は慎重にね」
「はーい」
元気良く、返事を返す。早くこの人に、出て行ってもらいたいから……。
少し表情を緩ませたくて、もう一度、窓の外に目をやる。
そこで私が目にしたのは、鮮やかな緑でもなく、爽やかな青でもなく、眩しいくらいの光でもなく、黒だった……。
鮮やかな緑の上、爽やかな青の下、眩しいくらいの光の中、その黒は穏やかに眠っていた。
「じゃあ後は何かあったら……」
「あっ、あの！！」
何か言っていた看護師さんの声を遮る。

「な、なに？」
あまりの剣幕に怯みながら看護師さんが答えた。
「あそこ！　あの一つだけ日当たりの良いベンチの上！」
「なんで、なんで猫がいるんですか！？しかも黒猫！」
あぁ、そのことかと、看護師さんは、慣れた調子で答える。
「うーん、詳しくは、私にもわからないんだけどね。なんだか追い出しても、捕まえようとしても、必ずあそこに帰ってくるんだって」
「それで、いろいろ手を講じたのだけど、お手上げ状態になっちゃって。でも、誰に危害を加えるわけでもなく、あそこに寝ているだけだから、いつしか誰も手を出さなくなったんだってさぁ」
「そ、それでも仮にも病気の人が集まる所に黒猫って……」
「そうね、ココに来た人、みんな驚くわね」
看護師さんが、ニコニコしながら言う。
「何だか、楽しそうですね？」
「うん。だって、今の素のあなたが、あまりに可笑しかったから。でも、さっきの作り笑いしているあなたより、その驚いている顔の方が、よっぽど良いわよ？」
いろんな事を見透かす言葉に、さらに驚かされる。
「あ！まあ、これは必要無いと思うけど、一応あなたは病人なのだから、あの猫には触っちゃダメよ？」
「必要ないって？」
なんだかオカシナ言い回しに、首をかしげて聞く。
「それがね、さっきも言ったように、あの猫。何度も捕まえようとしているのよ。でも、未だ誰一人、あの猫に触れたことが無いの。だから多分、美羽ちゃんも触れすら、しないと思うわ」
「そうなんだ……」
「じゃあ、もう行くわね」
「あ、はい」
「なにかあったら気軽に声をかけてくださいね」
事務的に、でもどこか、おちゃらけて、看護師さんは去って行っ

た。
「いい人なんだなぁ……」
あ、名前聞いてなかった。とか考えながら窓の外の黒猫を眺めた。
「ニャーン……ニャーン……」
「ふう、もうちょっと、愛想良くてもいいのにー」
私は昨日、窓から見た。黒猫の隣に座って、そう呟く。
それにしても、流石、猫が居付くだけの場所。暖かくて心地が良い、風の通りも良い、あまりの気持ち良さに自分が病人である事を、忘れてしまいそうだった。
「うーーーーん」
大きな伸びをしてみる。隣の黒猫は、なんの反応も示さず、眠っている。
「もう、なんか反応しないの！？」
むきになって、言う。
……
無視。
「本当は、死んでいるんじゃないでしょうね？」
ふと、昨日の看護師さんの言葉が、蘇る。
（未だ誰一人、あの猫に触れたことが無いの）
そして、好奇心が生まれる。
「よーし」
そーっと、そーっと、手を伸ばす。
ゆっくり、ゆっくり、手を伸ばす。
気配を消して。
そーっと、そーっと、ゆっくり、ゆっくり……。
パチッ
そんな音が聞こえたような気がする。
それほどの勢いで黒猫は目を開けた。
しばし見つめ合う。

……
愛想笑い。
……
ニコッ
……
ダッ！
そんな漫画の擬音を立てながら、黒猫は走って行ってしまった。
「あーーー」
もう少しで、触れると思ったのになぁ。
「ほらねっ！　だから無理って言ったでしょう？」
「うひゃあ！？」
いきなりの声に、驚いて振り向くと、昨日の看護師さんが、ニコニコしながら立っていた。
「そんなに驚かなくても、いいじゃない」
クスクス笑いながら言う。
「だってぇ、全然、気配がしなかったんだもん！絶対・・看護師さんだったら、あの猫に触れるって！」
名前を呼ぼうとして、聞いていなかったことに気付く。
「あー！　私の名前。憶えてないなぁ？」
気付かれた。
「えーっと、そんなこと無いですよ！」
また、愛想笑い。
「じゃあ言ってみてよ。」
ニヤニヤしながら問い詰めてくる。
そうだ！胸元の名札を見れば！
そっと目を走らせる。
だけど、看護師さんは胸元にクリップボードを抱えていた。
「ほらぁ、どうしたのぉ？」
もう駄目だと、思ったとき。
クリップボードの横から名札がチラッと見えた。

ーーーー小鳥遊ーーーー

……

「ごめんなさい。憶えてないです」

降参だった、病院生活も長いし、本は沢山読んでいるし、病室の表の苗字を読んで周った事もあるから、多少、難しい字でも大丈夫だと、思っていたのに・・・。

「まあ、そんなことだろうと思っていました。昨日全然、話聞いていないんだもの」

「だってぇ……」

つまらないんだもん。

「まあ良いわ。私の名前は小鳥遊（タカナシ）　舞子（マイコ）！　今度は覚えてね」

ずいっと、身を乗り出して忠告してくる。

「タカナシ　マイコさんね。うん、憶えた！」

復唱して答える。

「よろしい！　じゃあ次ね」

「へ？」

間抜けな声で答える。

「あなたは病人なのだから、あの猫に触っちゃ駄目って、言ったでしょう？」

「えーっと、だって小鳥遊さんが、触れないって言ったから」

本当に触れなかったし。

「そっか、好奇心を刺激したのがいけなかったのね！　ならこれからはおもしろい話は無しにしましょう」

「えーーーーー！」

それは困る。非常に困る。

「だって、またこんな風に、好奇心で動かれたら、大変だもの」

「ごめんなさい！もうしないから！」

泣きつく。“退屈”だけは、本当に耐えられないから。

「うーん、じゃあ一つ。私の名前は下の名前で呼ぶこと！　これでさっきの事は冗談にしてあげるわ」

あまりに簡単な提案で、拍子抜けしてしまった。
でも、まあ、これでおもしろい話が聞けるなら、良いだろうと。
「舞子さん」
呼んでみる。
「よろしい！　あんまり私の苗字好きじゃないのよねー。それに、下の名前で呼ぶ方が仲良しって感じでいいでしょ？」
またニッコリ笑う。
この人の笑顔は本当に輝いていて、私には少し眩しい。
「で、おもしろい話は？」
「ちょっとぉ、今は友情を確かめ合う所でしょう？」
いつの間に、そんな友情が出来たのだろう？でも、多分この人は嫌いじゃない。
クスッ
「あ！　やっと、ちゃんと笑ったね！　やっぱりそっちの方が、断然可愛いよ！」
「美羽ちゃんは、せっかく元が良いんだから、それ活かさないと」
……
「そうゆうの、好きな男の人に言ってもらいたかったな」
「あ、生意気〜」
舞子さんはまたクスクス笑っている。
でも、私はまた笑えなくなっていた。
「活かす相手なんていないっつーの」
小さくぼやく。
「ねぇ、美羽ちゃん」
急に真面目な顔で、舞子さんが言う。
「おもしろい話が良いって言っていたわよねぇ？」
「う、うん」
なぜか沈んだ声で舞子さんは続ける。
「じゃあこれね……あの黒猫の話……」
「あの猫ちゃんに興味あるでしょう？」

「うん……」
確かに興味はあるけれど……
「なんで、そんな話し方なんです？」
「それは聞いていたらわかるわ」

「あの猫ちゃんにはねぇ、沢山の噂があるの」
「なんせ、誰も触れたことの無いぐらいの猫だからね」
「でね、その中でもとびきりの噂があるの」
「ある看護師の夜勤の時の話なのだけれどね……」
「凄い風と雨の夜、突然、もう長くないって言われていた、おじいさんの所からナースコールが鳴ったの」
「もちろん慌てて、病室へ走って行ったわ」
「だけど、病室の前に着くと、何だか話し声がするの」
「耳を澄まして聞いてみると……」
「やっと迎えに来てくれたのかぁ」
「と、おじいさんの声がするの」
「誰かいるのか、それとも独り言なのか、とりあえず中に入ってみると……」
「ドドーーーン！！」
「うひゃあ！」
急に大声を出すから驚いてしまった。
「ふふっ、意外と恐がりなのね」
「うーーー」
そりゃあ、これからここの病室で生活するのだから、恐いに決まっている。
しかもこっちは病人なのに、こんな風に、驚かしてくるなんて、この人は本当に、看護師さんなのだろうか……
「でね、雷の中。おじいさんに、目を向けるとね、おじいさんが胸を押さえて苦しんでいたの」
「急いで応急処置を施そうとしたけど、もうどうしようもない感じ

で」
「おじいさんが、とうとう心肺停止状態になっちゃったの」
「その時ね……」
「ミャーオ」
「猫の鳴き声が聞こえて窓の方を見ると……」
「ドドーーーン！！」
……
「あれ？　恐くない？」
「さすがに二回目は……」
苦笑い。
「そっかぁ、でね、窓の外、凄い雨の中、あの黒猫がその病室を見ていたんだって」
「だからね、あの黒猫には、誰もあんまり、近寄りたがらないのよ」
「しかも、あんまりにも、似たような体験をする人が多いから、あの黒猫ちゃんは、死神って呼ばれているんだから」
一通り話しが終わったみたいだった
「ふう。舞子さん、それってさぁ、ここの患者さん達があの猫に近寄らないようにするための作り話でしょう？」
「うわ、冷めた反応……。でも残念ながら、それは無さそうね」
「だって、私はそんな風に聞いた事無いもの」
「舞子さんが、嘘を言っているとしたら？」
少し疑ってみる。
「まあ、それは、美羽ちゃんが信じるしかないわけだけどね」
……
「小鳥遊さーん」
「あ、呼ばれちゃった」
「また、そのうち違う話、してあげるね！」
小さく手を振って、パタパタと行ってしまった。
「ふう」
小さく溜め息をついて、さっき黒猫がいたところを見る。

「わっ！？」
いつのまにか例の死神さんが、座っていた。
「いつの間に戻って来たのさぁ？」
死神さんに、聞いてみる。
無視……。
「まあ、わかっていたけどね」
ふう、っと、もう一度、溜め息を吐く。
「死神かぁ……」

「……じゃあね、美羽ちゃん。また来るからね！」
お母さんが、慌しく去ってゆく。お父さんも、お母さんも、いつも私の治療費の為に、一所懸命になって、働いてくれている。さらにその間を縫って、私に会いに来てくれる。それが嬉しくもあり、申し訳なく思う事もある。
でもそんな事を言えば、お母さんも、お父さんも、悲しそうな顔をするので、私はいつもにこにこ笑う、お母さんのため、お父さんのため、自分のため……。
「ふぅ」
軽くため息を吐いて庭にあるベンチに座る。ここは例の死神さんの指定席……の隣。日当たりが良く本当に気持ち良い。このベンチだけまるで別世界の様で、気分の良い日、天気の良い日はここで読書をするのが、いつの間にか日課になっていた。

「ん〜〜〜〜」
読んでいた本を閉じ、軽く伸びをする。
「ねぇねぇ、死神さん」
隣で寝ている黒猫に話しかける。実はこれも密かな日課。
「私の魂はいつ持って行ってくれるの？」
隣で寝ている「死神」さんに、問いかける。

でも、いつも決まって無視。
そのくせ、そっと手を伸ばすと、いつもパチっと目を開け、私を見つめてくる。
「私に触れるな！」
まるで、そんな言葉が聞こえてきそうなほどの、威圧。
でも、そんな雰囲気が、まるで知性のあるような瞳が、行動が、私を今とは違う世界へ連れて行ってくれるような気がして、どうしてもココへ来てしまう。
「美羽ちゃん！　あ……九月さん！」
大きな声で名前と、苗字を呼ばれる。どうやらここ最近気付いたのだけど、他の看護師さん。（特に婦長さん）の前では、苗字で呼ばないと怒られてしまうようだ。
舞子さんは、慌ててこちらに小走りで寄ってきて。
「そろそろ冷えてきたから、お部屋に戻りましょうね。美羽ちゃん！」
耳元で、そう囁かれる、どうして、この人は怒られてまで名前で呼ぶことに、こだわるのだろう？死神さんと同じくらい謎が多い。看護師さんなのに、人を驚かすのが好きだし。すごく無邪気だと思ったら急に大人びた事を言ってみたり、とにかく掴みどころが無い。今まで出会ってきた大人とは、どこか違っていて、私はなんとなく、この人にも惹かれていた。
もちろん本人には内緒だけど……。
「死神さん、違うお迎えが来ちゃったよ」
舞子さんの大声にも微動だにせず。お昼寝中の死神さんに、ちょっとふざけてそんな事を言ってみる。
「美羽ちゃん！！」
突然大きな声で、名前を呼ばれて振り返る。
「冗談でもそんな事言わないで。」
いたって真剣な“大人な舞子さん”がそこにいた。この寂しそうな目と、私の心を見透かす様な態度の取り方は、正直、苦手だ。

「ご、ゴメンナサイ……」
萎縮して、なんだか片言になり。うつむいて、謝罪の言葉を呟いた。
異変に気付いたのか、舞子さんは慌てている。
「あ、急に大声出してごめんなさい、でも、もう二度と、さっきみたいな事は言わないで」
急にかしこまって、すごく悲しそうな目でそんな事を言われ。なんだかすごく申し訳ない気持ちになってくる。
「ごめんなさい」
もう一度しっかり謝る。
この人にはきっと、いつもの、お愛想笑いや、嘘の謝りは通用しない。そう思わせる何かが、舞子さんにはあった。
「はい、約束ね。さ、お部屋に戻りましょう。お姫様」
急に冗談めいて、まるで王子様の様な振る舞いで、手を出してくる。
そっと顔をうかがうと、さっきの真剣な顔は何処へ行ったのか、いつものニコニコした屈託の無い、無邪気な、少し眩しい笑顔だった。
私は舞子さんの手を、そっと取り、立ち上がる。
「ばいばい、死神さん」
いつもの部屋の、いつものベッドへ戻る。私にとっては、もっとも悲しい時間。寂しいような、虚しいような、なんだかどうしようもない絶望感。まるで、楽しい夢から覚めてしまったような、名残おしい感覚。
それを察してなのか、舞子さんは、いつも手を繋いで病室まで連れてきてくれる。私は、『子供みたいで恥ずかしいから嫌だ』と、言ったのに。いつも、私が死神さんの隣に居る時は、夜勤明けの日でも、まるで友達を心配する様な、そんな真剣さで、私を迎えに来る。時には怒り、時には笑う。まだ出会って、一月程度なのに、私はこの人のいろんな所を見てきた気がする。

そして、いつもの、腫れ物に触るような、少し距離を置いた、看護師さん達とは違う何かを感じ。この人の前では、自然な自分で居られるような気がした。
でも、すぐにこの時は終わる。いつものベッドに戻り、お互いが日常に戻る時……。
「さっきは怒鳴ったりしてごめんね」
私をベッドに座らせ舞子さんがシュンとして謝る。まるで友達に謝るように。少し気恥ずかしそうに、照れくさそうに、それでいて本当に申し訳無さそうに……。舞子さんは、私の事を叱ってくれたのに。
「そんな、私が変な冗談言ったから、悪いんだよね？　舞子さんは……その、あの、私の事、想って言ってくれたんだよね？　だから、そんな……謝らないで！　その……あと……あ、ありがとう……」
本当に恥ずかしかった。本当のありがとう。を、言う事がこんなに恥ずかしいなんて思いもしなかった。それでも、この人にはちゃんと伝えなきゃいけないって不思議と思えた。
「ぷっくくくく、あはははははは」
シュンとうつむいていた舞子さんが、突然大笑いしだした。
「ちょっ、な、なんで笑うの！？」
真剣に謝ったのに、なんで！？　心の中が混乱して、気恥ずかしさとあいまって顔がどんどん火照ってゆく。
「だって、美羽ちゃんがいつになく、しおらしいから何か、可笑しくって」
「な、しおらしかったのは舞子さんの方でしょ！　いつになく真剣に謝るから。なんかこっちが申し訳なくなって……。もー、なんなのー！」
笑い続ける舞子さんに、批難の声を上げる。
「ごめん、ごめん。何かしおらしい美羽ちゃんって、可愛くっていつもとのギャップがね……くくくくく」
まだ笑っている。

「もー、仕事あるんでしょ！　早く行ってよ！」
布団を被って。きっと真っ赤になっている顔を、隠す。
「ごめんって！　あれー今の台詞でぐっとクる。はずなんだけどなー」
「もーほれは、おほこのひほにまいこはんあ、いはれて、ぐっとくるこほでしょ！」（もー。それは、男の人に舞子さんが言われて、ぐっとクる事でしょ！）
布団の中で、くぐもった抗議の声を上げる。
「美羽ちゃんはこういうのはダメかー。じゃ、また新しいのを考えないと」
「次にあったら覚えとけよー！」
三流の捨て台詞を残して、嵐の様な人は、去っていった。やっぱり舞子さんは掴みどころが無い……。でも、必ず別れ際を寂しくしない。決してさよならをしない。いつ居なくなってもおかしく無い私に、「また」と言ってくれる。その優しさと、嵐が過ぎ去った後の静けさに、私は久々に泣いてしまった。

夕日の友情

「それでね！　……って舞子さん聞いているの？」
いつもの様に、舞子さんに楽しいお話をしてもらおうと思ったのに。今日はなんだかうわの空で、舞子さんがボーっとしているので。仕方なく、私が最近読んだ本の話をしていたのだけれど、舞子さんは、聞いているのか、いないのか、なんだか浮かない顔で、一点を見つめていた。
「……っへ？　なんだっけ？」
「もー！やっぱり聞いていなかったんだー」
「あははは、ごめん、ごめん。なんかボーっとしちゃって……」
ごめん、ごめん。はこの人のクセ。2回謝る時はテキトウな時。それを聞いて少しだけ安心した。
「舞子さんが、そんな風になるなんて、珍しいね。いつもはもっと、ノリノリで、仕事も忘れて聞いてくれるのに」
「何かあったの？」
いつもと様子の違う舞子さんに、何か面白い出来事があったのでは無いかと、興味本位で聞いてみる。
「ううん、何でも無いわ。あ、まだ仕事あったんだ。行かないと」
あまりに素っ気無い返事と、無理のある笑顔……。
なんだか妙に苛立ってきた。
「舞子さん！　何でも無い訳無いよ。私は舞子さんと出会って、そんなに日も経ってないけど、舞子さんの事ちゃんと見てきたつもりだよ？　今日の舞子さんは何か変だよ！」
ついつい声を荒げてしまう。こんなに一所懸命になったのは、いつ以来だろう？　そんな風に思い返して私はハッとする。
また……繰り返そうとしている……。
そう思うと、これ以上踏み込んではいけない気がして、私はうつむいてしまった。

「ご、ごめんなさい。でも私は何時もどおりだから！　また後で来るからね！」
そう言って舞子さんは出て行ってしまった。
私はジッと、シーツを見つめたまま、動けなくなってしまっていた。

「ねぇねぇ、死神さん」
爽やかな日差しに、穏やかな風、少しくすんだ白いベンチの上にまったく似つかわしく無い黒い塊。まるでそこだけぽっかり穴が空いてしまった様な、深淵の様な、それでいて、まだまだ底の見えない、『黒』に、私は問いかける。
「私……なんで生まれてきたんだろう？」
ついつい、こんな事を、言ってしまう。死神さんは、この黒猫は、いつもこうして聞いているのだか、聞いていないのだか、寝ているのだか、起きているのだか、わからない様子で、ただ隣に、在ってくれる。
「こんな事言ったら、また舞子さんに怒られちゃうね」
どうしてか私は、この黒猫に話かけてしまう。明確な答えどころか、返事すら返って来ない相手なのに、他の猫の様に愛想よく頬を擦り付けて来るわけでも、可愛らしい声で鳴くわけでも無いのに。
そうしてひとしきり、死神さんにいろいろ問いかけた後。いつもなら本を読むところなのだが、今日はそんな気分になれなかった。
今朝の舞子さんの様子と、過去の記憶が頭の中でグルグル回って、どうして良いかわからず、自分の弱い体を呪って、それでも死が恐くて、でもお母さんと、お父さんが、一所懸命に私の為に無理している事を思うと、早く死んでしまった方が良いのではと思ってしまう。
私はきっとバカだ。お母さんも、お父さんも、そんな事は望んでいない。だけど私は生きていて楽しく無い。私よりもっと酷い病気の人が居る事も、命の大切さも、わかっているつもりだけど、実感

が無い。　私は『生きている』のだろうか？子供の頃から、ずっと病院で過ごし、本を読むこと位しかする事も無く。そのくせ、ちょっとはしゃいだり、無理をするだけで、体が悲鳴をあげる。
「そう言えば、あの時もそうだったっけ……」

それは私がまだ都会の小児病棟に居た頃の話。
「優（ゆう）お姉ちゃん！」
無邪気な声で、隣のベッドのお姉ちゃんに問いかける。
「しーっ、あまり大きな声を出すと、看護師さんにばれちゃうよ？」
隣のベッドから、囁くような声が聞こえてくる。
「はーい」
私も囁く様に、でも、喜びを隠せずに、はしゃいだ声で返す。
その頃の私は、ただ毎日が退屈で、隣のベッドの優お姉ちゃんが語ってくれる、不思議でおかしな物語に、夢中になっていた。そして、昼間に話してもらうだけでは足りず。こうして、ひっそり夜中まで、優お姉ちゃんにお話を聞かせてもらっていた。
「そうして、お星様になった女の子は、大好きな男の子に迷いの森から出る道を照らし、未来永劫、その子孫まで幸せになれるように、空から見守り続けました」
「おしまい。ねぇ美羽ちゃん、どうだった？」
「グズっ……ズズっ」
「美羽ちゃん？」
「女の子が可哀相だよー。グズっ……」
声が震えてしまう。
「ふふっ、泣いているの？」
「うーっ、だってぇ……。大好きな男の子と一緒になれなかったんだよ？　しかも男の子が他の人と幸せになっているなんてぇ……ズズっ」
溢れる涙と一緒に、出てくる鼻水を懸命にすすりながら話す。それぐらい話に入り込んでしまっていた。

「そこまで読んでくれたんだ？　でもね、このお話はハッピーエンドなのよ？」
優お姉ちゃんは、誇らしそうに言った。
「へ？　なんでー！？」
あまりに驚いて、大きな声を出してしまう。
「しーっ！」
優お姉ちゃんの慌てた声に、ハッとする。
「ご、ごめんなさい……でも……ズズっ……なんで？」
「この女の子はね、元々自分の命が長く無い事を知っていたの。そうして自分の大好きな人の為に何か出来る事は無いかって思い悩んで、考えて、考えて、そうして自分で出した答えだから後悔はしていないの。そして自分が一番、男の子の事を幸せに出来たって、そう思っているから。このお話は、ハッピーエンドなのよ」
そう優お姉ちゃんは、言ったけれど、この頃の私にはわからなかった。
「でもやっぱり可哀相……ズズっ」
一言呟いて、鼻をすする。
「ふふっ、じゃあ今度はとびっきりあまーい恋物語にしましょうね」
私の不満そうな声を聞いて、優お姉ちゃんは、幼い子に言い聞かせる母のような、優しい声で言ってくれた。まさに「優」と言う名前の現す通り、優しく暖かいお姉ちゃんで、私は、優お姉ちゃんが大好きだった。
「うん、約束ね！」
「うん……約束」
その約束は果たされる事は無かった。
連日の夜更かしと、はしゃいだせいか、私は、次の日から高熱を出し。別の部屋に移され、一月ほどして戻った時には、優お姉ちゃんは居なくなっていた。
私は何日も泣いた。そして、何度も体調を崩し、転院を繰り返し、新しく出会う人とは必要以上に親しくならないように、なっていた。

同じ悲しみを、何度も繰り返さない様に。
だけど私は、忘れてしまっていた。舞子さんという特異な、いつも出会ってきた人と違う。優お姉ちゃんとも、まったく違う。でも、優しく暖かい。正直、私には眩しい。
だけど、私にはどうして良いかわからなかった。今までは自分が傷つきたく無くて、人とは必要以上に仲良くならなかった。だけど、今度は違う。舞子さんに泣いて欲しくない。これ以上、舞子さんと親しくしない方が、良いのかもしれない。舞子さんの為に……。
でも、それはもう少しだけ待たなければならない。私は、舞子さんに幸せになって欲しい。だから今朝の様な偽者の笑顔は、私が今までしてきたような、偽りの仮面は、舞子さんには似合わない。
「行って来るね」
私は、死神さんにそう告げて、ナースセンターに向かって歩きだした。

「あの！」
通りすがりの看護師さんに、尋ねる。
「舞子さん、あっ、小鳥遊さん、どこにいるか知りませんか？」
小鳥遊さんと呼ぶのは、なんだかむずがゆい様な、照れくさい様な、不思議な気持ちになった。
看護師さんは、少し怪訝そうな顔をして
「小鳥遊さんは……今、少し大変な仕事しているから……ちょっと後じゃ、駄目かな？」
大変な仕事？なんだろう……。でも仕事じゃ仕方ないよね。
そう自分に言い聞かせ、それでも何かしたくて。
「わかりました。後にします。あ、あと、今日、小鳥遊さん、何か様子が変じゃありませんでした？」
何か手がかりでも掴めないかと、探りを入れてみる。
「！？」
看護師さんは、すごく驚いた表情で、私を見た。

「もしかして、あなた……美羽ちゃん？」
虚を衝かれ、今度は私が驚きの表情になる。
「ごめんなさい。違ったかしら？」
私が、驚いて固まって居ると、看護師さんが、申し訳無さそうに言う。
「い、いえ。美羽ですけど。どうして私の名前を？」
聞いた瞬間に、しまったと思った。舞子さんの時みたいに、私が覚えて無かっただけかもしれない。
しかし、それは杞憂に終わった。
「なるほどね。あなたが美羽ちゃんね。確かに可愛いわ」
品定めする様に、見られ、少しムッとする。それに、なんなのだろう？この人は、どうして私の名前を、知っているのだろうか。
「舞子からよく話を聞いているのよ。あなたの事」
私の疑問を見抜いたように、疑問点を解消してくれた。なるほど、舞子さんの仕業か……。
「そ、そうなんですか。それで、舞子さんは、私の事をなんて？」
正直、気になる。他の人に私の事を、どんな風に話しているのか。
「んー、それはナイショ。そういう事は、良い事でも、悪い事でも、本人に伝えるべきじゃないでしょう？それに、あなたにとって舞子は、そんなに信用出来ない人かしら？」
どうやらこの人も、舞子さんの知り合いだけあって、なかなかクセ者のようだ。
「信用出来ないですね」
私は、キッパリ断言する。
「ぷっ……あはははは」
突然、笑い出されて、困惑する。私はそんなに、おかしな人間なのだろうか。
「やっぱりあなた、舞子の言うとおりの子だわ」
ああ、そう言う事か。何だか何を言われていたか、なんとなくわかってしまった。

「そうね、あなたなら良いかもね」
看護師さんは、ひとしきり笑った後、突然真剣な顔で呟いた。
「何が良いんです？」
最初とは、反対に私が怪訝な顔をして、聞いてみる。
「うーん、後2時間くらいしたら、屋上に行ってごらんなさい。きっと舞子に会えるから。あ、屋上は日が落ちると風もあって、寒いから、ちゃんと暖かくしてね。あなたは病人なのだからあまり無理は、しないように」
そう言って人差し指でおでこを突かれた。
「えと、なんで屋上なんですか？」
「それは行ってみれば、わかるわよ」
そう言って病室に戻りなさいと、クルリと1回転させられ背中を押された。
「あ、そうそう。一つあなたと同じ意見があるわ」
振り向いて疑問符を浮かべて看護師さんを見る。
「舞子は信用出来ない」
と、ウィンクされてしまった。舞子さんは、きっと、誰と居ても、どこでも、あんな人なのだろうなと、思い知らされた。
「ありがとうございました」
少し頭を下げてお礼を言う。
「良いわよ。それより舞子。へこんでいると思うから、力になってあげてね」
意味深な言葉に、あっけに取られ、舞子さんに一体何があったのかと、思案しているだけで、あっという間に2時間が過ぎてしまった。
舞子さんがへこんでいるって……。一体何が、あったのだろう？男の人に振られたとかかな。そんな事を考えながら、屋上に続く階段を登る。建物自体は五階建てで、五階まではエレベーターがあるので、そこから階段を登るだけなのだけれど、想像以上にきつい。自分が改めて病人なのだと、思い知らされる。この弱い体がとても

歯痒い。屋上の重たい扉を、ゆっくりと開ける。
ぶわっと、風が吹き抜け、無機質なコンクリートの色と物干し、それと、とても鮮やかなオレンジ色が、目に飛び込んできた。その中に、ぽつりと白い絵の具を垂らしたように、屋上のフェンス越しに夕日を眺めている人が居た。舞子さんだ。
「舞子さん」
ゆっくり息を吸い、まるで普通に呼吸するように、自然な形で呼ぶべき名前を呼ぶ。
舞子さんの肩がビクッと震え。腕で顔を、ゴシゴシしたあと、ゆっくり振り返る。その行動で、舞子さんがここで何をしていたのか、わかってしまった。
「美羽ちゃん……ダメじゃないこんな所に来ちゃ。患者さんは立ち入り禁止よ。」
遠くから静かに、それでも透き通る声で、努めて明るく振舞おうとしているのに、声が少し震えている。夕日を背にしているせいで、表情は見えない。
私は、黙ってゆっくり、舞子さんに近づいていく。
「美羽ちゃん！　ダメ！　こっちに来ないで。私がそっちに行くから！」
今度は、少し慌てた様子で、こちらに走ってくる。
屋上の風は、想像よりずっと強くて、冷たい。
それでも、一歩でも早く、舞子さんに近付きたい。私は、歩くのを止めなかった。
でも、数歩歩いた所で、舞子さんに、一気に距離を詰められてしまった。舞子さんの見ていた景色を、私も、見たかったのに……。
「もう！　どうして屋上なんて来たの？今日は風も強いし、寒いし、それに一人で階段を登ってきたの！？」
すごい剣幕で、捲くし立てられる。
「ナースステーションで聞いて……。舞子さん、きっとへこんでいるって……。朝から様子がおかしかったから……」

はぁはぁと、呼吸が乱れていく。ちょっと階段を登って、ちょっと風に当たっただけなのに・・・・融通の利かない体に、苛立つ。
「美羽ちゃん！　もう、こんな無茶して……ダメじゃない。とりあえずお部屋に戻りましょう。」
優しく肩を抱いて、黙って部屋まで連れて行かれる。エレベーターでの沈黙が少し重い。
そしていつものベッドに寝かされ、体温計を渡されたので、いつもの手馴れた動作で、体温を計る。もう自分でも体が熱い事には気付いているけれど……。
「舞子さん……」
ゆっくり沈黙を破る。
「どうして屋上で泣いていたの？」
さっきまで2時間も最初の言葉を、なんにしようか迷っていたのに、口をついて出たのは何の気も利いていない、言葉だった。
「ありゃ、ばれちゃったか……」
いつものお調子者の様子で、舌を出して、明るく振舞っている。
「お化粧……崩れてすごい事になっているよ」
これは本当。元気な時や、こんな深刻な状況じゃなかったら、お腹を抱えて笑っているかもしれない。
「へ？　うそ？　やだー！　見るなー！！」
これはいつもの調子みたいだ。手を顔の前でうろうろさせて、しばらくして諦めたのか、私に向き直る。
「もう、美羽ちゃんがあんなところに来たから、なんだからね！」
少し怒っているようだ。いや、大分かもしれない。
「舞子さんが露骨にへこんでいるんだもの、だから心配して行ったの」
私も少し怒って、頬を膨らませながら言う。
「もう……」
ふぅっとため息を吐いて、観念したのか、舞子さんはゆっくりと話しだす。

「昨日、私の担当していた患者さんが、亡くなったの」
それを聞いた瞬間、私はすごく後悔してしまった。私が一番心配していた事……。
私が死んだ時も、きっとこの人は泣くだろう。そういう事を、知ってしまった。もうこれ以上この人に、踏み入っちゃいけない。それなのに声が出なかった。
「その人とも、色んなお話をして、ふざけ合って、冗談を言えるくらい仲が良かったのよ」
さらに、私に追い討ちをかけるように、舞子さんは続ける。
「私、ダメなのよね、いつも考え無しに患者さんと仲良くなって、その度に泣いて」
これ以上聞いちゃダメだ。それなのに、何を言って良いかがわからない。ただ苦しかった。
「で、婦長さんに毎回怒られちゃって……何度も、お前は看護師に向いてないって。何度言えばわかるんだって」
あぁ、時間を巻き戻したい。私はどうしてこんな事を、してしまったのだろう。
そんな後悔ばかりが、押し寄せた。
「でもね。私は後悔してないの」
その言葉に、衝撃を受けた。あんなに泣いていたのに、婦長さんに怒られるくらいうわの空で、傍から見ても落ち込んでいたのに。
「私はね、どんな人とでもちゃんと向き合って生きたいの」
「たとえその人の命が、後1日だって、何時間だって、その人のお友達になりたいと思うわ」
「もちろん全ての人と、そうなれる訳では無いけど、せめて私が担当する人、くらいは全力で向き合いたいなって。そう思っているの。婦長さんには、よく怒られちゃうけどね。私の事、心配してくれているんだって、わかるから、テキトウに受け流しちゃうけどね。」
最後に舌を出して、少しふざける。この人は、いつもこうやって暗くならないようにする。

だけど私は、わかってしまった。この人は『信用出来ない』人だ。
「泣きたかったら、泣けば良いのに、無理して格好つけて、私の前でもあんな作り笑顔で取り繕って、屋上で、一人で泣いて、自分の担当の患者さんに、心配かけて、本当ダメダメだよね」
舞子さんが、驚いた顔で私を見る。
「だけど舞子さん、言ったよね？　どんな人とでも友達になりたいって。私とは友達じゃないの？　それとも、私の前では泣けない様な、上辺だけのモノなの？　舞子さんの全力って！」
私はたった今、この人に教えてもらった。友達と全力で向き合う。という事を、例え別れが待っていても、悲しみが待っていても、それにめげずに人と触れ合って行く事の大切さを。
「私はね、自分の病気を言い訳に、逃げていたの。誰かと必要以上に仲良くなっても、すぐにお別れが来てしまうって。でも舞子さんは、決して私を特別扱いしなかった。病人なのに驚かすし、すぐお腹抱えるくらい笑わせるし。他の人にも、そうなんでしょ？　婦長さんに何度も怒られるくらいの人と、仲良くなって、別れて来たんでしょ？」
私の全力が口から溢れ出す。
「もし！　今それだけの友達では無いと言うのなら。私の友達になってください！　全力で向き合えるような友達に」
ピピッピピッ……さっきの体温計が体温を計り終えた電子的な音を告げる。なんとも間の悪い。
顔が熱とは別に赤くなっていく。
「ぷっ……あはははは」
どちらとも無く吹き出してしまった。二人でしばらく笑った後、舞子さんがポロっと涙を流し始めた。
「あれ、可笑しいのに何だか泣けて来ちゃった」
自分の感情が計り切れないのか、ポロポロ溢れてくる涙に、戸惑っている。
「舞子さん。泣いても良いんだよ？」

ベッドの上から手を広げる。
舞子さんは、すんなり私の腕の中に包まれて、そっと泣いた。
私よりずっと年上なのに、なんだか頼りなく心もとない。そして可愛らしい。舞子さんの新しい一面が見れて、すごく嬉しい気持ちになった。そして最後に舞子さんはこう言ってくれた。
「これからも、友達として、改めてよろしくお願いね。美羽ちゃん」

産子は日傘に包まれて

「ぅー」

低いうなり声を上げる。

「頭が重いよー」

あれから私は、熱を出した。いつかの時の様に。でも今回は、熱を出しても別れたりしない。めそめそ泣いたりもしない。ただ正直、体は辛い。

「はいはい、あんな無茶するからですよー。九月さん」

事務的な言い方をする看護師さん。私の友達の、小鳥遊舞子さん。何故こんな事務的な言い方をするのかと言うと。

「どうして屋上なんて行ったりしたのですか？　しかもあんな風の冷たい時間に」

このメガネが知的で、いかにもデキる感じの女性。私を担当してくれている先生。川崎（カワサキ）　玲（レイ）さんの前だからだ。

「えーと、それは夕日が綺麗だったから……つい……」

本当の事は言えない。舞子さんの為に行った、なんて言ったら、舞子さんならクビになりかねないし、昨日、私に舞子さんの事を教えてくれたカオルさん（後で舞子さんに聞いた）にも責任を負わせてしまう。だから私はテキトウに嘘を吐いた。

「もう、あなたの体の事は前から言っている様に……」

「まぁまぁ川崎先生、今は体が辛そうなので、お説教は後にしてあげてください」

舞子さんが強引に割り込んでかばってくれる。

「……っ。もう、こんな無茶はしないでくださいね」

何か言いたげな川崎先生も言葉を飲み込んで、急に冷静を装って、簡潔に済ませる。

「はい。ごめんなさい先生」

シュンとしてしおらしく……。私はずるい。病気を利用して、同

情を買って怒られない様にする術を知っている。
「とにかく、これからはこういう事の無いようにしてくださいね」
そう言って病室を出て行った。不機嫌そうだったけれど。私は、不謹慎かもしれないけれど、少し嬉しい気持ちになっていた。こんな風に叱られて、誰かをかばって、かばわれて。秘密を共有して。今まで、外の世界から見ていた別の世界に急に溶け込めたような不思議な感じ。先生が怒っているのも、私の事を想ってだと思うと、それも少し嬉しく思える。こんな風に考え方が変わったのは、紛れも無く舞子さんのおかげだ。
「さっきのは貸しね。美羽ちゃん」
なにを思ったのか舞子さんが変なことを言い出す。
「貸しって？　私何かしてもらったっけ？」
「ほら、川崎先生のお説教から救ってあげたじゃない」
「えー、元はと言えば舞子さんが、あんな所でたそがれる趣味があるからじゃない」
「あれは！　ええと一応、私なりに亡くなった患者さんへの弔いの儀式と言うか、けじめをつけていると言うか……、まぁ色々！　私にも考えがあるの！」
舞子さんが恥ずかしそうにしているのが、何だか新鮮だった。
「とりあえずカオルには、今度何かご馳走でもしてもらうとして、美羽ちゃんには何をしてもらうかなー」
と、鼻歌交じりにテキパキと仕事をこなしている。この人はこれで仕事が早く、ほとんどミスもしないので、私は誰にでも取り得ってあるものだな、と思っていた。
「まあ、お礼よりも、まずは美羽ちゃんに元気になってもらわないとね」
「元気が無いんじゃ、何も頼めやしないものね」
そう言いながらご機嫌な様子で、病室を出て行った。
「というか、昨日の舞子さんってなんだったのだろう……」
思わずそんな事を呟いてしまったが、頭の重さと体の気だるさ、

寒気に布団に潜り込み。そのまま寝てしまった。

「ふぅ……」

まだ体が重たい。自然とため息が漏れる。ふと窓の外を見ると、いつものベンチにいつもの死神さんが、お昼寝をしていた。

「いいなぁ……」

いつもの様に呟く。

「何が良いの？」

「うひゃあ！」

突然独り言に反応されて驚く。

「こらこら、まだ熱あるでしょう？　あんまりはしゃいじゃダメよ。美羽ちゃん」

舞子さんが、何食わぬ顔で、マイペースに告げる。

「舞子さんが、急に声かけるからでしょ！」

まだ心臓がバクバクしている。本当にこの人は良くわからない。

「あら、寝ているのを邪魔しちゃ悪いと思って、静かにしていたのに、起きてすぐ親友の顔に気付かずに、外を見ている美羽ちゃんが悪いのよ」

のほほんとした感じで、近くにあった蜜柑を剥き始める。

「その親友が熱を出しているのに、なんでそんなにマイペースなのさ」

思わず突っ込んでしまう。本当は舞子さんの為に……とか言いかけたけど、そんな事は無粋な気がして止めておいた。

「私が慌てても、美羽ちゃんの熱は下がらないからね。はい、蜜柑。ビタミン補給は大事よ？」

綺麗に白皮まで剥いて渡してくれる。一口、口に運ぶと甘酸っぱい味が広がって、まるで今の心境のようだった。

つい、昨日はあんなに熱くなっちゃったけれど。今思うとずいぶん恥ずかしい事を、色々言ったような気がする。

「で、何が羨ましいの？」

「へ？」
蜜柑の味で恥ずかしい回想に浸っていた所で、急に問いかけられて困惑する。
「さっき、窓の外を見ながら良いなぁって呟いていたでしょ？」
ああ、その事か。
「死神さん。あそこのベンチで、気持ち良さそうに寝ているから」
いつも私が居た場所を、もう一度ぼんやりと眺める。
「あそこ、美羽ちゃんも好きだものね。でも、もう少しすると日当たりが良すぎて、暑くなっちゃうかもよ？」
「そんな身も蓋も無い事を……」
まあ実際気温の高い日は、少し暑さを感じる事もあるけれど……。
「あ、でも、死神さんは夏でもあそこに居た気がするわね」
「そうなんだ。私もまたあそこで本を読みたいなぁ」
「また読めるわよ。熱が冷めたらね。だから今は、ゆっくり休んで体を治さないとね」
なんの根拠も無いのに、何故だか信じられる気がした。
「さ、もう少し横になって、ゆっくり眠りましょう」
そう言って私の体をゆっくり倒す。舞子さんの言葉が、まるで魔法の様に染み込んで、私の瞼を重くする。瞳を閉じるその瞬間、私は薄れていく意識の中で思った。

……舞子さん私服だ……

「そろそろ良いですね。体も動かさなさ過ぎるのも、良くないですしね」
「でも！　前みたいな無茶は、絶対にしてはダメですよ」
川崎先生が念を押すように言う。
「はい。川崎先生！」
「……九月さん、何か変わった？」

「へ？　何か変なところありますか？」
特に変わったような事は、無いはずだけれど。
「いえ、何だか表情が柔らかくなったような気がしたから」
その言葉にドキッとした。そういう事なら心辺りが無くも無いから……。

鏡で顔を覗いてみる。そんなに人から見て変わったのだろうか。
「前髪伸びたなぁ」
つい独り言を言ってしまいハッとする。また舞子さんが居たら……と、辺りを見回してみてもその気配は無い。
「そうそういつも、居ないよね。」
コンコン
「ひゃあ！」
安心した所にノックの音が響き、驚きの声が漏れてしまう。
「ん？　美羽ちゃん。入るわよー」
舞子さん……。あなたは人を驚かす天才です。
そして、もう独り言は言わないようにしよう。と、三度目位の誓いを立てた。
返事を待たず舞子さんが入ってくる。
「ねぇねぇ、美羽ちゃん」
舞子さんが、不敵な笑みを浮かべている。
「な、なんですか？　舞子さん」
恐る恐る、聞いてみる。
「今日、お外出ても良いって、言われたんだってね」
「うん、そうだけど……。なんで舞子さんが、そんなにニコニコしているの？」
「あら、そういう美羽ちゃんは何で、そんなに顔が強張っているの？」
こんな無邪気な顔をされたら、警戒してしまう。この人のこの顔は、二～三歳の子供の様に、凶悪だ。

「そ、そうかな？　私は嬉しいはずなんだけどなぁ」
嬉しいのは本当。だけど……。
「じゃあもっと素直に嬉しそうな顔するの！」
「だって舞子さんの顔が不審なんだもの」
率直な感想を述べる。
「あー、失礼な。じゃあこのプレゼントは止めにしようかな」
「プ、プレゼント！？」
この人は、こういう方向でも驚かせてくるのか。
「じゃーん！」
待っていました。と、言わんばかりに、後ろ手に隠していた物を見せる。
それを見て私はさらに驚いた。
「傘だ……」
白い、真っ白な傘、フリルとリボンの付いた、大よそ雨を凌ぐには適さない。でも可愛らしく、それでいてどこか大人びた、日傘。
「プレゼントってそれを私に？」
「そうよ、気に入らない？」
「そ、そう言う訳じゃないけど！」
違う、すごく嬉しい。だけど、だけど！
「そ、そんなの受け取れないよ！」
「どうして？」
どうしてって、いくら友達の約束をしたとはいえ、私と舞子さんは、患者さんと、看護師さん。
それに、いくら友達とはいえ、何でも無いのにこんな高価そうなもの、受け取れない。
「だって……」
でも、言葉が続けられない。まるで友情を否定してしまうようで。
「だって、私と舞子さんは患者さんと看護師さんでーとか、こんな高価そうなものーとか、考えているでしょ？」
「！？」

考えている事がピタリと言い当てられて、胸がドキンと高鳴る。
「もう、美羽ちゃんはそういうとこ真面目なのよねー」
「な、だって！」
文句を言いかけて、今度は舞子さんの指に、遮られる。
「残念ながら、私は今日、看護師の小鳥遊舞子じゃないのよねー。美羽ちゃんのお友達としてお見舞いに来たの。お友達のお見舞いに手ぶらじゃなんだからなーと思って。お花でも持って来ようかと思ったのだけど、お花は毎回美羽ちゃんのお母さんがいろいろ買ってきてくれるでしょう？だから、何か無いかなー、とデパートをふらふらして、たまたま見かけたこの日傘に一目ぼれして、買ってみたのだけれど。残念、差してみたら私みたいなスラッと背の高い美人にはちょっと、ほんのちょっとだけ可愛らし過ぎたのよねー。そうして友達で似合いそうな子を探したら丁度、美羽ちゃんの顔が浮かんだわけ」
わざとらしい設定を、舞子さんは、身振り手振りで説明する。なんでこの人はいつもこうなのだろう。
「どう？　受け取ってくれる？」
「もし、受け取らなかったら？」
「大丈夫。受け取ってくれるから」
そう言って、舞子さんは笑った。私は負けた。嬉しくて、嬉しくてたまらない敗北だったけれど、同時にやっぱり自分はずるいと思ってしまった。だって私には他の人にしてあげられる事は何も無いから。そう思うと、たまらなく悔しい思いが込み上げて、涙が溢れてきた。
「み、美羽ちゃん？」
さすがの舞子さんも、こんな反応されるとは思っていなかったのだろう。困惑の表情で、私を見ている。早く、早く何か言わないと……。そう思う程、涙が溢れて、上手く喋れない。
「ちが、違うの……嬉しいの……に……うぅ……わた……ひ……」

何を告げて良いのかわからない。言葉が続かない。色んな感情が渦巻いてぐるぐる回っている。ただ、ただ涙が溢れる。
「美羽ちゃん、泣きたい時は泣いても良いと言ってくれたのはあなたよ」
そう言って舞子さんがそっと抱きしめてくれる。私は声をあげて泣いた。それはきっと産声。この時はまだ気付かなかったけれど、私はこの時に生まれたのだと思う。

その後、少しして落ち着いた私は、顔を洗って、舞子さんの誘いで、あのベンチへ向かった。
「んー」
舞子さんが伸びをする。
「ここに座ったのは始めてだけど、気持ち良いわねー」
舞子さんはさっきの涙について、何も聴こうとしなかった。その優しさが羨ましい。私もこの人のようになりたい。強くて優しい人間に。そう思うようになっていた。
「ほら、ここに立てかけてっと」
そっと日傘を開いて、丁度良い影を作ってくれる。影なのに暖かく感じる。不思議な感覚。
「ねぇねぇ、死神さん。今日は私のお友達を紹介するね」
「私ねここに来ると、いつもこうやって死神さんに話しかけているんだ」
舞子さんに、私の秘密を話す。少しでも本物の友達になりたいと、急いでいたのかもしれない。こんな事をしなくても、きっと舞子さんは友達で居てくれるのに、私は焦っていた。
「ねぇ、死神さんも知っているでしょ？小鳥遊舞子さん、ここの看護師さんだよ。」
舞子さんを紹介する。こうやって確かめないと、不安だったのかもしれない。この頃の自分は、とても不安定だった気がする。でも私は、この時はまだ生まれたての子供だった。確かめながらしか、

前に進めなかった。
「小鳥遊舞子です。よろしくね。死神さん」
舞子さんが私に合わせて、お辞儀をしてくれる。そんな些細な事が嬉しい。
でも死神さんは、いつもどおりお昼寝の真最中。私たちの事なんて、気にする様子も無く、すやすやと眠っている。
「あらあら、こないだの美羽ちゃんみたい」
「へ？」
私は不意に自分の名前を出されて間抜けな返事を返す。
「ほら、屋上に来てくれた次の日、熱を出して寝込んでいたでしょう？　あの時の美羽ちゃんてば、お昼持って行っても起きなかったんだから」
う、そう言えばその後も、食欲出なくて、点滴のお世話になったっけ。
「それにね、眠っている間も、舞子さん！　とか、情熱的に私の名前呼んでくれて、私はその間ずっと手を握ってあげていたのよ？」
「舞子さん……。どこから嘘で、どこから本当？」
私は疑いの眼差しで舞子さんを見上げた。
「あら、全部本当よ。私の妄想ではね」
「ずるい！　教えてよー」
「良いじゃない。本当でも嘘でも、あの時、私は美羽ちゃんに救われた。それだけは事実よ」
時々この人の言う事は難しい。真意を計るのはもっと難しい。
「何……それ……ずるいよ」
「うふふ、ありがとう。最高の褒め言葉だわ」
ずるい！　ずるい！　ずるい！　なんでこの人は、こんなに眩しく笑えるのだろう。そして、なんでこんなに、私の顔を熱くさせるのが上手いのだろう。
「いいなぁ、舞子さんは」
ぽろっと、そんな事を言ってしまう。

「あら？　私の抜群のプロポーションがそんなに羨ましい？」
急に舞子さんは体をくねらせてセクシーなポーズを取る。確かに絵にはなっているけれど。
「自分で言う？　普通」
「言っておけば、そうなるように生きないといけないでしょ？　私、嘘は苦手なの」
「嘘ばっかり」
二人で笑いあった。
そうして、しばらく談笑していると舞子さんが異変に気付いた。
「あら、死神さんってば……」
そう言われて死神さんの方を向く。いつもの日の当たっている所には居ない。
「ほら、美羽ちゃんそこ」
舞子さんに指差された場所に目をやる。
「あ……」
死神さんは、私に触れるか触れないかの距離。ギリギリ日傘の影の中に入り込んでいた。
「さすが猫ちゃんね、一番気持ち良い場所がどこか、知っているのね」
確かに、日差しがポカポカして気持ち良い時もあれば、刺すように熱い日もある。日向がいつでも気持ち良いとは限らない。
「日陰も在って良いんだね」
私は少しだけ、自分の存在が在っても良いんだと思えた気がした。

「美羽ちゃん！　熱を出したんだって？　大丈夫？」
今日はお母さんとお父さんが、お見舞いに来てくれる日。お母さんは毎週。お父さんは月に一度は顔を出してくれる。
「うん、大丈夫。すぐ元気になったよ」
「そうそう、夕日が見たかったから屋上に行ったんですって？　それを聞いてお父さんがこんなの買って来てくれたのよ」

そう言って大きな風呂敷から額縁に入った立派な夕日の絵をどーんと見せる。
ああ、あの嘘がこんな結果になるなんて……。
「あ、ありがとう。こんな立派な絵……高く無かった？」
「美羽はお金の事なんて気にするな」
素っ気無いお父さん。口下手であんまりおしゃべりはしないけど、私が欲しがったりしたものを、さりげなく嗅ぎつけては買ってくる。
人には人の優しさがあるのだろうけれど……。無茶だけはしないで欲しい。
それは、お父さんも、お母さんも、一緒だろうけれど。やっぱり心配だ。
お母さんはお母さんで、都会で流行っている物や、本、CDなどを買ってきてくれるけれど、正直、私はあまり流行の賑やかで華やかな音楽は、好きでは無いので、大体は読書になってしまう。
「お母さん」
「お父さん」
「ありがとう」
なんだか無性に伝えなきゃいけ無い気がして口から勝手に言葉が出た。私はいつもこうだ、出したい時に出せなくて、出さなくて良い時に出してしまう。
この言葉でお母さんを泣かせてしまった。
「ごめんね、ごめんね、こんな弱い体に産んでしまってごめんね」
この言葉が頭の中でループする。お母さんが顔をぐしゃぐしゃにして泣いている顔が、フラッシュバックする。お父さんが気まずそうに、顔を逸らしている姿がリフレインする。
そして最後に思い浮かぶ顔がある。最初に見せてもらった眩しいほどの笑顔。舞子さんの顔が、今でも鮮明に思い出せる。そしてあの日傘の下の語らいを、あの日、密かに死神さんに誓った事を。本当に「生きる」誰かの為に何かしようと。私は足りない頭で必死に考えたが、いまひとつ答えに辿り着けずに居た。

「ねぇねぇ、死神さん」
「私に出来る事ってなんなのかなぁ？」
私の日課、死神さんに話しかける。儀式。舞子さんにもらった日傘のおかげか前より距離が縮まった気がする。と言うか物理的には近付いたんだけど……なんだか、もう少しだけ死神さんが歩み寄ってくれたような。そんな、予感に近い感覚。もしくは希望なのかもしれない。
私は悩んでばっかりだ。たまには少し本を読もう。そうして死神さんの隣。日傘の下で、久しぶりの読書を始めた。
「ふぅ」
読んでいる本が一段落したので、本をぱたんと閉じて少し伸びをする。
「私に出来る事、何か無いかなぁ……」
本を読んでいても、その事ばかりを考えていた。物語の登場人物ですら、その物語を作るために役割を与えられ、みんな「生きている」気がした。
「ねぇねぇ、死神さん」
ふと隣の死神さんに話しかけると、そこには死神さんの姿が無かった。
「薄情だなぁ」
音も立てずに、どこかへ行ってしまった死神さんに、恨み言を呟く。
「美羽ちゃーん」
聞きなれた声が聞こえて、胸が高鳴る。この声が聞こえるだけで、私は嬉しくなってしまう。
振り向かなくてもわかってしまう。舞子さんだ。
「日傘、さっそく使ってくれているのね。」
舞子さんがベンチに立てかけてある日傘を取って、クルッと一回転する。

「全然似合わないね」
私は、くすくす、笑ってしまう。
「そうね、だから美羽ちゃんにあげて良かったと思うわ」
この人は……。なんでこんな恥ずかしい事を、簡単に言えてしまうのだろう。
「さ、そろそろベッドに戻りましょう」
私にとって悲しい宣告をされる。今日は、お父さんとお母さんに会った後なのでいつもよりも短く感じて、余計に寂しかった。
「あら、死神さんは？」
舞子さんも、私の隣の異変に気付いたようだ。
「わかんない。本に夢中になっていて、気付いたら居なくなっていて」
死神さんのいつも居る場所を見つめ、少し遠くの、緑溢れる木々を見つめる。
「あ、蝶だ」
羽の色が鮮やかな、大きめのアゲハ蝶がひらひらと飛んで居た。
「本当。綺麗ね」
舞子さんが、そっと日傘の影に入れてくれる。しばらく二人で蝶を見つめていると、突然、黒いアーチが掛かった。そう、それはまるで死神が振るう鎌の様な曲線。私は一瞬、何が起きたのかわからなかった。
そしてまた一閃。ひらひらと揺れる蝶に、黒い曲線が振り下ろされる。私は蝶に自分の姿を重ねていた。ギリギリの所で振り下ろされる鎌を避け、ギリギリの所で命を繋ぎとめる。まさにあそこに居るのは「死神」だった。
「ふふ、死神さんてば、面白い」
何を思ったのか舞子さんはそんな事を言い出した。
「面白いって、なんで！？」
私は今まで恐怖しか感じて無かったのに突然横から面白いと言われ。つい声を荒げてしまった。

「だって、死神さんってばダンスしているみたいなんだもの」
「ダンス！？」
私とはまるで違う発想に、舞子さんの穏やかな笑顔を見た後、再び蝶と「死神」に目を向ける。そこにはひらりひらりと、リズム良く揺れる蝶と、それに合わせて跳躍する黒猫が居た。
「あ、死神さん……」
私はやっと通常の世界に帰って来た。まるで今まで一人だけ違う世界に放り込まれ、あの蝶と、死神と、私。まるで狩られる順番を待っているかのような。そんな恐怖。いや、絶望感だった。
だけどこの人は違った。この絶望を、ダンスの一言で塗り替えた。舞子さんはやっぱりすごい。まるで言葉一つで、私にかかっている呪いを一つ一つ取り払って行くようだ。
「ダンスかぁ、ふふ、死神さんも、あの蝶にかかると形無しだね」
今までの処刑場が、急に可笑しな光景に変わって、私も自然と笑みがこぼれる。
「そうだ、お姫様。私めとも踊って頂けませんか？」
舞子さんがキザっぽい王子様のような動作で、私に手を差し出す。
「私、ダンスなんて踊れませんわ」
私も調子を合わせて、お姫様口調で返す。
「では、ここは賑やか過ぎます。私と共に静かな所へ参りましょう」
舞子さんは私の手を取り立ち上がらせる。いつもの様にベッドまで手を繋いでエスコートしてくれた。
「あら、もう十二時の鐘が！」
そう言って、舞子さんは去っていった。
「それは女の子の方でしょうが。しかもまだ四時十分を回った頃だし」
思わず突っ込んでしまう。でも、魔法から解けたのは私の方だった。

夢と希望と現実と

「それにしても、あの時の美羽ちゃんの言葉は、面白かったわよねー」

いつもの検温の時間。私と舞子さんのお喋りの時間。

「なになに？　いつの話」

「夕日が……見たかったから……」

私のモノマネ？　を、舞子さんが豪華な額縁に入った夕日の絵を見ながらする。

「もっと上手くごまかせなかったの？」

ふふっと笑いながら、そんな事を言う。

「だって、あの時は熱で、ぼーっとしていたし。実際……夕日綺麗だったし」

実際は舞子さんと同じ景色が見たかった。と言いそうになったけど止めておいた。

「まあ確かに、あの日は夕日が綺麗だったわね。でも、まさかそれでこんな絵まで買ってくるとはねー。よっぽど美羽ちゃんの事、大事なのね」

う、そうなのだろうけど。やっぱり少し罪悪感が残る。

「そう、かもね」

ついつい、素っ気無い返事になってしまう。

「でも、この絵素敵よねー。海の見える高い丘から、水平線に沈む夕日。こんな素敵な場所行ってみたいわぁ」

舞子さんが乙女な顔で言う。

「私も、行ってみたい」

ぼそっと言う。行こうと思えば行ける人と、行こうと思っても行けない人。今の二人にはその隔たりが合った。

「じゃあさ、病気治ったら二人で旅行しよう」

舞子さんが突然そんな事を言う。

それは酷く冷たいナイフで瞬間的に切りつけられた様な感覚に思えた。切られた事がわからない。でもじわじわと傷が熱くなって痛くなる。
「そんな！　無責任な事言わないで！」
つい、大声を出してしまう。どうして！？どうしてそんな事を言うの！？
心の中でも感情が荒れ狂う。切りつけられた傷口から溢れ出す。
「別に無責任な事を言っているわけじゃないわ。私は本当にそうしたいから、そう言っただけ」
言いたい事を素直に、真っ直ぐに告げる。それはとても鋭利な刃物。触れただけで切れてしまうような、鋭い凶器。
「そんなの！　叶うわけ無いって、舞子さんにだってわかるでしょ！？」
私はさらに声を荒げ感情を剥きだしにする。何をムキになっているのだろう。いつもの様にテキトウに笑ってやり過ごせば良い。実際お母さんやお父さんに、そう言われた時はそうしていたはずだ。遠くから自分を見下ろす、別の自分がそう考えている。だけど止まらなかった。
「私の病気は治らない！　だから旅行なんて出来ない！　だから……そんな事言わないでよぉ……」
涙が溢れそうで言葉がかすれていく。
「どうして治らないってわかるの？」
舞子さんがそんな事を聞いてきた。
「どうしてって……。今までだって治らなかったし、先生だって治るって言ってくれないじゃない！」
どうして今になって舞子さんは、こんな事を言うのだろうか。私はまた感情に流されていく。
「お母さんも！　お父さんも！　いつも可哀相な子を見るように見る。今まで私を見てきた先生だって！　看護師さんだって！　そういうのを見ていたら、誰だって治らないってわかるに決まっている

じゃない！」
あぁ、言ってしまった。私は最低だ。
「じゃあ、私にもそういう目で見て欲しいの？　同情して腫れ物を扱うようにして欲しい？」
舞子さんは追い討ちをかけるように冷たい言葉を浴びせる。私はどんどん心が痛くなっていく。
「そんな……揚げ足取ってごまかさないでよ！」
「ごまかしてなんていないわ。全部本当の事でしょう？　自分は病気だから、もう治らない病気だから優しくしてって、ごねているだけじゃない。それとも本当は病気で居たいんじゃないの？　病気のままなら、みんな優しくしてくれるしね」
おおよそ舞子さんらしからならぬ冷たい罵倒。これは一体なんなのだろう、白昼夢にでも放り込まれたような感覚だ。
「あのね、美羽ちゃん。諦めて楽になる事は誰にでも出来るわ。でもね、私はそういうの、好きじゃないの」
舞子さんは、少し寂しそうな顔をして続ける。
「私は美羽ちゃんの事、諦めたくないの。私はあなたともっと色々な時間を過ごしたいし。あなたに色々な事を知ってもらいたいとも思う」
私だって本当は色々したいし、色々知りたい。だけど、どうしようもない事だってある。私はそういうのを沢山見てきた。
「諦めたくないとか、そんなわがままでどうにかなったら、誰だって苦労しないよ！」
「そうね。でも諦めてそこで歩くのを止めてしまい家に帰るのと、何か目標を持って前を見ながら進み、それから家に帰る事は、例え同じ結果が待っていてもきっと違う帰り道になるわ！」
「そして疲れ果てて眠ってしまっても、どちらもまた次の朝を迎えるのよ」
「なんかその例えすごくややこしいんだけど……」
熱弁する舞子さんに、すっかり怒りの矛先を失った私。

「あ、あれ？　と、とにかく！　私、言った事は本当にしないといけないと思うの。だから美羽ちゃんと旅行に行きたいと思うし。それを諦めない。だから美羽ちゃんも諦めないで。諦めなければ絶対叶うなんて、そんな事は言えないけど。諦めてしまうのはもったいないと思うから」
　もったいない……か……この人らしいと言うかなんと言うか。
「私はいつ死ぬかわからないし、確かに諦めていた。だから夢や希望とか持った事無かった。だからどうして良いかわかんないよ」
　さっきの凶暴な感情は収まったけど。どこへ向けていいかわからない悲しみが、沸いて来る。
「あら、簡単な事じゃない。私との旅行を夢にして、私を希望にすれば良いわ」
　何の迷いも無く舞子さんはそう言った。
「頼りない希望だなぁ」
　私は舞子さんの後ろを見上げて言った。
「た～か～な～し～さ～ん」
　婦長さんが鬼の形相で後ろに立っていた。

「もう、美羽ちゃんのせいだからね！」
　あれから三時間ほどして、げっそりやつれて舞子さんが戻ってきた。
「くすくす、いい気味～」
　どうやら、婦長さんにこってり絞られた後、急いで他のお仕事もこなしてきたらしい。それでも時間内で終わらせちゃう所が、流石と言うかなんと言うか。
「あー、美羽ちゃん婦長さんのお説教だけで良いから私の変わりに受けてよー」
「私が舞子さんへのお説教受けても意味無いでしょう？」
　さっき言い負けたお返しに、ここぞとばかりに反撃する。

「そうだけどー、やっぱりあれが一番疲れるのよねー。まだわがままな患者さん相手にしている方が楽だわ」
「あのー、一応私も患者さんなんですけど……。と言うかわがままな患者さんって私の事じゃないでしょうね？」
この人の事だから、いつ、どこに毒を潜ませているかわからない。
「患者さんなら、もう少し看護師さんを労わってよね」
「それ、逆だから」
もう突っ込み慣れて来た。
「冷たいなー。美羽ちゃんは」
まるでさっきの事なんて無かったようなやりとり。でもこれが自然な形ですごく居心地が良い。ただ、一度で良いからこの人の考えている事を覗いてみたい。それとも、さっきの事を気にしているのは、私だけなのだろうか。
「ねぇ、美羽ちゃん」
舞子さんには珍しい、抑揚の無い声で問いかけられる。
「なあに？　舞子さん」
「もし、もし。私が美羽ちゃんの担当じゃ無くなったら美羽ちゃんはどう思う？」
この人は何を言っているのだろう？
「な、何言っているの？　そんな事……そんなの絶対嫌！」
我ながら、なんて子供っぽい言い方なのだろう。でも口の方が先に動いてしまった。
「ふふ、ありがとう。でも、もしかしたらこの先そういう事もあるかもしれないから」
「なんで？　なんで今そういうこと言うの？」
心の中がざわざわする。さっき私を希望にすれば良いと言い切ったこの人が、何故こんな事を言うのか……。
「もしかして、婦長さんに何か言われたの？　そうなの？　だったら私が舞子さんじゃなきゃ嫌だって言ってあげる。舞子さん以外の人の言う事なんて聞いてあげない、そうすれば……」

舞子さんがそっと私の口に指を当てる。
「ちょっと聞いてみただけよ。あまりそんなわがまま言っちゃダメよ？」
優しく、まるで小さな子に言い聞かせるように、舞子さんの声が涼しく響いた。あぁ、私はどうしていつもこんなに子供なのだろう。この人と居るといつもこうだ。感情を剥きだしにして、困らせてしまう。
「だって……」
これもわがままだ。
「私は担当じゃなくなっても気にしないわよ？」
その言葉に寒気がした。そんなの嫌だ。絶対嫌だ。
「だって、私とあなたはもうお友達だから。美羽ちゃんの事、信じているから。だから私は担当じゃ無くなってもあなたに会いに来るし。さっきの約束も忘れないわ」
この人は、この人はずるい……。私の心を揺さぶってどんどん剥き出しにして、そこに直に触れて癒していく。この人は天性の看護師さんなのだと思い知らされた。

「ねぇねぇ、死神さん」
お昼の検温と、ご飯を済ませ、いつもの場所にいつものように腰掛ける。舞子さんからもらった日傘を差す。死神さんも日陰に入るように。最近はこの日傘のおかげか死神さんとの距離がぐっと近付いた。
「私なんかが舞子さんの友達で居て良いのかな？」
どう考えても、今のままでは保護者と子供だ。早くあの人に追いつきたい、対等になりたい。
どうしてもそんな事ばかり考えてしまう。
「こんな事考えている時点で、対等なんかじゃないよね……」
死神さんに愚痴をこぼし、少しでも知識を蓄えようと読みかけの

本を開く。
「はぁ……」
ため息をこぼしてしまう。本の内容なんて全然頭に入ってこない。
「ねぇねぇ、死神さん」
私は死神さんに人生相談をして過ごした。なんの返事も返ってこないけれど、少しだけ胸が軽くなった気がした。

「ごちそうさま」
誰も居ない部屋で、独りごちそうさまを言う。夜はこういう事も多い。舞子さんはお昼であがってしまったし、今日は余計に寂しい日だ。後は消灯時間まで、本でも読んで過ごすだけ、結局、私は繰り返しの毎日を過ごすしかなかった。
「その前に、おトイレでも行っておこうかな」
呟いてハッとする。また独り言だ……。もう止めようと誓ったのに。でも、これでまた舞子さんが驚かしてくれたら良いのに。そんな事を思っても、何の音もしなかった。
「ねぇ、聞いた？」
トイレに行った帰り際、廊下で看護師さんが話している声が聞こえてきた。それだけなら良くあることだけれど。
「舞子がさぁ……」
思わぬ名前の登場に足が止まる。
「今日、小児病棟の主任の話、蹴ったらしいよ」
「えー、なんで？」
「ほら、あの子、患者さんとしょっちゅう仲良くなっているじゃない。情でも移ったんじゃないかなぁ」
「うっそ、有り得ない。舞子の若さで主任って言ったら相当早いのに。もったいないなー」
私は自分の部屋では無く、ナースステーションへ向かって歩き出

していた。
「あの！」
舞子さんは今居ない。この間みたいに近くの看護師さんを捕まえる。
「あの……、小鳥遊舞子さんの連絡先を教えてくれませんか？」
大人しそうな雰囲気の看護婦さんが、困ったような顔で私を見る。
「えと、あなたは？」
「舞子さんの友達です」
私は早く教えて欲しくてたまらなくて、ろくに説明もせずに、ぽっと思いついたことを喋ってしまった。
「ええと、お友達と言ってもあなた患者さんよね？」
私のパジャマ姿を見て察したのだろう。
「ごめんなさいね。そういうこと患者さんに簡単に教えたりしちゃいけないの。」
私は自分の失敗に気付いた。でも今更遅い。焦るな。自分に言い聞かせ冷静になる。
「あの、じゃあカオルさんは居ませんか？」
カオルさんなら！　舞子さんの連絡先を知っているはずだし、また協力してくれるかもしれない。
「カオルさんってタザキ　カオルさん？」
う、苗字まで聞いてなかった……。
「ええと、多分……そうだと思います」
煮え切らない答え。
「ごめんなさい。田崎さん、今日はお休みなの。明日になれば小鳥遊さん来るからそれからじゃダメなのかな？」
それからじゃダメだからこうして来ているのに！　私は苛立って居た。なんで何にも出来ないんだろう。なんでこんなに自分は無力なのだろう。
「あの……ええと……」
言葉が続かない。まただ、また私は……

「さ、もう病室に戻ってください」
看護師さんに急かされる。私はなんて無力なのだろう。絶望が支配していく中で、またあの人が私の中に現れる。
「諦めてしまったらもったいないから」
あぁ、結局私は、舞子さんには敵わないや。
「待って！　じゃあ婦長さんを！」
……

次の日。
「ちょっと、美羽ちゃん！　私に担当を辞めて欲しいってどういうこと！？」
ノックもせずに舞子さんが飛び込んできた。覚悟は出来ていたから驚きもしなかったけれど。
「どういう事も何も婦長さんに言った通りです。私の担当を辞めてください」
努めて冷静に。自分の声を制御して。大丈夫。私は昨日泣いた。それでも表情で気取られそうで、舞子さんの顔を見ることは出来なかった。
「なんでよ！？　急にどうしたの？　婦長さんに何か言われたの？　ちょっと美羽ちゃん！　こっち見て！　ちゃんと話してよ」
あの舞子さんが取り乱している。私は自分の感情をぐっと堪えるので精一杯だった。
「ちょっと！　美羽ちゃん……なんでよぉ……」
舞子さんの声が頼りなく情けなくなっていく。あぁ、私はとんだ勘違いをしていた。舞子さんも同じなのだ。この時まで気付けないなんて大バカ者だ。
死神さん、力を貸してください。私は窓の外、穏やかな風景の中に、たたずむ黒猫に願った。
「舞子さん、顔を上げて」
私にすがり付いて、うつむいている舞子さんに声をかける。

「舞子さん、小児科の主任なんだって？　おめでとう！」
きっと私はすごくおかしな顔をしていただろう。泣きそうな、それでいて今までで最高の笑顔だったと言える自信がある。
舞子さん。これが、「友達」だよね？
そうして舞子さんは小児科に行く事になった。

新しい生活、新しい自分、新しい課題

「はーい、今日も体調は大丈夫みたいですね九月さん」
舞子さんと入れ替わりで、私の担当をしてくれる事になったのは、なんとカオルさんだった。
私はまだ他の人と上手く話せないけど、カオルさんとは出来るだけ仲良くなろうと努力していた。いつまでもあの人に心配されないように。
「カオルさん、舞子さんは元気？」
私も結局舞子さんの事が心配なわけだけど……。
「もう、あなたたちって本当仲良しね。週に一回は顔合わせているくせに、毎日の様に私に元気？　って、あれからもう一月も経つのだからいい加減もう良いでしょう」
あう、そんなに何度も聞いていただろうか。思い返すと、毎日の様に聞いている気がしてきた。
「ごめんなさい、つい……」
「反応まで似ているわよ。あなた達、舞子もごめん、ごめん。つい……ってまあ、その通り元気よ。舞子は。しかもあの子供達相手に、良くがんばっているわ」
小児科は大変だと思う。そう言う私も、沢山看護師さんや先生に迷惑をかけてきた。
「その上舞子は、前の担当の患者さんのとこも非番の日とかに回っているからね。よく倒れないと思うわ」
「私より、よっぽど舞子さんの方が危ないかもしれませんね」
「ないない、舞子はあれで何故か病気知らずだからね。それじゃ、私は行くから、何かあったら呼んでくださいね」
カオルさんは、舞子さんほど親しくは無いけれど、舞子さんと言う共通の友人を持っているせいか、少しだけ私の事をひいきにしてくれている気がする。

「ねぇねぇ、死神さん」
「舞子さん相変わらずだって」
最近は夏も近付いて気温も高くなって来ているので、午前中に死神さんの隣に来る事にしている。
「ふふ、死神さんも相変わらずだね」
隣で寝ている死神さんを日傘の影に入れてあげる。舞子さんと慌しく過ごしていた毎日が、懐かしく思えるほど、すごく穏やかで、優しい朝だった。その優しさに、私は優お姉ちゃんのお話を思い出して一人でニヤニヤしていた。
「日傘の影になっているから誰にも見られてないよね？　ありがとう。舞子さん」
そっと呟くと死神さんの耳がピクピクと動いた。それが可笑しくて私はまた笑ってしまった。

「美羽ちゃん、お父さんと来たわよ」
今日はお父さんとお母さんが一緒に来る日。舞子さんが居なくなってからは始めてだ。
「はい、これお土産」
また流行のCDや本、雑誌などを手当たり次第買ってきた。
「お母さん、あのね、これは嬉しいんだけどね。無理しなくて良いんだよ？私は本があれば大丈夫だから」
「そんな、無理なんて……」
お母さんが申し訳無さそうな顔になる。
「お父さんも！この絵！高かったんでしょ？」
以前買って来てくれた絵を指差す。
「そんな事は……」
お父さんも渋い顔をしている。
「とにかく！　二人とも、私の事、想ってくれているのは痛いほどわかっているから！だからお願い。無茶しないでもっと自分達の事

も大事にして！」
　二人ともすごく驚いた顔をしている。無理も無いだろうけど、ちゃんとしないと。少しでも舞子さんに胸を張って会えるように。
「あのね。私、いつも二人に甘えてばっかりだったの。お父さんもお母さんも一所懸命働いてくれているの、知っているよ。」
「だけどね、やっぱり私にとってはお父さんも、お母さんも、大事な家族なの。私がしてあげられる事はまだ無いけど、私まだまだ子供かもしれないけどね、ちゃんと家族として自分の家の事に関わりたいの。だから贅沢言わない。退屈だってちゃんと我慢する。だから、お父さんもお母さんも無理しないで！　私に縛られないで！　もっと自分達の好きな事にお金使っても良いし、私に協力出来る事があったら遠慮なく言って！」
　ひとしきり言い終えて二人の顔を見る。お母さんは泣きだしてしまった。お父さんも心無しか、目を潤ませている。
「あのね、あとね」
　少し照れくさい。でも恥ずかしいけどちゃんと伝えておかないと。
「今まで本当にありがとう」
　私は小さな体で二人に抱きついた。お母さんは泣きそうだと思っていたけど、お父さんまで声をあげて泣いたのにはびっくりした。それほど私は二人に衝撃的な事をしたのだろう。
　でも後悔はしない。私は少しずつ成長して行くのだ。あの人に追いつけなくても、横に並べなくても、友達としていられるように。

「聞いたわよ、美羽ちゃん」
　舞子さんの一週間ぶりの声が響く。
「私の病院勤務の中でも、一番の美談を作ってくれたみたいね」
　あの日の出来事をどうやらカオルさんが言いふらして回っているようだ。
「あの時、家族だけで空気作っちゃって、私の居場所無くて辛かったんだから」

と、ごねていたけれど、その報復がこれとは。カオルさんにも担当降りてもらおうかな……。
「もー、からかわないでよー」
私は顔を真っ赤にして抗議する。
「それにしてもまた爽快にやったわねー」
あの後、沢山合った本やＣＤを家族で整理した。自分の好きな物を話したり、お父さんの趣味悪いーとか。お母さんに似合う服を、私向けに買ってきてくれた雑誌から選んだり、今までの時間を取り戻すように、この部屋を整理した。
「あ、でもこの絵は残したんだ」
お父さんが買ってきてくれた、夕日の絵。
「だって、私の夢だもの」
舞子さんが驚きの表情で私を見る。
「私ね、病気が治ったら一所懸命働いて舞子さんと世界を旅したい。そしてこの絵の場所を見つけて。今度はお父さんとお母さんを連れて、ここに行くんだ」
「良い夢ね、それまで私もお金、貯めておかないと」
「ま、舞子さんは良いの！　付いて来てくれるだけで！」
「そうは行かないわ、だって最初に夢をみせたのは私だもの」
やっぱり舞子さんはずっと先に居た。でも私は焦らない。
「そういえば、いっぱい仕事してって言うけれど、美羽ちゃんはどんな仕事してみたいの？」
「へ？」
「へ？って、そう言うのも夢を持った方が良いじゃない？」
「う……そこは考えた事無かった」
「ふふ、じゃあアルバイトしてみない？お仕事の経験してみるのも、悪くないと思うけれど」
そんな事言われても私に出来る事なんて、たかが知れているはずなのだけれど……。表情を曇らせると、舞子さんは私の考えている事を読んだのか

「大丈夫よ。ちゃんとあなたに出来る事だから。ちょっと待っていてね」
そう言って舞子さんは沢山の画用紙と色鉛筆を持って来た。

「んー、紙芝居って言われてもなぁ」
私は早速、思い悩んでいた。
「実はね二週間後の日曜日に小児科で大きなイベントがあるの。そこでね、そこそこ、有名なアーティストの人とか、芸人さんとかが来て、色々やってくれるのだけどね。看護師達も何かやった方が良いんじゃないかって話になってね……。紙芝居って案が出たのだけど、実際子供達の相手とかお仕事とかでみんな手一杯だし。それで色々本を読んでいる美羽ちゃんなんて適任じゃないかなーなんて思って声をかけてみたわけ」
なんて気軽に言われたけれどもちろん私は
「そんなプロの人とかが来る舞台で出来る紙芝居なんて作れないよ！」
と断ろうとしたのだけど……。
「まあそんなにプレッシャーに思わないで気軽にね。ダメだったらテキトウな絵本とかで済ませるから。」
何て言いながら、私の抗議を無視してこの画用紙と色鉛筆を置いていった。
「はぁ、やっぱり断ろうかな」
「あら、ダメよ」
「わぁっ！？」
不意に独り言に突っ込まれて驚きの声をあげる。前にもこんな事無かったっけ？
でも、今回は舞子さんでは無く、カオルさんだった。
「あら、驚かせちゃった？　ごめんなさい。でも九月さんてば、よく一人で喋っているんだもの、つい話しかけて欲しいのかと思っちゃうのよね」

どうやら独り言のクセは私の知らないところでも目撃されているようだった。ものすごく恥ずかしい。
「で、どうして断ったらダメなんですか？」
恥ずかしさを紛らわすために話題を逸らす。
「んー、舞子と賭けをしたの。私は嫌がりながらしぶしぶ引き受ける方に賭けたのよ」
「なんですか？　そのやけに具体的な賭けは。ちなみに舞子さんはなんて？」
「喜んで、小躍りしながら、鼻歌交じりに引き受ける方に賭けていたわ」
「それ、賭けになってないですよ、カオルさん」
と言うかなんで私が引き受けないって選択肢は無いのだろう。
「ふふ、まぁ賭けを成立させるために、あなたには作ってもらわなきゃいけないのよ、紙芝居」
何だか二人に上手くはめられている気がする。全部が舞子さんの掌の上な様な気さえしてきた。

「ねぇねぇ、死神さん」
「私に物語なんて書けるのかな」
死神さんの隣で私は白紙の画用紙を見つめていた。いっそ真っ黒に塗りつぶしてしまおうか……。死神さんを見ているとそう思ってしまうほど画用紙は白い。しばらく死神さんの隣で悩んでいるとふわりと優しい風が吹いた。
「物語かぁ……優お姉ちゃんのお話……。面白かったなぁ」
私にあんな物語が書けるだろうか、いや、そうじゃない。優お姉ちゃんのモノマネじゃない。他のどんな物語の真似でも無い、私だけの物語を書かなければ。そう思ってしまったから、私はまた思い悩む事になってしまった。
「うう……こうしちゃうと宮沢賢治っぽいし。これだとシャーロッ

ク・ホームズだし……」
今まで読んだ物語たちが一斉に私の邪魔をする。
「これじゃ……優お姉ちゃんのだ……」
舞子さん……本をいっぱい読んでいる私の方が、ダメかも知れないよ。
思いつく事は今まで読んだ好きだった本の話ばかり、私には絶対的に足りない物が合った。経験だ。
「どお？　進んでる？」
「うひゃあ！」
つい、今書いていた画用紙をぐしゃぐしゃにしてしまう。
「あーあ、ちょっと！　画用紙だってタダじゃないんだから、あんまり無駄にしないでよね」
舞子さんが頬を膨らませて言う。
「じゃあ、驚かさないでよ」
「あら、私は驚かしているんじゃ無くて美羽ちゃんが勝手に驚いているのよ？」
悪びれずに、そんな風に言う。
「だって美羽ちゃんっていつも独りの世界に入り込んじゃっているんだもの」
あぁ、そうだったのか。私が悪いのか。でもクセなんだもん、自分でもわからないんだもん。心の中で悪態をつく。
「んー、なかなか悩んでいるみたいねー」
舞子さんは、ぐしゃぐしゃにした画用紙を拾って、丁寧に伸ばし、乱雑に書かれた文を愛おしそうに撫でる。
「お、ここなんて面白そうじゃない」
それは優お姉ちゃんのお話とそっくりの部分だった。
「あの、それは昔、仲の良かったお姉ちゃんのお話で……私のオリジナルじゃないから……」
「あら、そう言うのも良いんじゃない？」
この人はまた訳の分からない事を……。

「それじゃ盗作だよ！」
「何もこのまま使えなんて言ってないわ。ただ、好きな人に影響されたり、好きな物に似てしまったりする事を恐れたら新しい物は出来ないと思うの」
「……なんで？」
私にはそんな発想は無かった。私自身の、私だけの物語を書かなければいけないと、そう思っていた。
「だって、人は何かと出会って、何かと触れ合って、始めて知識を得られるのだから。だから、必ずその人は、どこかで得た物を使っている。そして知らず、知らず自分の好きな物、嫌いな物を、自分の好みの形に変えて物語にしているんじゃないかしら？」
「まあ、どこまで妥協出来るかは、本人のサジ加減次第なのだけどね」
「そこまで言うなら、舞子さんが作れば良いのに」
「あら、私はまだお仕事があるから」
そう言って、パタパタと走っていってしまった。
「おせっかい」
「くわーっ」
隣で死神さんがあくびをしていた。
私はペンを動かし始めた。一言ずつ確かめるように。

「ダメだぁ……全然進まない」
断片的に、漠然と出来てきてはいるものの、やっぱり一つの物語とすると難しい。しかも紙芝居。小児科の子供達にも伝わるようにしなければならない。
考えれば考えるほど、難しくなっていく。
「優お姉ちゃん、やっぱりすごかったんだなぁ」
何度もめげそうになる。だけど、私はやる気になっていた。
「私にも出来る事がある……」

私にも出来る事が！そう思うと何だか悪くない気もしてきた。
「みなさんの言葉を、お借りしますね」
お気に入りの本達に話かける。
「それから、優お姉ちゃんも」
病室の見慣れた天井をちょっと仰ぐ。
私は毎日の様に紙芝居作りに没頭した。病室で、死神さんの隣で、あっという間に一週間が過ぎてしまった。

「美羽ちゃんが紙芝居！？」
お母さんは信じられない物を見る表情で私を見ている。私は話しながらずっと画用紙と向き合っていた。
「美羽ちゃん、体は大丈夫なの？」
お母さんが心配の声をあげる。
「大丈夫だよ、このくらい。ちゃんと休みながらやっているし、作り終わる前に倒れちゃったら、やっている意味が無いもの」
私はちょっと嘘を吐いた。実は夜もこそこそメモ帳に思いついた言葉や話をメモしたりしている。だけど急がなきゃならなかった。まだまだこれに、絵も描かなければならないのだ。
「そうなの？　でも無理だけはしないでね」
うう、心配してくれるのは嬉しいけどちょっと過保護じゃないかなぁ……。
「大丈夫！　私、最近調子良いし、このまま病気なんて治っちゃうかも！」
私は笑ってみせた。これは昔の作り笑いとは違う。私には希望と夢があるから。こんな風に言っていれば本当に治ってしまうかもしれない。今はそう思える。全て舞子さんのおかげだ。
「そう、美羽ちゃんがそう言うのなら構わないけれど。お母さんに手伝える事とかあったら言ってね？」
お母さんは、まだあまり納得のいってない顔で言う。それでも紙

芝居作りは応援してくれるようだ。
「あ、じゃあお母さん、これに色を塗って」
私は鉛筆で何度も書き直した線だけの絵を渡す。
「モデルはあそこのベンチと、隣の木、そしてあそこの……」
私はお気に入りの場所を指差した。

紙芝居（私に出来る事）

「出来た！！」
お母さんのお手伝いとカオルさんのサポート、舞子さんの言葉が合って、思っていたより早くできた。
「後は……」
私はもう一つ決意をしていた。
「カオルさん！」
待ちきれず、ナースステーションまで出向いてカオルさんを呼ぶ。
「あ、あの……九月さん、一応ここでは苗字で呼んでくれないかな……」
カオルさんの声が震えていた。カオルさんと向き合って話しているのは、婦長さんだった。
「あ……」
カオルさん、ごめんなさい。
私はカオルさんにお願いして。舞子さんと川崎先生を集めてもらった。
「あの、これ……」
作った紙芝居を見せる。
「すごい！　良く出来ているじゃない」
舞子さんが絶賛の声を、あげる。絵だけ見て……。
「物語、読んで無いじゃない」
私が突っ込むと
「あら、それは本番の楽しみに取っておくわ」
そんな風に返されてしまった。本番までに他の人の評価を聞きたかったのに。
「えーと、それで私は何で呼ばれたのかしら？」
川崎先生が横から入り込んでくる。きっと忙しいのだろう。私もそれくらいわかる。紙芝居を見てもらうために呼んだんじゃない。

「みんなにお願いがあるんです」
私はカオルさんと舞子さん、川崎先生に決意を告げた。

「舞子さん！」
私は小児科病棟の遊戯施設の隣の部屋にいた。ここは今日開かれるイベントの控え室として使われていて朝から色々な人が出入りしていた。
「なあに？　美羽ちゃん？　私見ての通り忙しいんだけど」
沢山の小道具や大道具の配置、スピーカーやマイクのチェック等、いろんな看護師さんに指示を飛ばして、舞子さんはてんてこ舞いだった。
「なんで私の紙芝居が、プログラムの一番最後なの！？」
指示を仰ぎに来た看護師さんに、あれやこれや告げながら、私の問いにも答える。
「だってプロの方達はスケジュールとか、色々都合付けてくれているのだもの、ほぼ分単位で埋まっちゃっているの。だから美羽ちゃんの紙芝居が最後。良いじゃない、おおトリなんて大役、やりたくってもなかなか出来ないわよ」
「そ、そうかもしれないけど」
その大役に相応しくないから、こうして文句を言いに来たんだけど……。
「ふぅ……」
何だか落ち着き無い場所は苦手で、いつもの死神さんの所まで戻ってきてしまった。
「ねぇねぇ、死神さん」
「私の紙芝居大丈夫かな？」
二週間で書き上げた十枚程度の紙芝居。こんなのがトリなんて努められるわけが無い。舞子さんは一体何を考えているのだろう。
「はぁ、あんなお願いしなければ良かったかなぁ」

「認められません！」
川崎先生が声を荒げる。
「あら、私は良いと思うけどなぁ」
舞子さんが楽観的に言う。
「わ、私は、その、差し出がましいようですけど九月さんの体調次第では大丈夫かと」
カオルさんがおずおずと申し出る。私のお願いへの三者三様の意見だった。
「そんな、あなた達は責任が無いからそう言えるんです」
一人反対派の川崎先生が言う。
「責任なんて、川崎先生にも迷惑かけないようにします。お願いします！」
私は、すごく無責任だけど誠意だけで何とかしようと頭を下げる。
「私、自分でこの紙芝居を読みたいんです！」
私のお願いはこれだった。これを承諾してもらうために、川崎先生と舞子さん、カオルさんに集まってもらったのだ。
「私に迷惑かけないようにって……。あなたに何が出来るって言うんですか？」
川崎先生にもっともな事を言われる。確かに私は無力だ。何も出来ないし、責任の取り方もわからない。
だけど！　だけど！
「良いわ、何かあったら、全部私の独断という事にしてください」
舞子さんが口を開く。
「これは、私が勝手に依頼して、私が勝手にやらせた事です。そして美羽ちゃんが舞台に立つのも……当日まで先生は何も知らなかったことにしてください。カオルもね」
どうしてこの人は、こうもカッコイイのだろう。そして私なんかのためにどうしてここまで出来るのだろう。今回だって無理そうな

ら私は諦める気で居たのに。

「そんな覚悟でやろうとしたのが、そもそも間違いだったのかもしれないね」

死神さんに話しかける。私はここに来て怖気付いている。覚悟したつもりだったのに、色々な事がプレッシャーに感じる。

「はぁ……。それで済むわけ無いでしょうに」

川崎先生があきれた様子で言う。この人は冷静だ。

「わかったわ、その代わり当日まで徹底的に体調を整える事！　前日には一応点滴も容易しておくからね！　それと、体調が悪くなったら当日でも私は止めますからね！」

私と舞子さんの決意に川崎先生は応えてくれた。

「私も二人の思いに応えないとなのにね」

死神さんに語る声が、震えているのが自分でもわかる。

パチパチパチ

小さな拍手をしてくれる。カオルさんだ。

「どうでした？」

私は緊張した体をほぐすように大きく息を吐いて言う。

「良かったわよ。物語の方もすごく良く出来ているし、声も出ていたわ。でも……」

カオルさんが声のトーンを落として言う。

「でも？」

私は何かダメな所が無いか少しでも教えて欲しくて先を急かす。

「顔が強張っていて、面白かった」

と、笑い出す。

「むー、仕方ないじゃないですか。緊張するんだから」

私にとっては始めての体験。物語を読み聞かせるなんて。しかも

自分が作ったものを。
「あら、本番はもっと緊張するわよ？」
カオルさんが私に追い討ちをかける。そうして、傍観者として率直な意見を言い。自分の休みの日まで、私の練習に付き合ってくれた。

「カオルさんにも感謝しないとね」
喉から声を出すので、いっぱい、いっぱいだ。死神さん。私は何て弱いのだろう。あの時は、もっとちゃんと決意していたはずなのに。今更、色々な事から逃げ出したくなる。体調が崩れてしまえば良いのにと、弱気になる。私は最低だ。自己嫌悪で潰れそうになる。そんな私にまた優しい風が吹いた。
「優……お姉ちゃん……」
私はあの、大好きだったお姉ちゃんの様に誇らしげに語れるだろうか。いくつも物語を聞かせてくれた、あの優しいお姉ちゃんの様に。優お姉ちゃんが、物語りを語ってくれた時の顔が頭に浮かぶ。私にあんな優しい顔が出来るだろうか。
「ねぇねぇ、死神さん」
私は死神さんに向かって最後の練習をした。

「あははは」
沢山の人の笑い声が聞こえる。今売れっ子の芸人さんらしいが、私は知らなかった。でも漫才は面白い。だけど声を出して笑うのは、何だか恥ずかしい気がして子供達の後ろで小さくなっていた。私の番までまだまだ時間があるのに既に緊張で手の平が汗ばむ。芸人さん達の漫才、パントマイムのすごい人、昔ここの小児病棟にお世話になったらしい歌手の人、そして私。そういう順番になっている。司会は舞子さんが努めていた。子供達も偉いもので、ちょっと位お話したり、野次を飛ばしたりはするものの、ちゃんと舞台の人達に

見入っていた。
演目が進むにつれて自分のものがすごく分不相応に思えてくる。でも、あの人が背中を押してくれる。『諦めてしまったらもったいないでしょう？』そう、ここで諦めたらもったいない。舞子さんと川崎先生の覚悟。カオルさんやお母さんの優しさ。私は色々な人に背中を押してもらった。その人達の助けにならなくても、誰にも理解してもらえなくても。諦めないで最後まで伝えよう。私は自然と落ち着いてきていた。
「これなら大丈夫そうね」
川崎先生が私の体を診てくれる。わざわざこっちまで出向いて来てくれた。
「私は最後まで居られないけれど。がんばってね。あと、その紙芝居。今度私にも聞かせてね。あと、あと！本番中体調悪くなったら途中でも絶対止めるのよ？」
あぁ、川崎先生の事やっとわかった気がする。私はこの人が一番自分に近いように感じた。
「川崎先生。ありがとうございます」
川崎先生は「仕事があるから！」と顔を真っ赤にして出て行った。なるほど、これはクセになりそうだ。舞子さんとカオルさんの気持ちも少し理解できた。

しかし、本物達の策略はもっとすごかった。
「や、やっぱり恥ずかしいよ……」
私は今、全身真っ黒だ。冗談では無く本当に黒い。黒のヘッドドレスに何段にも重ねられたフリルのスカート、所々にあしらわれた黒いリボン、踵の太い黒の分厚い革靴。
「はぁ……素敵。前に会った時、絶対似合うと思っていたのよねぇ」
溜息を吐きながらうっとりしているこの人は、香坂由香さん。前に慌てて舞子さんを探していた時にいろいろ訪ねた大人しそうな看護師さんだ。

「いやー、まさか由香の趣味がこんな所で役立つとはねー。ばっちり似合っているわよ、九月さん」
カオルさんが意地悪な笑みを浮かべて言う。
「うう、でもこれは恥ずかしすぎますよー」
私は恥ずかしさで顔を真っ赤にして言う。
「あら、あなたのお話にぴったりの衣装だと思うけど？」
カオルさんは唯一、私の紙芝居の内容を全部知っている。確かに雰囲気的にはこういう方が良いのかもしれないけれど……。
「後は……じゃーん！」
得意気にお化粧セットを見せる。
「お化粧も私がやりたかったのにー」
香坂さんがむくれながら言う。
「あなたにやらせたら子供達が恐がるからダーメ」
一体どんな顔にされるのだろう……。
「わぁ……」
テーブルの上に置かれた小さな鏡に映る顔が驚きに染まる。
ピンクのルージュに少し大人しめなアイシャドウ、睫毛は大きくカールされ、目が大きく強調されて、まるで自分で無くなってしまったみたいだ。
「ほら美羽ちゃんは元が良いのだから、そんな大げさにお化粧しなくても、ずいぶん良くなるでしょ？」
カオルさんが得意気に言う。
「私ならもっと血のように真っ赤な口紅にするのにー。それに三日月のタトゥーシールとか……」
何だか香坂さんがものすごい事を言っている。だけどこの人の見た目とのギャップが面白い。
「それじゃあ子供達に誤解されちゃうでしょうが」
今でも十分誤解されると思います。カオルさん。
ゆったりしたピアノのメロディと軽やかな歌声、アコースティッ

クギターのアルペジオ。どうしてこんなに素敵な曲が売れないのだろう。私はお母さんが買ってきたガチャガチャとした賑やかな音楽よりこういう方がよっぽど好きだ。好みの差もあるのかもしれないけれど、こういう曲は心が落ち着く。私はこの人にも助けられているのかもしれない。よく夢や愛や恋を歌う歌があるけれど、全部私には無縁と思って嫌って来た。でも今はすごく良いと思える。これも舞子さんのおかげなのだろう。あの人は私の世界を塗り替えた。私の常識をどんどん壊していった。

「本ばかりじゃなくて、音楽も聴いてみようかな」

私はまだまだ色々な事を知らなければならない。自分で世界を閉じてしまっていたのだと気付いた。世界は広い。私の知らない世界への憧れが膨らんで、まるで夢を見るように色々な物が膨らんで弾けていく。もちろん想像だけれど、本を読んで得ただけの物だけど。すごく楽しい気持ちになっていく。夢を持って真っ直ぐに走っている人はきっとこんな気持ちなのだろう。恐いけど楽しい。矛盾しているけどきっとこれで合っている。

「美羽ちゃん。大丈夫？」

カオルさんが心配そうな顔で私を見る。

「なんとか……大丈夫そう」

私は笑ってみせる。心臓はバクバクと音を立てている。

「ありがとうございました」

さっきまで歌っていたお姉さんの呼吸とお礼の声が聞こえる。お礼を言いたいのは私の方だ。

「素敵な歌声をくれた優さんにみんなもう一度拍手〜」

舞子さんの進行の声が聞こえる。そして拍手。ああ、私はなんて幸福なのだろう。色々な人の優しさに包まれている。沢山の奇跡に包まれている。優お姉ちゃんに出会った事もこの『優』さんの歌を聞いたことも。

「さぁ、みんな。最後の素敵を紹介しよう」

舞子さんが大げさな前振りをする。

「あなたが美羽さん？」
突然綺麗なお姉さんに話しかけられる。今まで舞台で歌っていた優さんだ。
「あ、はい」
私は慌てて答える。
「舞子さんがあなたに伝えて欲しい事があるって」
透き通る優しい声が思わぬ名前を告げる。
「舞子さんが？」
私は疑問の表情で問いかける。
「『美羽ちゃんなら大丈夫よ』ですって」
舞子さんは本当にずるい。
「あ、後、これは私から……」
そう言って私の手をぎゅっと包み込み、目を閉じて祈ってくれる。暖かい。私はそれ以外の事を考えられなかった。
「がんばってね！」
そうにっこり笑って送り出してくれる。まるで優お姉ちゃんに送り出された様な不思議な感じ。
「ありがとうございます！」
すごい勢いでお礼を言う。時間が迫っている。舞子さんの長い口上がそろそろ終わる。カオルさんが少し向こうから手を振ってくれている。私も小さく手を振る。
「いって来ます」
誰に言うでも無く呟く。
「いってらっしゃい」
そう言って優さんが手を振ってくれる。
「さあみんな最後の素敵が入ってくるよ！　拍手で迎えよう！」
大きく息を吸って吐く。これだけの動作がすごく長く感じる。不思議と体が軽い。拍手の音が波の様に聞こえる。ゆっくりその波に乗って歩きだす。舞台には、私の背の高さに合わせてくれたテーブルと、スタンドマイク、そこに私が綴った物語が置いてある。私は

そこに行く前に、軽く観客にお辞儀をして辺りを見る。みんなが私を見ている。緊張感が高まる。その中に見知った顔があった。お父さんとお母さんだ。てっきり、来れ無いと思っていたのに……。きっと無理したんだろうな。でも素直に喜ぼう。私はテーブルの前に置かれた椅子に腰をかけ位置を整える。そしてもう一度お辞儀をしてゆっくり語り出す。みんながくれた私の物語を。

「これは、不思議な世界で迷子になった女の子のお話。それはそう、不思議の国のアリスの様に」

一枚の絵をめくる。

丸い月と、目覚めたばかりでほおけている女の子の絵。女の子の手には緑色の細い茎が持たされている。

「女の子は着ている服と細い茎以外何も持っていませんでした」

「食べ物も、お金も、記憶も」

「女の子は何をして良いかわかりません」

「そこに一匹の黒猫が通りかかります」

私は一枚画用紙をめくる。

黒猫と女の子の、後姿の絵。

「女の子は惹かれるように、黒猫を追いかけます」

「細い路地の裏。街灯だけが並ぶ大通り。レンガ造りの家や木で出来た家。色々な景色の中、黒い猫を追いかけました」

「しばらく行くと、一つの街灯に照らされた、白いベンチがありました。そこには一人の女の子が座っていました」

一枚画用紙をめくる。

女の子より少しだけ大人びた女の子と黒猫が白いベンチに座っている絵。

「『あらあら、そんなに息を切らしてどうしたの？』ベンチに座っている女の子が、突然の訪問者に問いかけます」

「『わからないの、ただその子を追いかけて来たら、ここに来て』」

「『まぁまぁ、じゃあこちらに座って、少し休んでいくといいわ』」

「女の子は勧められるまま、ベンチにちょこんと座ります」
「『あなたはどうしてこの子を追いかけていたの？』少し大人びた女の子が言います」
「『わからないの、目が覚めたらそこに、その子が居て。それ以外何もわからなくて、これだけ持っていて……困っていたの』女の子は言いました」
「『あらあら、あなたは迷子なのね。そうだ、あなたに名前をあげましょう』何を思ったのかベンチに座っていた女の子はそんな事を言います」
「『名前？』迷子の女の子が聞き返します」
「『そう、名前。名前は大事なものよ。失くさないようにね』」
「その瞬間、黒猫が走り出しました」
「『あ、私もう行かなくちゃ』迷子の女の子が言います」
「『はい、いってらっしゃい』ベンチに座った女の子が、優しく言います」
「迷子の女の子は走ります。黒い猫を追いかけて、闇の中を。今度は洞窟や、森や、草原を抜けて行きます」
「そうしてまた街灯に照らされた白いベンチが見えてきました。今度は迷子の女の子より十くらい年上のお姉さんが座っていました。また隣に黒猫が座ります」
画用紙をめくる。
少し大人な背の高い女の人と黒猫の絵。
「『あらあら、そんなに息を切らしてどうしたの？』お姉さんが問いかけます」
「『わからないの、ただその子を追いかけて来たらここに来て』」
「『まぁまぁ、じゃあこちらに座って少し休んでいくといいわ』」
「迷子の女の子は勧められるまま、ちょこんと腰掛けます」
「『あなたはどうしてこの子を追いかけて来たの？』」
「『わからないの、目が覚めたらそこにその子が居て。それ以外何もわからなくて、これだけ持っていて……困っていたの』迷子の女

の子は言いました」
「スカートから緑の茎を取り出すとそこには一枚の葉が付いていました」
私は一枚画用紙をめくり葉の付いた茎の絵を見せる。
そしてまた前の絵を戻す。
「『あらあら、あなたは迷子なのね。でもあなたは素敵な名前を持っているみたいね』お姉さんは言います」
「『はい、美羽（ミウ）と言います。美しい羽を広げて飛んで行けるようにと、この名前をもらいました』女の子は自分の名前と意味を、何故か知っていました」
「『そう、ならあなたに苗字をあげましょう。苗字は大事よ。親から子へ受け継がれていく大切なモノ。だから、失くさないようにね』お姉さんは言います」
「その瞬間、黒猫が走り出しました」
「『あ、私もう行かなくちゃ』ミウは急いで立ち上がります」
「『はい、いってらっしゃい』ベンチに座ったお姉さんが優しく言います」
「迷子のミウは走ります。荒れた荒野、閑散としたビル街、砂漠に湖のほとり。いろいろな風景を駆けて行きます」
「しばらく行くと、また、あの白いベンチがありました。今度は二十から三十くらい年の離れた、お母さんの様な女性が座っています。いつものように黒猫が隣に座ります」
私は二枚の画用紙をめくる。
少しふっくらした大人の女の人と、黒猫の絵。
「『あらあら、そんなに息を切らしてどうしたの？』お母さんの様な女性が問いかけます」
「『わからないの、ただその子を追いかけて来たらここに来て』」
「『まぁまぁ、じゃあこちらに座って少し休んでいくといいわ』」
「迷子のミウは勧められるままちょこんと腰掛けます」
「『あなたはどうしてこの子を追いかけて来たの？』」

「『わからないの、目が覚めたらそこにその子が居て。それ以外何もわからなくて、これだけ持っていて……困っていたの』迷子のミウは言いました」
「スカートから緑の茎を取り出すとそこには二枚の葉が付いていました」
画用紙を一枚めくり二枚の葉の付いた茎の絵を見せる。
「『あらあら、あなたは迷子なのね。でもあなたは素敵な名前と苗字を持っているわね』」
「『はい、小鳥遊美羽（タカナシミウ）と言います。小鳥のように小さくても鷹の居ない所で自由に美しい羽を広げられる様に。と、この苗字をもらいました』ミウは何故か自分の苗字と名前の意味を知っていました」
「『そう、ならあなたに希望をあげましょう。希望は大事よ。あなたの行く道を照らす大切なモノ。だから失くさないようにね』お母さんの様な女性は言います」
「その瞬間黒猫が走り出しました」
「『あ、私もう行かなくちゃ』ミウは慌てて駆け出します」
「『はい、いってらっしゃい』ベンチに座ったお母さんの様な女性が優しく言います」
「迷子のミウは走ります。中世のお城、砂浜、草原と渓谷いろいろな風景を駆けて行きます」
「しかしミウは黒猫を見失ってしまいます」
「あても無くミウは闇を走ります。ただただ真っ直ぐに」
「しばらく行くと今度は見慣れた街灯に照らされた黒いベンチと小さな白いドレスに包まれた少女が座っていました」
私は二枚の画用紙をめくり新しい絵を出す。今までと反転したような絵。
「『まぁまぁ、そんなに息を切らしてどうしたの？』少女がミウに問いかけます」
「『わからないの、ただ猫さんを追っていたのだけれど見失ってしまって』」

「『あらあら、じゃあここに座って休んで行くと良いわ』」
「迷子のミウは勧められるまま黒いベンチにちょこんと腰掛けます」
「『あなたはどうして猫なんて追いかけていたの？』」
「『わからないの、目が覚めたらそこにその子が居て。それ以外何もわからなくて、これだけ持っていて……困っていたの』迷子のミウは言いました」
「スカートから緑の茎を取り出すとそこには三枚の葉が付いていました」
　画用紙を一枚めくり三枚の葉の絵を見せる。三つ葉のクローバーだ。そして元の絵に戻す。
「『まぁまぁ、あなたは素敵なモノを持っているのね』少女は言います」
「『ええ、取り出すたびに葉の増える素敵なモノなの』ミウは得意気に言います」
「『まぁまぁ、じゃあ私も素敵なモノをあげるからあなたのそれをくださらない？』少女は三つ葉のクローバーを指差して言います」
「ミウは少し悩みましたが少女の無邪気な笑顔に『良いよ』と言ってしまいます」
「すると、どうした事でしょう、なんと、大きな鷹が隣に降り立ち、三つ葉のクローバーを横から取って飛んで行ってしまいました」
「ミウが驚いて少女を見ると少女は相変わらず無邪気な笑顔でこう言いました」
「『ありがとう。お返しに絶望をあげるね』」
　私は二枚の画用紙をめくり真っ黒に塗りつぶした紙を見せた。
「急に街灯の明かりが消え真っ暗になりました」
「ミウは急に恐くなって叫びました」
「『ここは何処！？　助けて！　恐いよ！』」
「しかし何の返事もありません。ミウは次第に考える事を止めてしまいます」
「『ああ、もうどうでもいいや、どうせ私は何も持っていないもの』

」
「でもミウは思い出します。自分とあまり年の変わらない女の子からもらった名前を」
「『私は美羽（ミウ）』」
「そしてまた思い出します。お姉さんの様な年の離れた女性からもらった苗字を」
「『私は小鳥遊美羽（タカナシミウ）』」
「そして最後に思い出します。お母さんの様な女性からもらった希望を」
「何も見えないと思っていた暗闇の中に一筋の光が走りました。あの黒猫です」
「黒猫は光る三つ葉のクローバーを咥えていました」
黒猫と光る三つ葉の絵を出す。
「ミウはまた黒猫を追いかけます。長い、本当に長い、闇の中を真っ直ぐに駆け抜けます。はぁはぁと　息を切らせてひたすらに走ります」
「そうしてミウはオレンジに染まる丘の上に辿り着きました」
「そこには大きな木と白いベンチ、そして白い日傘が開いていました」
「ミウはそこにそっと近付いて行きます」
私はおばあさんと、白いベンチと、黒猫と、日傘と、大きな木の絵を出す。お母さんに塗ってもらった絵。
「『あらあら、そんなに息を切らしてどうしたの？』お婆さんが問いかけます」
「『わからないの、ただその子を追いかけて来たらここに来て』」
「『まぁまぁ、じゃあこちらに座って少し休んでいくといいわ』」
「迷子のミウは勧められるままちょこんと腰掛けます」
「『あなたはどうしてこの子を追いかけて来たの？』」
「『わからないの、目が覚めたらそこにその子が居て。それ以外何もわからなくて、これだけ持っていて……』と言いかけてスカート

にあのクローバーが無い事を思い出します」
「『あらあらこれの事かしら？』お婆さんが出したのは四枚の葉がついたクローバーでした。」
四葉のクローバーの絵を出し、またオレンジの丘の絵を出す。
「『違うわ、私の、三つ葉だもの。ミウは正直に答えます』」
「『いいえ、これはあなたのモノよ』おばあさんはミウの手にそっと四つ葉のクローバーを置きます」
「『ありがとう。お婆さん』ミウはにっこり笑います」
「お婆さんはミウの頭をそっと撫でます。『あなたは自分で最後のプレゼントを見つけたのよ』」
「ミウはいつもの様に知らないうちに知っている事だと思いました。しかし何の事か思いつきません」
「『お婆さん最後のプレゼントってなぁに？』ミウは聞いてみることにしました」
「『それはね、諦めない心よ』お婆さんは言います」
「『よくわからないや』ミウは言います」
「『良いのよ、理解しなくても』お婆さんはまた頭を撫でてくれます」
「『結果はどうであれ諦めない事は、とても大事な事なの。さて、私はあげるものが無くなってしまったわね』」
「『ううん、この素敵な四つ葉のクローバーを頂いたわ』」
「『いいえ、それはあなたが自分で手に入れたものよ』」
「『そうなの？　じゃあこれお婆さんにあげるね』ミウはお婆さんの手を取り、しわがれた小指に四つ葉のクローバーを結びました」
「『私は、名前を、苗字を、希望を、諦めない心を手に入れたから。それがまた欲しくなったら自分で探しに行くわ』ミウは言います」
「『そうかい、ミウちゃんは優しいねぇ。そうだ、最後のプレゼントはこれにしましょう』お婆さんは手に持っていた日傘をミウに手渡します」
「ミウは日傘を持って丘の上から海を見下ろします」

「そしてクルット一回転すると背中に美しい羽が生えました」
画用紙の最後の一枚。オレンジの夜明けに包まれた日傘を差した天使の絵。
「そこでミウは全てを知りました。『私は天使になる試験を受けていたんだ』」
「こうしてミウは天使になり、世界中に四つ葉のクローバーが稀に生えるようにし、それを手にしたモノに幸福を与える天使になりました」
「おしまい」

ぱちぱち……
小さな拍手が聞こえたと思うと。
「わあーーーー」歓声と拍手が波になって押し寄せてきた。
胸がすごくドキドキしている。お母さんはまた泣いているみたいだ。私は決意する。
「すぅ」
大きく深呼吸。
「少しだけ、もう少しだけ私の話を聞いてください！」
会場が静まりかえる。自分の心音だけが世界に響いているような感覚。
「私は、病気です。まだ治る見込みはありません。でも！　治る事を諦めていません。それをそこの看護師さん。小鳥遊舞子さんに教わりました！」
「だからこのお話を考える事が出来ました。これは私が出会って来た人達との軌跡です」
「あ、あの。でしゃばってすみませんでした。でも私はここに立てたことを誇りに思います。皆さん。ご静聴、本当にありがとうございました！」
私はゆっくり席を立ってお辞儀する。

「くっ、九月美羽さんの素敵なお話でした！　これで……今日は終わりだけど、みんなはこれからも沢山の素敵と出会って行く事でしょう。さあみんな！　今日素敵をくれた人達にもう一度、大きな拍手とありがとうを言いましょう。」
舞子さんの声が震えている。私は大きな拍手とばらばらなありがとうの中、舞台の袖に下がって行った。
「お疲れ様」
優さんとカオルさんが出迎えてくれる。
「あ、ありがとうございます」
私は慌ててお礼を言う。
「ふふ、素敵な舞台だったわよ」
優さんがそんな風に言ってくれる。私みたいな素人に向かってなんの躊躇いも無く。
「そ、そんな、私何て全然ダメですよ」
私はつい、そんな風に言ってしまう。
「まぁ、始めてならそう言っちゃうよね」
にこっと笑って頭を撫でてくれる。私はそこで急に足の力を失った。
「あ、あれ？」
腰が抜けてしまった。
「あはは、私も最初、みんなの前で歌った時、そうなっちゃったんだ」
カオルさんと、優さんが二人がかりで立ち上がらせてくれる。
二人の体温が暖かい。まだ心臓がバクバクしている。色んな事が、頭の中を駆け巡ってゆく。二人に抱えられて隣の部屋に移動させてもらう。そこにはあの人が立っていた。
「舞子……さん」
二人が近くの椅子に座らせてくれる。
「やっぱり、私の見込みどおりだったわね」
舞子さんがそんな風に言う。

「私、そんなに上手く出来てないよ。優さんや他のみなさんと比べたら私何て……」
私は少し塞ぎ込む。さっきまではすごく楽しかったけれど、終わってみると、自分の力の無さを痛感する。
「そんなの当たり前じゃない。あなたは始めて、他の人達はプロ。その違いは、あって当たり前。まあそれ以前に紙芝居と、歌と、芸と、パントマイムを比べるまでも無いと思うのだけれど」
舞子さんは当然の様な顔で言う。
「舞子さん……。今度は顔洗ってから来たんだね」
したり顔の舞子さんに言う。
「う、美羽ちゃんもやるようになったわね」
舞子さんがたじろいだ……。今日は私に何か憑いているんじゃ無いだろうか。
「美羽ちゃん！」
お母さんと、お父さんがカオルさんに連れられてやってきた。
「体は大丈夫なのか？」
お父さんが、私の様子をうかがう。
「体は大丈夫。緊張が解けて腰抜けちゃったけどね」
私は照れ笑いを浮かべた。
「でも、まさか二人が来るなんて思ってなかったから、びっくりしちゃったよ」
来るとわかっていたらこの格好、意地でも断ったのに……。
「良かった、まさか美羽ちゃんが舞台に立つなんて、聞いていなかったから」
言ったら止められてしまいそうだったから、ごめんなさい。心の中で謝る。
「私がやってみてはどう？と、言って勧めたんですよ」
川崎先生が、笑顔で入ってくる。
「そんな、せんせ……」
舞子さんが無言で手を、目の前に出して、私の声を静止する。

「刺激になる事や、目標が、病気の改善に繋がることもありますから」
表情を崩さずに川崎先生が、お母さんに告げる。
「そ、そう言う事なら……」
お母さんが口ごもる。
「お母さん、お父さん。心配かけてごめんなさい」
精一杯の謝罪。きっとすごく心配しただろうから。
「でも、私やれて良かったよ！」
みんながくれた達成感が急に湧き上がってくる。
「お、良い笑顔。そうだ、みんなで写真撮りましょう」
そう言って優さんが自分の荷物から大きなカメラを取り出す。
「あ、じゃあ私がやりましょう」
お父さんが申し出る。
「いやいや、そんな私が撮りますから」
優さんが、恐縮している。
「いえいえ、あなたも娘と同じ舞台に立っていたんですから」
どうやらお父さん達は優さんの歌も聞いていたようだ。
「あ、丁度いいのが居たわよ」
カオルさんが誰かを見つけたようで、一旦部屋から出る。

「はい、撮りますよー」
香坂さんがカメラを構える。何でも自分のゴスロリ姿の写真を撮るのにずいぶんカメラにも詳しいとかで、手馴れたようにカメラを操作していた。
「じゃあ撮りますよー」
私の椅子を中心にお母さんとお父さんが隣に。舞子さんと優さんが後ろ、外側にカオルさんと川崎先生。みんなに支えてもらった私は世界一の幸せ者に思えた。
「膝は英語でー？」

……

静寂の後、カシャっと音が鳴る。

「あ、あれ？　みなさん笑ってくださいよ！」

香坂さんが慌てている。

みんなが顔を見合わせながら笑いだす。

「由香！　今よ！」

舞子さんの声が響いた後、二度目のシャッター音が聞こえた。

手紙、お金、約束

「ここに飾って置くわね」
あれから三日程で優さんから写真が届いた。それをカオルさんがベッドの近くの棚に飾ってくれる。みんながキョトンとしている写真と笑っている写真。と、もう一つ……
「か、カオルさん……それは何の冗談です？」
三つ目に置かれた写真になんか見なければ良かった気がするものが置かれていた。
「あら、いらない？」
カオルさんがとぼける。
「いりません！」
香坂さんの本家のゴスロリ写真だった。
「あーあ、由香に言っちゃおう」
あれ以来カオルさんともなんとなく親しくなった気がする。良い意味でも悪い意味でも。
「写真はお断りしますけど、服ありがとうございましたって伝えといてください」
私はやんわりかわす。
「あ、そういえばこんなのもあるわよ。じゃあお仕事して来まーす」
そう言ってCDと封筒を置いてカオルさんは行ってしまった。私の事は仕事じゃないのか……。
「ねぇねぇ、死神さん」
私は久しぶりにここに戻ってきた気がする。あの後は、川崎先生の指示による謹慎期間があったので大人しくしていなければならなかったからだ。
「報告遅くなっちゃったね」
相変わらず何の反応も無い。死神さんは相変わらず死神さんのまま、でもこれが良い。私はお気に入りの日傘をゆっくり開いて死

神さんに影を作ってあげる。
「紙芝居、上手くいったよ。みんな拍手くれて、わあーーーって言ってくれて。何か、すごかった。上手く言えないけど、すごかったよ」
私は死神さんに向き直る。
「ありがとね、死神さんにも沢山お世話になったよね」
ただそこに在ってくれる。それだけで救いになることもある。私はきっとこの黒猫に沢山救われている。そして私の作った物語のカギにもなった。だからお礼を言う。これは独り言では無い。ちゃんとした『お礼』だ。
「本当にありがとうございました」
敬意を払って、姿勢を正して、丁寧に頭を下げる。不吉の象徴の黒い猫に。サナトリウムに住み着いた死神に。誰も触れない不思議な猫に。
「あ、後ね、こんなのもらっちゃったんだ」
さっきカオルさんが置いて行った封筒とCDを死神さんに見せる。
「優さんて言う歌手なんだけどすごく良い歌を歌ってくれていてね。絶対、CD買いますって言ったらその前に送られてきちゃった」
えへっと、笑ってみせる。
「それに手紙も！」
可愛らしい四葉のクローバーのシールで留められた封筒を、丁寧に開ける。
中からまた、可愛い黒猫の絵が所々にあしらわれた手紙が出てきた。それだけで私の物語を覚えていてくれているんだって思えて、嬉しくなる。
中にはデパートのファンシーショップでこの便箋とシールを見つけた事。CDを早く聞いて欲しくて送ってしまった事。私の物語に感動して『諦めない事』について詩を書いてみたいと思っている事。こうしてたまに手紙を送りたいと思っている事が書かれていた。
「なんか……すごいね……」

死神さんに読んで聞かせる様に、声に出してゆっくり読んでいたのに、気持ちの方が後から追いついてくる。文に釘付けになり、遅れて胸から何かが込み上げてくる。まるで稲光を見た後に音が来るように、ワンテンポ遅れてやってくる。

「ねぇねぇ、死神さん」

私はもう一度隣に問いかける。

「返事……書かないとね」

胸がいっぱいで今になって涙が溢れてきた。

私は待ちきれずに、お母さんに買い物のお願いの電話をした。とびっきり可愛い便箋とシールを買ってきて欲しいと。

「やほー」

私服の舞子さんが夜になってやってきた。

「あの、面会時間は過ぎているんですけど」

読んでいた本にしおりを挟んで近くに置く。

「つれないなー、せっかく素敵な話を持ってきたのに」

「こんな時間に舞子さんがにこにこしながら入ってきたら怪しすぎるもの」

私は素敵な話と聞いて余計に怪しむ。

「あら、失礼ねー。ま、これを見てもそんな事言えるかしら？」

そう言って茶封筒をふらふらさせる。余計に怪しい……。

「何が入っているの？」

堪らず聞いてしまう。

「開けてみるといいわ」

そう言って茶封筒を手渡された。私はゆっくり封を切る。中を見て驚愕した。

「な……な……な……」

「あら、驚きで声もでない？　それとも感動かしら？」

驚きで声が出ないんです。と言うか理解出来ないんです。茶封筒の中には一万円札が三枚も入っていた。

「なんでお金！？」
やっとの思いで声にする。
「あら、私言わなかったっけ？　『アルバイトしてみない？』って」
完全に思考が停止した。
沈黙……
「あ……あれって例えじゃなかったの？」
私はてっきり仕事みたいな事を『経験』するだけだと思っていたのにまさかお金をもらう事になるなんて……。
「いいえ、完全に依頼したわよ」
いや、ダメだ、流されて、もらっちゃいけない。あんな素人の紙芝居でこんな大金をもらうなんて出来ない。
「こんな……もらえないよ……」
おずおずと茶封筒を返そうとする。
「はぁ……言うと思った」
舞子さんはやれやれ、と大げさな仕草で応えるも茶封筒を受け取ろうとしない。
「どうせ美羽ちゃんの事だから、『あんな素人の紙芝居でお金なんて貰えないよ。』とか思っているんでしょ？」
「う……」
今思っていた事をズバリと言い当てられ言葉に詰まる。
「私は前も言ったようにそんな素人の美羽ちゃんに正式に依頼したの。だからこれはあなたがもらって当然の物だわ。」
舞子さんは当然のように言うけれど、私にはまだ納得が出来なかった。
「そんな事言われても……こんな大金……」
私の紙芝居に三万円の価値があるのか？　……そう考えただけで現実に引き戻された。三万円の価値があるのか。三万円の価値しかないのか。私は心の奥で混乱する。
「まぁ、そう言わずに受け取りなさいなって。それにあなたの紙芝居の話はこれで終わりじゃないのよ？」

混乱している私にさらに舞子さんは続ける。
「子供達に大好評でね。またあのお話が聞きたいって子が続出しちゃって、あそこに居なかった子まで聞いてみたいってなっちゃってさ。私勝手にあの紙芝居使っちゃったのよね」
それは嬉しいけれどこのお金となんの関係があるのだろう？
「要するに、美羽ちゃんが持っている著作権を侵害しちゃったわけ。訴えればもっとお金ふんだくれるかもよ？」
なんて笑いながら言う。
「別にそんなの気にしないのに」
私はむくれて言う。
「じゃあ著作物の使用料としてでも良いし示談金としてでも良いし。なんだったら個人的にあの紙芝居を買っても良いわ。とりあえず、何を言ってもあなたの元にその三万は渡るから……後の使い道はどう使っても構わないわ」
そう言って『じゃあ由香とカオルと食事に行く約束があるから』って呆けている私と三万を置いて出て行った。
「うーん、私本当にこれ貰っちゃって良いのかな？」
次の朝、部屋に来たカオルさんに聞いてみる。
「良いんじゃない？　と言うか聞いてよ。舞子ってば最初、それを私に渡せって言ってきたのよ？」
「カオルさんは何で断ったの？」
「だって美羽ちゃん絶対断るでしょ？　だったら舞子に説得させた方が確実に美羽ちゃんの元に渡ると思ったの。ほら、現にそこにあるでしょ、それ」
そう言って茶封筒を指差す。この人に相談したのが間違いだったようだ。

「ねぇねぇ、死神さん」
私はまたココに来ていた。
「三万円だって……」

私には重い。でも、少し悔しい。私はなんなのだろう。卑屈になってみたり勝手に自信家になってみたり、自分の事がよくわからない。

「何に使うかは自由……かぁ」

試しに使い道を考えてみる。と言っても三万の使い道はそんなに思いつかなかった。両親に渡してしまうのも手かもしれない、そう考えていると自然と自分が三万を受け取ってしまっているような気がして考えるのを止める。

そういえば優さんはあの時の報酬はどうしているのだろう？それを聞いてからこの三万をどうするか考えよう。そう思って手紙の下書きを始め、ペンが止まると本を読んで過ごした。

「うーん、これって書き過ぎだよね？」

手紙の下書きをカオルさんに見せる。始めての経験なので不安で仕方なかったから。

「書き過ぎって言うかこれ、何ページあるの？」

メモ帳をめくる手が止まらない。

「私そんなに書いたかな？」

「ざっと三十七ページ半ってとこかな。とりあえず私は読むだけで三日はかかるわね」

数えていたんだ……。

「うー、でも話したい事だらけでどんどん出てきちゃって……」

「まぁ、わからないでも無いけどね、その話したいことだらけって言うのを書いて電話番号とオフの日を聞いてみるとかどうかしら？」

「で、電話！？　そんないきなり失礼じゃないかな？」

「私の見た限りでは、そんな些細な事気にする人じゃないと思うけどなぁ」

「でも、仮にも優さんは芸能人だし……」

「芸能人に『こないだのお給料はどうしていますか？』なんて聞くのも失礼じゃない？」

う……それは確かに考えると失礼かも。
「そもそも前回のイベントはみんなボランティアよ」
その言葉に心臓を止められた気がした。
「そう……なんだ……」
私バカみたいだ。そんな事も気付かないなんて。一人で始めて仕事した気になって、もらって良いものかどうか迷って、私はバカだ。
「はぁ、舞子が上手くやっているのかと思ったけれど、あの三万円の事で悩んでいるのね？」
カオルさんに見透かされて驚いてしまう。
「あのね、あの人達はみんなそれなりに稼ぎもあって仕事もある人達なの。あなたは病人、しかも仕事の経験も無い。ボランティア何ていうのは余裕のある人が善意で余裕の無い人にしてあげる事なの。受け取る側によっては偽善にもなるような事よ」
厳しい言葉に私はさらに驚いてしまう。優さんの優しさを偽善なんて言って欲しくない。
「あなたは偽善って言われても、人気取りって言われても、点数稼ぎって言われても、それでも誰かの為に無償でしてあげたいって覚悟であの紙芝居を書いたの？」
そもそもそんな風に考えたことが無かった。
「そ、それは……」
「私は舞子や優さんみたいに優しく無いからはっきり言うわ。その覚悟も無しに舞子にそのお金を返すなら私が許さないから」
ああ、そうか、このお金の出所もわかってしまった。私はどこまでバカなのだろう。
「カオルさん。お願いがあるんだけど……」
私はこのお金の優しさと思いに応えられる人になりたいと思った。
「舞子は美羽ちゃんの笑った顔が良いって言っていたけれど、私はその顔の方が好きよ」
「へ？　私どんな顔しているの？」
「それは私だけの秘密」

そんな事を言うカオルさんはいつものカオルさんに戻っていた。
「ところでカオルさん。お願いの前に一つ良いですか？」
カオルさんはキョトンとしている。
「今度の賭けは三万円の使い道ですか？」
「な、なんの事でしょう？」
明らかに動揺している。とりあえず二人の賭けは台無しにしよう。
そう心に誓った。

「本当に？　ほんとーに良いの？」
カオルさんが執拗に聞いてくる。
「良いんです。最初はそれにします」
キッパリと答えた。
「うう、わかったわよー。赤いやつね」
私はカオルさんにあるお願いをした。これは私の『賭け』であり『挑戦』である。
決戦は次の日曜日。優さんに手紙を書きたいから、舞子さんにも、カオルさんにも、川崎先生にも、お母さんにも、お父さんにも居てもらいたいから。それら全ての条件が次の日曜日は揃う。
「ねぇねぇ、死神さん」
私は死神さんの隣でにやにやしている。
「ふふ、なんでもなーい」
そんな態度にも動じず死神さんはくーくー眠っている。
いつものように読書をして過ごしていると思わぬ訪問者がやってきた。
「わー、猫さんだー」
数人の子供達と舞子さんだ。みんなパジャマ姿な所を見ると小児病棟の入院患者だろうか。
「あ、ダメよ！」
こちらに今にも走り出しそうな子供たちを舞子さんが制止する。
「あの、猫さんは触られたりするのが嫌いだから触ろうとすると逃

げちゃうのよ。それより！あそこのお姉ちゃんがそうよ」
舞子さんがそう教えて子供達を抑える。子供の一人が駆け寄ってくる。栗毛のふんわりした、黒目のパッチリした少女だ。
「ねぇ、お姉ちゃん。またお姉ちゃんの声であのお話聞きたいな！」
驚いて舞子さんの顔をうかがう。
「その子、慧（ケイ）ちゃんって言うんだけどね。美羽ちゃんのファンなのよ」
そんな、ファンだなんて……。嬉しいけど申し訳ない複雑な気持ち。
「お姉ちゃん。慧ね、明日手術なの」
そして衝撃の告白。
「だからね、明日。慧がんばるから、諦めないで病気治すから、そしたらまたあのお話、聞かせてくれる？」
昔の自分がフラッシュバックする。まるで優お姉ちゃんと約束したあの時の様で私は戸惑ってしまう。
「うん、良いよ。また読んであげる」
私は笑顔で答えてしまった。優お姉ちゃんもこんな気持ちだったのだろうか。
それから少し子供達と普通の話をしてすぐにみんな日常に戻って行った。
舞子さんは帰り際に私にあの紙芝居を渡してこう言った。
「また、練習しとかないとね」
カオルさん……そういうのも黙っていて欲しいな。
そんな事を思いながら紙芝居をゆっくりめくって確かめる。私の産んだ物語。世界は物語で溢れている。きっと似たような話もいくつもあるだろう。でも私は此処に辿り着いた。いくつもの物語や言葉に。大切な人に。囲まれて紡がれて私は此処に来た。だけど私はまだ先へ歩いていく。いや、歩きたい。だからやってみたい。まだ誰も為し得ていない事を。
私の、私にしか出来ないであろう事を。それを思ってまた顔がに

やにやしてしまう。ふと隣に目をやると死神さんはいつの間にか居なくなっていた。
「ふふ、みてなさいよー」
私はまだまだこのクセを治せないみたいだ。

「でも、本当にこれで良かったの？」
カオルさんが私に丁寧に包装された紙袋を渡してくれる。
私はリボンを解き中の物を確かめる。
「うわぁ……。やっぱカオルさんセンスあるよね！ありがとう。これで大丈夫だよ」
準備は整った決戦はもう明日だ。カオルさんは納得いかない顔で私を見つめていた。
大丈夫、覚悟は出来ている。

初めてのプレゼント

「ねぇねぇ、死神さん」

いつもの様にいつもの場所で死神さんに語りかける。だけど周りはいつもと同じじゃなかった。

――――視線。視線。視線。視線。

あらゆる場所から私への視線を感じる。もちろん舞子さんや、カオルさんや、川崎先生。お父さんやお母さんも私を見ている。

私は慣れた手つきで日傘を差す。さすがに緊張してきた。手が震えている。

死神さんはそんな中でもいつもの様に寝ていた。私は震える手でカオルさんに買ってきてもらった紙袋を取り出す。

「えへへ、死神さんにプレゼントだよ」

紙袋のリボンを解いて、中身を取り出す。真っ赤なリング。シルバーの鈴の付いた首輪。

「気に入ってもらえると良いんだけど……」

死神さんにおずおずと手を伸ばす。ここからだ。ここからが本番。死神さんは未だかつて誰にも触れさせていないのだ。私も何度もチャレンジしてきた。だけど目をバチっと開け静止させられてきた。

「私に触れるな！」

まるでそう言っている様な知性を感じさせるあの瞳。私はあの瞳に魅入られた。だけど、もし死神さんに知性があるなら、心から思えば気持ちは伝えられるんじゃないだろうか。私はそう考えた。

相変わらず震えている手が死神さんに近付いていく。そろそろだ。

バチッ

すごい勢いで死神さんの目が開いた。私の方を見上げてくる。圧倒的な威圧に思わず怯みそうになる。だけどここで負けちゃダメだ。私の思いを伝えないと。

「死神さん、これ。受け取って欲しいんだ」

私は首輪を開いて見せる。死神さんはジッとこちらの動きを見ている。
「私ね、いつも死神さんにお話聞いてもらっていたじゃない？そのお礼って言うかさ……。その……あの……」
うう、あの目が痛い。でも私はちゃんとこれを渡したいんだ。
「私、誰かにプレゼントとかするの、始めてなんだよ？　だから！　その……受け取ってください！」
私は恋する乙女か！　心の中なら突っ込めるのに言葉にすると上手く言えないのはなんでなんだろう……。顔もきっと真っ赤だし……。
だけど、死神さんの反応は予想外のものだった。ゆっくり立ち上がり私の方に三歩ほど歩み寄り、首を上げて私を見上げてきた。
私はしばし唖然としてしまう。だけど死神さんの行為の意味を頭が理解し、自然と震えが止まった。
まるで永遠にも思える静寂。私はゆっくりと首輪を死神さんの首に回す。
チリリっと鈴の音がする。その音だけがこの静寂を破って時を進めている様だった。始めて触れる猫の毛が柔らかくて少しこそばゆい。慣れない動作で首輪を付けているのに死神さんはまったく動かず大人しくしていてくれた。
「はい、出来た。受け取ってくれてありがとう。やっぱり黒猫には赤い首輪だよね。良く似合っているよ」
私は死神さんをゆっくり眺める。もう少しだけ、何かしたくなった。たまらなくこの黒猫が、死神と言われる猫が愛おしい。私は死神さんの額にそっと口づけをした。言葉にはしないけどこれは願いのキス。
『もし私が死ぬ時は、どうか魂を死神さんが導いてください』と心の中で願う。
私が唇を離すと死神さんはクルリと振り向いて、走って行ってしまった。

チリリチリリっと鈴を鳴らして。
そしてその鈴が世界の音を取り戻した。
ガヤガヤと色々な声や音が聞こえてくる。
今まで感じていた視線が色々な方向へ散らばり平穏へと還って行く。
私の心臓はまだ高鳴っていた。
「私は恋する乙女かっつーの」
今度は声に出して、でも誰にも聞こえないように小さな声で呟く。
さぁ、私も平穏へ還ろう今日は沢山話したいことや、やりたい事がある。
私は日傘をたたみ立ち上がろうとして、異変に気付いた。
しかしそれは日常的に行われていた事なのでその時まで気付けなかった。
視線が空を仰ぐ。とっさに目を閉じる。
衝撃。
でも痛みは無かった。私は目を開く。
「危なかったわね。美羽ちゃん」
舞子さんの顔がそこには在った。
「私、また腰が抜けたのかな？」
足に力が入らなかった。この間といい、なんと弱い体だろう。
「立てる？」
舞子さんがゆっくり私を立たせてくれる。前とは違ってすぐに立てた。
「さ、お姫様。お部屋へお連れしましょう」
手をあの時の様に差し出してくれる。ああ、こうやって部屋へ戻るのも久しぶりだな。まだ、舞子さんが担当をやめてそれほど時間が経った訳でもないのに、すごく前の様に感じる。
それはきっと、これまで色々な事を体験し、退屈では無い日々を過ごし、成長して来たからなのだろう。私はずっと自分を不幸だと呪ってきた。だけど視点を変えれば幸せはいつも傍らに合ったのだ。

お父さん、お母さん、優お姉ちゃん、舞子さん、川崎先生、カオルさん、優さん。
私の病気を、お父さんや、お母さんは可哀相と言って沢山優しくしてくれた。でも可哀相なんかじゃなかったのだ。私は恵まれている。今ならそう思える。確かに沢山の不自由をしてきた。学校にも通えず、病院で過ごす毎日。知り合っても、仲良くなっても、すぐに離れてしまう人々達。どうしようもない無力感。そしてすぐに悲鳴をあげる私の体。
何度も泣いた。だけどそれは少なからず誰にでもあることなのだ。あるのは大小の違い。
人は病気もすれば泣く事もある。もちろん別れる事も、出会う事も、そして笑う事も。
私は何度も諦めそうになった。自分の人生を消してしまいたかった。でもそうしなくて良かった。諦めなくて良かった。だから今この手の温もりがあるのだから、こうして大事な物が出来たのだから。
だけど人はいつの時代も欲張りだ。私はもっと何かしたいと思っていた。そう、どんな物語でも盲目な欲張りには必ず代償が付く。
私は病室でみんなの笑顔に囲まれこの笑顔がもっと見たいと欲張ってしまった。私は結局どこまで行っても弱いままなのだ。
次の日。私は小児病棟の方に来ていた。
「こうしてミウは天使になり世界中に四つ葉のクローバーが稀に生えるようにし、それを手にしたモノに幸福を与える天使になりました」
「おしまい」
子供達を集めて紙芝居を読んで聞かせる。子供達の純粋で真剣な眼差しが嬉しい。お話を読んであげ、みんなで絵を描いたり死神さんの話をしてあげたりする。みんなが笑ってくれるのが嬉しくてつい、はしゃいでしまう。
「はいはい、そろそろおしまいにしましょうねー」
舞子さんがやって来て、そう告げる。

「あのね、あなたも一応、病人なんだからちゃんと療養しないとダメでしょう」
お説教されてしまう。
「大丈夫だよ！　私なんだか最近すっごく元気だし、私にも出来る事合ってなんか嬉しいし……それに、楽しいんだこういうの」
人の笑顔を作る事がこんなに楽しいなんて思ってもいなかった。
「舞子さんも好きでしょ？　人の笑顔見るの」
私は当たり前の様に聞いてみる。
「そうね、人の笑顔を見るのは好きね。でも、もっと好きなものがあるわ」
舞子さんが悪戯っぽい笑みを浮かべる。これは私を驚かせる事を思い付いた時の顔だ。いい加減これも克服しよう。
「なに？　舞子さん、私の事驚かすつもりなら……うひゃあ！」
私は目の前に警戒し過ぎて思わぬ方向からの突然の感触に驚きの声をあげてしまった。
「ご、ごめんなさい。お姉ちゃん……」
まだ小学校低学年くらいの小さな女の子が私の手を引っ張ったのだ。
舞子さんも驚きの表情で見ている。
「い、良いのよ。どうしたの？」
私はしゃがんで目線を合わせて聞いてみる。
「あのね、これ！　お姉ちゃんを描いたの」
それは紙芝居をしている女の子の絵。クレヨンで描かれた可愛らしい絵だった。
「ありがとう。すっごく嬉しいよ」
私はそっと頭を撫でてあげた。
「お姉ちゃん！　また来てね！」
女の子はそう言って走って行ってしまった。
「こらー、走るなー！」
舞子さんのお叱りが飛ぶ。

私は嬉しさで胸がいっぱいだった。しかしそれもすぐに未知への不安に変わる。
しゃがんだまま立てない。足に力が入らない。まずい、体調が悪くなるとこうやって自由に出来なくなる。
「どしたの？　美羽ちゃん？」
いつまでもしゃがんでいる私を不審に思った舞子さんが声をかけてくれる。
早く、早く動いて！　心の中で叫ぶ。
「ちょっと感動しちゃって……」
私は足が動くまで時間を稼ごうとごまかした。
動いて！　動いてよ！　ぐっと力を入れる。
なんとかよろけながら立つことが出来た。
「大丈夫？」
私の顔色をうかがって舞子さんが聞いてくる。
「大丈夫だよ！　ちょっと感極まっちゃっただけ！」
私は慌てて言い訳する。舞子さんと……自分に。

「ねぇねぇ、死神さん」
「私、大丈夫だよね？」
自分の病室への帰り、どうしようもない不安が襲って来て死神さんの隣に来てしまった。
最初は極度の緊張や驚きから、腰が抜けたものだと思っていた。だけど、少なくとも舞子さんに驚かされていた頃は、こんな事は無かった。あの紙芝居の日までは。
「クセになっちゃったのかな？」
無理して笑ってみる。
死神さんは相変わらずだった。
「首輪、気に入ってくれた？」
無視。死神さんは良くも悪くもマイペースだ。だけど首輪を見る

と思い出してしまう。あの笑顔達を……。

「まったく、私の忠告は全然効いていなかったのね」
舞子さんがいつものベンチから病室まで送ってくれる時にそんな事を言い出した。
「へ？」
間抜けな声で答える。
「あなたは病人なのだから、あの猫に触っちゃ駄目って言ったでしょう？」
そういえば最初の頃にそんな事を言っていたっけ。
「でもまさか本当に触ってしまうとはね」
舞子さんはどこか嬉しそうだった。こんな顔をさせているのが自分だと思うと、また喜びが込み上げてきた。

「あの舞子さんの顔キレイだったなぁ……」
死神さんの隣で呟く。
「本人には内緒だよ？　死神さん」
無視。私は構わず続ける。
「そういえばあの後、お母さん凄かったんだよ？」
「『引っ掻かれてない？　怪我は無い？　倒れそうだったけど大丈夫？』って、ちょっと心配し過ぎだよね」
あの時のお母さんの顔を思い出して、ふふっと笑って見せた。
「その後ろでカオルさんは親指立ててくれていてね、お父さんと川崎先生はクールっぽく装いながら、それでも笑ってくれていたんだよ」
まるで一枚の絵を描くようにあの病室に笑顔を置いていく。
「そうそう、香坂さんも来てくれていてね！『なんで私は仲間はずれなのよー！』って」
香坂さんが怒っている姿を真似して死神さんに見せる。

「で、カオルさんが『あなたが居ると本物の死神より恐いから』ってゴスロリ服の香坂さんの写真を持ち出して、かばってくれてね。またみんなで大笑いしちゃってさ……」
無視。
「死神さん……私、死にたく無いよ……」
無視。
「なにか……いって……よ……」
無視。
「ねぇ……しにがみさん……」
無視。
いつの間にか空は重い雲に覆われていて、日傘が無くても暗く肌寒かった。
私は空より先に泣いてしまった。それでも死神さんは隣に在ってくれた。きっとこれが死神さんの有り方なのだろう。
今日は、舞子さんは迎えに来ない。一人で戻らないと。そう思うだけで涙が止まらない。
チリリ
ふいに鈴音がして死神さんの方を見ると死神さんが去っていく所だった。私は余計に寂しくなった。
けれど死神さんの居た場所の異変に気付いて理解した。
ぽつり、ぽつりと白いベンチがくすんでいった。
私も急いで病室に戻った。明日も子供達の所へ行きたい。その一心で、なんとか雨に濡れる事だけは避けられた。だけど、病室に戻っても私はただ泣く事しか出来なかった。
「……はね……ちゃん！　……美羽ちゃん！」
私は重たい瞼を開く。
「わ、どうしたの！？　目、真っ赤よ？」
カオルさんが驚いた顔で私を見ている。あのまま泣き疲れて寝てしまったようだ。
「これは、その、なんか目かゆくて……」

テキトウな嘘を吐く。
「ふぅ……そ、じゃあ目薬貰って来るからあんまり掻いちゃダメよ？」
そう言ってカオルさんは体温計を渡して病室から出て行った。
「熱……あったら明日行けないよね……」
私は布団でテキトウな温度になるまで体温計を擦った。
なんとなく体が重いけれど、きっと泣いた疲れだろう。そう自分に言い聞かせて早めに眠りについた。
朝。私の体は普通だった。やっぱり昨日の異変は何か偶然が重なっていたのだろう。そう思う事にした。
今日も小児病棟の方へ出向く。
私が紙芝居の準備をしていると沢山の子が集まって来てくれる。子供達の喧騒が頭に響く。
昔はこういうの嫌いだったのにな。
私は小児病棟に居る時、周りの子供達を見下していた。些細な事でバカ騒ぎして、うるさくて、言う事聞かないで、迷惑ばかりかけて、最低だって。でも間違っていた。最低なのは自分だ、嘘吐きで、純粋な子達を妬んでいただけだったんだ。この子達を見ているとそう思ってしまう。
考えているとどんどん自分が嫌いになっていくので、私は考えるのを止め子供達と向き合う。そしてそんな自分でも『出来た事』と見詰め合う。後何回出来るかもわからない。一言、一言に、私の魂を込める。弱気になるな。諦めちゃダメだ。自分にそう言い聞かせる様に紙芝居を読む。
読んでいる間、一人の男の子が気になった。腕を包帯で吊られ、頭に包帯を巻いた男の子。
それだけなら、事故か何かに合っただけだろうと、思うのだが……。
すごく寂しい目をしている。他の子達とは明らかに違う、諦めた様な、悲しい様な、苦しい様な、深く、暗い目。

「おしまい」
大きく息を吐く。熱くなり過ぎたかもしれない。気付けば汗で体がしっとりしている。
「お姉ちゃん！」
廊下の方で点滴を引きずりながら舞子さんと慧ちゃんがやってきた。
「あ……慧ちゃん、ごめんね、今読み終わっちゃったの」
私は申し訳無い気持ちでいっぱいになった。
「ううん、今日は挨拶だけなの！　私ね、手術がんばったよ！」
小さく無邪気な笑顔が眩しい。
「そっか、偉いね」
頭を撫でてあげる。
「お姉ちゃん元気無い？」
慧ちゃんがそんな事を言う。少し熱いけど私は元気なはず……
「み、美羽ちゃん！？」
舞子さんが焦った様な声を出す。私は慧ちゃんに元気だよって言おうとして、慧ちゃんと舞子さんの顔が『横』になっている事に気付き、そこで意識を失った。

私は暗闇の中を歩いていた。
「これじゃ、迷子のミウだよ……」
当ても無い真っ暗闇、途方も無いただひたすらの闇。私の身体を恐怖が支配する。
「誰か！　誰かいないの！？」
かつてない大きな声で叫んだ。不思議と体は辛くない。
ひたすら暗闇を歩く。迷子のミウみたいに風景が見えるわけでもなく、黒猫が出てくるわけでも無い。　私は何をしているのだろう？　もしかして死んでしまったのだろうか……。
考えれば考えるほど恐ろしくなる。闇とはこんなに恐いものだっ

たのだろうか。そもそも私は本当に闇の中に居るのだろうか？　それとも現実の中に居るのだろうか？　何もわからない。ああ、もういいや、どうせ私は……そう思ってハッとする。ミウと同じ絶望の淵で私に一筋の光を見せたのはあの人だった。

「諦めちゃったらもったいないよ」

あの丘を夢に、あの人を希望に！　そして私も子供達に希望を見せた。その責任も果たさないまま終わりたくない！　私はまだまだやりたい事があるんだ！　優さんに送った手紙の返事だってまだ貰ってない。こんな闇の中に居る場合じゃないんだ！　早く元の場所に、私の在るべき場所に帰らなきゃ！

そうやって思い立つと闇の中白い雨が降ってきた。雨が地面を白く染めて行く、あっというまに次は白い世界になった。

「ここは、一体……」

いきなり白い世界が現れて唖然とする。

「良いよ、私は諦めない。絶対みんなの前に戻るんだ！」

白い世界の中で叫ぶ。

言葉が響いているのかさえわからない静寂。だけど私は歩き出した。

「諦めない。諦めたらもったいないから……。諦めない。」

何度もあの人の言葉を呟く。自分を奮い立たせるように、間違えてしまわないように、後悔しないように、ただ歩いた。

借り物の言葉だけど、貰い物の言葉だけど、ただの言葉だけれど、それはかけがえのない物になった。同じ言葉でもきっとあの時、あの瞬間に、聞かなければ、きっとこんなに大切な物にはならなかっただろう。

人間が生み出し自在に操ってきた言の葉、アダムとイヴが知識の実を食べる前ですら存在したであろう、自分の意思を伝える最初の手段。それはやがて色々な形に変わり上から下へ、右から左へ、人と人を繋げ時には離し、私の元に届いた。そして私はこれをもっと繋げたい。出来る限り多くの人に、出来る限りの生を持って伝えた

い。今はそれが「生きる」事だと思うから。
「やっと歩き出した所なんだから！　まだ死ねないっつーの！」
汚い言葉で叫ぶ。今の私は神様だって罵倒してみせる。
「負けない！　折れない！　諦めない！　私はもっと生きてみたいんだーーーーーーー！！！」
例えこれが罪でも、罰でも、私は叫ぶ。生まれて歩きたての子供が『死にたい』なんて考えない様に、私はもう死ぬ事を考えなくなっていた。
そして白い世界が割れる。黒に塗り潰されて行く。
世界が黒に戻った時。あの白いベンチがぽつりと世界の中に置かれていた。
私はまるでそこに在る事が自然な事の様に吸い寄せられていく。
いつもの様に腰かける。
「ねぇねぇ、死神さん」
隣にあの、黒猫は居ない。
「私はまだ諦めないよ！」
最後の一声をあげて私は意識を失った。

終わりは始まり

「ねぇ、まだダメなの？　川崎先生？」
私は診察を受けながら聞いてみる。
「ダメです。まったく、あんな無茶して……。小鳥遊さんが慌ててコールしてきた時は本当に驚いたんだから！」
私はどうやら小児病棟で熱を出して倒れたらしい。カオルさんによると子供達は沢山泣き出すし、お母さんとお父さんは心配して駆けつけるし。いろいろ大変だったらしい。
私が異変を申し出ずに、自分すらも騙して、紙芝居を読みに行った結果は散々な物だった。
そんな中、子供達を落ち着かせ、迅速に対応してくれたのは舞子さんだったそうだ。
「笑顔を作りに行って、泣かせてどうすんだっつーの」
ぼそぼそ悪態を吐く。
「こら！　言葉が悪いわよ。九月さん」
川崎先生に頭を小突かれる。
「あはは、ごめんなさい」
独り言のつもりが、聞こえてしまった恥ずかしさで顔が火照っていく。
「もう！　あなたはもっと自分の事を自覚してください」
流石に今回は返す言葉も無い。私は知らないうちにきっと諦めかけていた。だから焦ってこんな事態を引き起こした。全部自分の弱さが招いた結果だ。
「私、焦っていたんです。足に力が入らなくなって、もうすぐ紙芝居聞かせてあげられなくなるんじゃないかって。今までこんな事無かったから……」
「足に力がって……いつから！？」
川崎先生が驚きの顔で、私の言葉に噛み付いてくる。

「え、えっと、最初は舞台で紙芝居を読んだ後で……でもあれは腰が抜けただけって思って……。優さんも初舞台の後そう言う事が合ったって言っていたし……」
ズルイ自分がまた出て来た。
「その後は、死神さんに首輪を渡した時と、小児病棟の方で紙芝居を読んだ後だったから、緊張がいけなかったのかなって思って……」
本当はもっと異変に気付いていたはずなのに……。
「ごめんなさい」
こうやって謝るのはズルイ。相手が許さなければいけないように私は誘導している。
「……」
だけど川崎先生からは返事が無かった。
「あの、先生？」
許されない事が恐くて先を急かす。喋る度に自分が汚い人間に思えてくる。
「あ、ごめんなさい。ちょっと考え事していて……」
うう、謝っているのはこっちの方なのだけれど……。
でも、すぐに違う不安が襲ってきた。私の異変を聞いて、川崎先生の様子が変わったという事実が圧し掛かる。
「あの！　私ちゃんとしますから、生きたいって思っているから、だからこれからはちゃんと言います」
夢の中で誓った決意を、現実にするために言葉にする。
単純だけど一番効果的に思えた。
「生きたい……か……」
川崎先生の反応が恐い。今にも絶望を告げる白い少女に変わってしまいそうで私は眼を閉じた。
「美羽ちゃん」
突然川崎先生に名前で呼ばれて驚いてしまう。
「私は医者失格かもしれない……」
躊躇うように、不安を顕にする川崎先生が自分と重なって見える。

だけど彼女は絶望を告げる白い少女なんかじゃ無かった。川崎先生の瞳から涙が零れる。
「私は……あなたを治す術を今は持っていない」
なんとなく気付いていたけれど言葉にされると重い。だけど沢山の死を見てきたはずのお医者さんが、泣いてくれる。絶望を告げているんじゃない。これは川崎先生の優しさだ。
「だけどあなたに生きて欲しいわ。だから私も諦めない。根性論なんて信じないけれど、生きたいと願っている人達を救う為に、私達医者はいるのだから」
「川崎先生……。いや、玲先生……。ありがとうございます！」
『ごめんなさい』より言わなきゃいけない言葉が私にはあったのだ。こうやって出会っていく人達に学んでいける私はきっと、やっぱり、幸福なのかもしれない。
そして玲先生は精密検査の後。私に時間が残されていない事を告げた。

「ねぇねぇ、死神さん」
私は窓の外に目をやる。いつものベンチにいつもの様に黒猫が眠っている。その隣にそっと日傘が置かれている。カオルさんにお願いして、風の無い日や晴れて日差しの強い日はあそこに置いてもらっている。
だけど私はあの風景がとても遠い世界になった気がしまっていた。
『これからは外も暑くなるから、外出は控えるように』
玲先生に告げられた言葉が頭の中で響く。もう外は夏だ。近くで向日葵が咲いているのが見える。日傘、日向、向日葵、どれもが今の私には眩しかった。
「死神さん……」
死神さんの隣に自分を当てはめる。それをそっと迎えに来る舞子さん。どれも過ぎた思い出だけれど自然と笑みがこぼれた。

「まったくもう、勝手に倒れるなんて私の監督責任が問われちゃうじゃない」
カオルさんがぼやく。
「うう、返す言葉もございません……」
本当に見つからなかった。だってもう三回目だし……。
「ま、いいんだけどさ。本当心配したんだから」
実の所私が倒れていたのは二日程でカオルさんは、ほぼ付きっきりで側に居てくれたそうだ。
心配で来てしまったお父さんと、お母さんをなだめてくれたのもカオルさんだったらしい。
「慧ちゃんも、わんわん泣いちゃって大変だったみたいよ？」
そうだ、私はあの子の前で倒れてしまったんだ。すごく不安にさせちゃっただろうなぁ。
「慧ちゃんに紙芝居読んであげたいなぁ」
そう呟くとカオルさんがじっとりした目で私を睨んでいた。
「まずは自分の病気治してからね！」
そう言いながら白い封筒で頭をペシッと叩かれてしまった。
「あ、これ……」
四葉のクローバーのシールが見えてその封筒が何なのかすぐにわかった。
「はい、あなたに幸運が届きますように」
カオルさんがそう言って封筒を渡してくれた。
「あ、ありがとう」
私はあっけにとられて普通にお礼を言うだけしか出来なかった。
「ありゃ？　もっと喜ぶと思ったんだけどな……」
カオルさんがポカンとしている私を見て不思議そうにしている。
「い、いや、嬉しいけど……。何だかカオルさんに、舞子さんが一瞬重なって見えて……」

「なに？　それー！　やっぱり私より舞子を取るのね？　美羽ちゃんは！」
わざとらしく腰に手を当てて、カオルさんは怒っているポーズを取る。
「そういうつもりじゃ無いんだけど。なんだかカオルさんって、もっとドライなイメージだったから」
その言葉に少し驚いた表情を見せた後、カオルさんはそっと呟いた。
「きっと、美羽ちゃんの影響ね」
「私の影響？　私、何か、したっけ？」
「まあ自分では気付かないのよね、この手の子って……」
やれやれと、カオルさんは大げさに手を広げ、首を振る。
「最初から言ってあげようか？　美羽ちゃんの武勇伝を……」
う……何だか嫌な予感がしてきた。
「まずは舞子の事を心配してナースステーションに来た時だったかな？」
「わーーーーー」
私は大声を上げて続きを遮った。今思うとこのサナトリウム来てから私は恥ずかしい事ばかりしている気がしてきた。そしてそのほとんどをカオルさんに目撃されている……。
「こら！倒れた人間がそんなはしゃがないの！」
おでこにデコピンをされる。
「いたっ。でも私のその武勇伝でカオルさんが丸くなるってどういうこと？」
「まあ、一所懸命さに負けたと言うか、大体看護師とか医者って患者さんと距離を置くものなのよ。それなのに、あなたは自然と人を惹きつけているの」
「それはきっと舞子さんのせいだと思うんだけどなぁ」
「あら、舞子だってあなたに出会って変わっているわよ？」
舞子さんが変わっている！？　あの舞子さんが！？　一体何が変

わったのだろう？　私には検討もつかなかった。
「あなたが倒れた後も舞子はしっかり仕事をこなしていたわ。あなたに出会う前の舞子なら三日は使い物にならなかったと思うんだけどね」
「舞子さんの事だからどうせ私なら大丈夫。とか思っていたんじゃないの？」
私は少しむくれて言う。
「あら、ちゃんと心配していたわよ？　だけど、『もし、私がここで立ち止まったら美羽ちゃんに笑われてしまうから、自分に出来る事をするんだ』って意気込んでいたわね」
あの人は本当に……。いつも私より先に行ってしまう。悔しさと嬉しさの入り混じった複雑な思いが溢れ出す。
「まぁとにかく、舞子とあなたはとても素敵な関係だと思うわ。私、少し妬けちゃうもの」
笑いながらそんな事を言って、カオルさんは病室を後にした。
私はカオルさんがくれた封筒に目をやる。消印は私が倒れた日付になっていた。
「優さん、すぐに返事くれたんだ……」
返事がずいぶん遅れてしまった事になる。こういう思いをすると自分の体を呪いたくなる。
嫌な考えが溢れ出す前に優さんの手紙を読む事にした。
中の手紙は前と同じ黒猫の便箋。そこに優さんらしい丁寧な字で沢山の事が書かれていた。
「あの黒猫に触ったなんてすごいですね！　私は始めてのお給料なんて、自分の為に使っちゃったのに、美羽ちゃんはやっぱりすごいなぁ」
そんな風に言ってくれる優さんはもっとすごいです。
「最近は美羽ちゃんの影響で創作意欲がどんどん沸いてお仕事がんばっています。新しいアルバムが出せそうなので、完成したらすぐに美羽ちゃんに送るから感想聞かせてくださいね！」

優さんって本当に優しいなぁ。私なんかが、優さんに影響与えて悪い方に行かなければ良いけど……。

「でも、実は、ちょっと作詞の方で煮詰まっています。美羽ちゃんの言葉がまるで魔法の様に渦巻いていて。私より美羽ちゃんが詩を書いたほうが上手く出来るんじゃないかって考えてしまって……」

魔法か……。その言葉で私は忘れ去っていた夢を思い出した。

「私、そういえば魔法使いになりたかったんだっけ……」

もちろん小さい頃の話。お母さんに読んでもらった『シンデレラ』の魔法使いに憧れていたのだった。

「私が魔法使いになったらお母さんにキレイなドレス着させてあげるね！」

そう言った私の前で、お母さんは急に泣いてしまった。それからその夢はお母さんを泣かせる悪い夢に変わってしまった。だから口にしなくなり、成長するにつれて魔法など無いと、現実を知ったフリをして忘れてしまっていた。

「舞子さんの言葉も魔法みたいだったなぁ」

でも実際は魔法でも何でも無い。ただの言葉だ。

「あ、そっか、舞子さんは言葉の使い方が上手いんだ」

あるべき場所にあるべき言葉を埋める。理屈は簡単だけどそれはとても難しい事だ。それは歴史を紐解けばわかってしまう。言葉で分かり合えないから……。あるべき場所にあるべき言葉を置けなかったから。人は間違え、同族同士で殺し合い、戦ってきた。

だけどもし、あらゆる言葉を、あるべき場所に置ける人が居るとしたら……。そうすればきっと。色々な人の助けになるんじゃないだろうか、時には傷つけ、時には癒し、時には見守る。私は言葉にはそういう力があると思う。

「言の葉使い……」

私は新しい夢を手に入れた。

言葉を操る者になろう。それは小説でも、絵本でも、詩でも、単語でも、あらゆる言葉をあるべき場所に置ける人に。

時には間違える事もあるかもしれないけれど、自信を持って言葉を使える人になりたい。
「とりあえず……」
優さんの手紙に返事を書くべく私は便箋を手に取った。

「ねぇねぇ、死神さん」
窓の外、遠くなってしまった景色に問いかける。
「私、夢が出来たんだ。言の葉使いになるの！」
独り言のクセはまだまだ抜けないみたいだ。
ちょっと子供っぽいけど良いよね？こんな夢も。

「早く来ないかなー」
私はそわそわしながら本を読んだり、優さんのＣＤを聴きながら過ごしていた。
「ねぇねぇ、死神さん」
鼻歌交じりに窓の外の死神さんに問いかける。猫は耳が良いと言うけれど、私の声は届いているのだろうか。
届いていようと、いまいと、死神さんはいつもどおり日傘の下でのんびりお昼寝をしていた。
赤い首輪が映えて日陰に居るのに少し眩しい。
そうして感傷に浸っていると部屋をノックする音が聞こえた。
「美羽ちゃん？　入るわね？」
お母さんの声だ。
「はーい」
大きな声で扉の向こうに聞こえるように伝える。
お母さんは大きな紙袋を抱えてやってきた。
「うわ、重くない？　ごめんね。こんなにいっぱいなんて思わなくて……」

私は死神さんの首輪の後、残ったお金の使い方を色々決めた。
「ううん、良いのよ。後、お父さんも、プレゼント喜んでいたわよ」
お父さんにはネクタイを買ってあげた。
『ごめんね。お母さんには買い物ばかり頼んで』と言おうとして私は踏みとどまった。
こんな事言ったらまた泣かせちゃうかな……。
「それにしても、その荷物すごいねー」
言葉に詰まって話を逸らす。『言の葉使い』になるにはまだまだ修行が必要な様だ。あれから私は本以外に辞書も、眺める様になった。色々な言葉を知っていれば使うべき所で使うべき言葉を持っていなかったら意味が無いから。
「残ったお金で出来るだけって言っていたから。出来るだけ数が欲しいって事だったし、安いお店をいっぱい回ったの」
お母さんも忙しいはずなのに。私は申し訳ない気持ちからまた『ごめんね』って言いそうになる。でもそうじゃない、ちゃんと言葉を選ぼう。
「お母さん、ちょっとこっち来て」
私は招き猫の様においでおいでをしてお母さんを呼ぶ。
「ちょっと目瞑って」
お母さんは言われるとおりに目を閉じた。
「えい！」
お母さんのおでこにデコピンをする。
「いた！」
お母さんが声を上げて驚く。
「もう、私に気を使ってくれるのは嬉しいけど、お母さんが無茶しちゃダメでしょ？」
「む、無茶なんて……」
お母さんは突然の出来事に頭が追いついてないみたいだ。よし、これなら泣かせないでいける。
「お母さん」

一声かけて今度は頭を撫でる。
「今度は目の下のクマ治してきてね！　それと……本当にありがとう！」
満面の笑みで言う。
「クマ、そんなにすごい？」
お母さんが目の下を触りながら私に聞いてくる。
「すごいよ？　パンダみたい！」
「そ、そんなにー？」
そうやって二人で笑いあった。
しばらく、お母さんと話していると、またノックの音がする。
「美羽ちゃーん？　いるー？」
ガラッと返事も待たずに入ってくる。舞子さんだ。
「あら、こんにちは」
「こんにちは」
お母さんと舞子さんが挨拶を交わす。舞子さんの後ろにもう一人影が見えた。
「ほら！」
舞子さんがその子の背中を押す。
「美羽お姉ちゃん……大丈夫？」
慧ちゃんだった。心配していたって言っていたもんなぁ。
「うん、平気。こないだは驚かせちゃってごめんね」
そう言ってベッドの近くまで来てくれた慧ちゃんの頭を撫でる。
「はい、美羽ちゃん」
舞子さんが私に紙袋を渡してくれる。
「あ、ありがとう。舞子さん！」
お母さんはそのやりとりを不思議そうに見ていた。
「さて、ちょっと早いけど始めちゃおうかな」
私は枕の後ろに隠しておいた筒状の箱にリボンの付いたモノを取り出す。
「はい、これはお母さんへのプレゼント。カオルさんに頼んで買っ

て来て貰ったんだ」
お母さんへのプレゼントはネックレス。カオルさんはセンスが良いから、安くて良い物を簡単に見つけてきてくれた。
「そんなに高い物じゃないんだけどね。お母さんもたまにはお洒落してね！」
お母さんがお洒落出来ないのは私のせいなのだけれど、私にはそうやって言うしか無かった。
「それで……、舞子さんには……」
お母さんが抱えてきた紙袋の中を漁る。
「あった、これ！　マグカップ」
四葉のクローバーが小さくあしらわれたマグカップ。
二人はプレゼントを受け取り、お母さんは丁寧に、舞子さんは乱暴に、包みを開いた。
「まあ、綺麗」
「わ、可愛い」
お母さんがネックレスを首に当てて見せてくれる。
「良かった、似合っているよ！」
さすがカオルさんだった。安物なのに全然子供っぽく無く、それでいておばさん臭く無い。絶妙なバランスの物で、お母さんにぴったりだった。
「あ、後ね、慧ちゃんにもあるんだ」
はい、とお母さんが抱えてきた紙袋の中を見せる。中身は四葉のクローバーの小物で溢れていた。
「ここから好きなのを取って良いよ。慧ちゃんは一番先に選べてラッキーだね！」
私は小児科病棟の子供達にと、残ったお金を全部。四葉のクローバーの小物を買って来てもらったのだ。
「私これにするー」
慧ちゃんは四葉のクローバーが中に入っているキーホルダーを手にしていた。

「お姉ちゃん、ありがとう！」
にっこり笑った慧ちゃんはあの日傘と、黒猫と、向日葵の景色の様に少し眩しかった。
「後は、これ、小児科の子達に舞子さんが配ってあげて」
大きな紙袋を舞子さんに渡す。
「こんなに沢山……良いの？」
「沢山無いとみんなにあげられないでしょ？」
そう言って笑う私を慧ちゃんは伏し目がちに見上げていた。
「どうしたの？　慧ちゃん」
「わ、私もう退院しちゃったから、これ貰えないよ」
正直で真っ直ぐな子なんだな。そう思うと胸がズキリと痛んだ。約束守ってあげないと。
「ねぇ、慧ちゃん。じゃあそれは私からの退院祝いって事でどうかな？　後ね、そろそろ来るはずなんだけど……」
時計に目をやる。そろそろ約束の時間のはずだ。
私は慧ちゃんに向き直って真っ直ぐ目を見た。
「もうちょっとだけ待ってね。玲先生とカオルさんが来てくれるはずだから、そしたらまたあの紙芝居読んであげるから」
慧ちゃんが来る事は知らなかった。今日は玲先生に読んであげるつもりだったのだ。でも、なんとか約束守れそうで良かった。
「それにしても退院したのに良く来てくれたね？」
慧ちゃんはそんなに私の紙芝居を楽しみにしてくれていたのだろうか？　この真直ぐな少女が私は羨ましかった。
「あのね、舞お姉ちゃんがね、約束はお互いが守ろうと努力するものだって教えてくれたの。例え守れなくても守ろうとがんばる事が約束なんだって」
ああ、またこの人なのか……。舞子さんは私の理想だ。理想の『言の葉使い』だ。時々訳のわからない事も言うけれど、本当に、何と言うかタイミングが上手なのだ。あるべき場所にあるべき言葉を……。私も早く使いこなしたいな。

「そっか、次はお姉ちゃんが頑張る番だね」
そんな話をしているとカオルさんが玲先生を連れて入ってきた。
「ごめんなさい。川崎先生お休みなのに、患者さん達に囲まれちゃって」
カオルさんが慌てて弁護する。
「大丈夫。今日は何か体調良いし、あ、カオルさんお仕事中で大変かもしれないけど、これ……」
舞子さんから受け取った紙袋を渡す。お洒落なカオルさんは服飾物をいっぱい持っているだろうと香水を買ってあげた。
「それから、玲先生にも」
玲先生にはヘアピンだ。髪の長い玲先生には良いかなと、こちらもカオルさんに頼んでおいた。
「へ？　私も！？」
玲先生は予想もしていなかったのか、すごく驚いている。
「もちろんですよ！名前で呼び合う仲じゃないですか」
悪戯っぽい笑みを浮かべてそんな事を言う。
「みはっ……あ……えと……その……ありがとう」
玲先生は周りを見渡して、顔を真っ赤にする。やっぱりこれはクセになる。
「じゃ、私はお仕事あるから。美羽ちゃん！　これ、ありがとね！」
カオルさんはパタパタと出て行ってしまった。
「じゃあそろそろ始めますね」
ベッドの上で紙芝居を整える。今日は不思議と緊張は無かった。
「これは不思議な世界で迷子になった女の子のお話。それはそう、不思議の国のアリスの様に……」
私はもう一度。一言、一言を噛みしめる様に言葉にしていった。
慧ちゃんも、玲先生も、舞子さんも、お母さんも、静かに私の言葉を聞いてくれている。
これを読んでいる間は不思議と色々な事を忘れていられる。自分が病気な事。お父さんとお母さんが一所懸命働いて苦労している事。

もう、私の時間が余り残されていない事……。

「おしまい」

パチパチパチ……あの大舞台とは違う小さな拍手。だけどとても心地よい。玲先生とお母さんは少し涙で瞳が潤んでいた。慧ちゃんはまるで世紀の大発見をしたかのような驚きと喜びの入り混じった表情で私を見ている。舞子さんは涼しい顔で拍手してくれている。

「噂には聞いていたけれど、素敵なお話ね」

玲先生が褒めてくれる。

「ありがとうございます」

私は紙芝居を整え直す。そして慧ちゃんを見た。

「ねぇ、慧ちゃん？」

そっと囁く様に声にする。ある決意が揺らがぬ様に。

「この物語好き？」

慧ちゃんの目、綺麗だなぁ。

「うん、大好き！」

そう言って何度もうなずいてくれる。

「じゃあさ、これ、あげるよ」

束ねた紙芝居を慧ちゃんに差し出す。

「え！？　ダメだよ！　これはお姉ちゃんの……」

慧ちゃんは差し出された紙芝居を受け取ろうとはしなかった。

「いいの、私はまた描けばいいのだから。」

ミウの言葉。『私は、名前を、苗字を、希望を、諦めない心を手に入れたから。それがまた欲しくなったら自分で探しに行くわ』私はこれを持っているから……。これで良い。これで……。

「慧ちゃん。良かったらこれ、私の変わりに色々な人に読んで聞かせてあげて欲しいな。いや、色々な人じゃなくても、慧ちゃんが大人になってお母さんになった時でも、子供に聞かせてあげて。」

さらに慧ちゃんの手元に紙芝居を近づける。

「あ、あの……」
慧ちゃんは畏まってしまっていた。
「ほら……」
その背中をそっと舞子さんが押した。玲先生は優しい眼差しで見ている。
「良かったら、もらってあげて」
お母さんが一声かけてあげてくれる。
「うん！　ありがとう！　私ね、お姉ちゃんみたいな物語書けるようになるのが夢なの！　だから……すごく嬉しい！　これ宝物にするね！」
慧ちゃんの顔には向日葵の様な笑顔が広がった。それは星が生まれる時の輝きの様で、やっぱり私には少し眩しい。だけど眩しい位が丁度良いのだ。
「ね、死神さん」
私は窓の外の死神さんに向かって呟く。きっとあそこにはもう戻れない。でもこれは諦めじゃない。前へ向かって歩き出したと、そう信じたい。
「ねぇ、慧ちゃん。私の夢何だと思う？」
夢を語ってくれた慧ちゃんには私の夢を打ち明けよう。
「んー……絵本作家とか？」
慧ちゃんは少し悩んでそう答えた。
「近いけど、はずれ」
私は慧ちゃんの頭を撫でる。
「んー、じゃあ小説家？」
慧ちゃんはまた悩んで新しい答えを出す。
「それも……近いかな。でも違うの」
私の答えはきっとこの場に居る誰にも理解されないだろう。でも恥ずべき事では無い。これは私の誇れる夢だ。
「私はね、言の葉使いになるの！」

九月　美羽の繋いだ物語　白詰草

「私はね、言の葉使いになるの！」

私はその言葉の意味を考えていた。あの時、美羽お姉ちゃんが告げた夢。それがなんだったのかを……。

「はぁ……わかんないや」

美羽お姉ちゃんがくれた紙芝居をそっと撫でる。あれから十二年。私は作家を目指し、色々な文学賞に応募したり、会社を訪ねたりしたが、結局夢は叶わず。それでも諦めきれなくて編集社で働きながら密かに作家活動をしていた。今ではインターネットや携帯小説など昔とは比べ物にならないくらい世界は物語で溢れかえっていた。

「よし、がんばろう。」

私はデスクトップ型のパソコンの画面に向かいキーボードを叩いた。

しばらくすると携帯電話の無機質なコール音がする。

今は着うたとか、そういったものも着信音に設定出来るけれど、それは私用の携帯だけだ。

「はいはい、今出ますよー。」

私は近くの鞄の中を漁り、仕事用の携帯電話を取り出す。

折りたたみ式の携帯電話を開き、表示されている名前にゲンナリする。

「また、あいつか……」

傘丘（カサオカ）　日向（ヒナタ）これは本名では無くペンネームだ。私が担当している作家で、私より二つ年下なのに、我が社の文学賞に受賞し。その受賞作が大ヒットして、今や日本で知らない人が居ないほどの大物作家になった。だが欠点がある。性格が破滅的に悪い。我が侭、理不尽、不条理、まだまだ悪く言えば何とでも言えそうだがキリが無さそうなので止めておく。

早く通話ボタンを押さないと。一息吐いて通話状態にする。

「も……」
「遅い」
抑揚の無い声で『もしもし』を遮られた。
「はいはい、すみません。ご主人様」
「ご主人様って言うなって、いつも言っているだろう」
だったら少しはこっちの言う事も聞いて欲しいもんだ。私は最初、日向先生と呼んだのだが、『先生などと呼ぶな！』と怒鳴られたのでご主人様と呼ぶことにした。もちろん嫌味だ。
「はいはい、それでなんでしょうご主人様」
「ったく。ちょっと甘い物を買ってきてくれないか」
……私はお使い係じゃないんですけど……
「テキトウなので良いですか？」
「ああ、それとペットボトルの紅茶を何本か頼む」
この横柄な態度が本当に苛立つ。現に、何人もの担当が辞めさせられたり、自分から辞めたりしていて、気付いたら新人の私にお鉢が回って来たのだ。
「わかりました。一時間程で行けると思います」
「三十分で来い！」
プーップーッ……怒鳴り声の後、すぐに電子音に変わった。
「はぁ……」
溜息を吐いて私は軽く身支度を済ませる。Tシャツを脱ぎ捨て、鏡に映るお腹の傷跡にあの日を思い出す。

小学六年生の夏。私は手術を受ける事になったのだが、大泣きしたあげく、暴れて手術を拒否していた。そんな日々が二日程続いた所で感じの良い気さくな看護師さんに声をかけられた。
「今日さ、ちょっとイベントあるんだけど見てみない？」
私はそんな事より病院から逃げ出したいと思っていた。純粋に手術が恐かったから。
「まぁまぁ、そんな事言わずに見てみようよ。手術とか何とかはそ

の後決めれば良いからさ。」
そんな風に言いくるめられ半ば強制的にイベントに連れて行かれた。
テレビでちょっと話題になった事ある芸人がお笑いコントをしていたが、私は全然笑えなかった。次はパントマイムで、これもすごかったけれど私はやはり手術の事ばかり気になって逃げ出したい気持ちでいっぱいだった。
その次は優と言う歌手の番だったが知っているのはすごく売れたバラード一曲だけなのでやはりすぐに退屈になってしまった。
そして衝撃の瞬間が訪れる。
「さあみんな最後の素敵が入ってくるよ！　拍手で迎えよう！」
私をこのイベントに誘った看護師さんの声がそんな事を伝えるが、私は拍手すらしなかった。
拍手に押されるように黒い少女が舞台の上を歩いてきた。
私はその少女に圧倒された。黒い豪奢なドレスに身を包み。細く儚い体に白い肌が印象的で、とにかく綺麗だった。私と大して年の差も無い様な少女の声が響く。
「これは不思議な世界で迷子になった女の子のお話。それはそう、不思議の国のアリスの様に……」
少女の高い声が耳に心地よかった。ドレスや見た目と違い可愛らしい声だった。
私は不思議の国のアリスが好きだった。だからこの物語にも惹き込まれたのだろう。気付いた時には、舞台の上の少女に釘付けだった。
物語はチェシャ猫に導かれるアリスの様に、少女が黒猫に導かれる話しだった。私は黒猫には不吉なイメージしか持っていなかったので、この少女にどんな不幸が訪れるのかとハラハラしながら見ていた。
しかし、少女は名前を、苗字を、希望を手に入れていった。少しずつ幸せになっていく少女が羨ましかった。そして反転した所で白

い少女に絶望を言い渡される。そのギャップに私はさらに惹き込まれる。手術をしなきゃと先生に言われた時の自分と重なって見えたからかもしれない。白い服に包まれ、黒い椅子に腰掛けた医者に言われた絶望。

真っ暗な闇に落とされる様な感覚もそうだった。お母さんも、お父さんも、お兄ちゃんも、看護師さんも、みんなが敵になった様な気さえしていた私。

お腹を引き裂かれると言う恐怖に、死んでしまった方が良いとさえ思っていた。

『ミウがんばれ！』心の中で自然と応援していた。今にして思えばなんと自分勝手だろう。私はがんばっていないくせに、他人には容易く、がんばれと言ってしまう。

だけどそれくらい惹き込まれていたのだ。そして最後に迷子のミウが手に入れた物は『諦めない心』だった。その言葉が私の胸に突き刺さる。

私はお腹を切って助けてくれると言ってくれた、先生に対してそれなら死んだ方が良いと諦めて居たのだ。あの人は絶望を告げた訳でも何でも無いのに。私はたまらなく恥ずかしい気持ちになった。

私とそんなに変わらない年の子があんな物語を語れるのに私は……。そう考えるだけで自分がどれだけ自分勝手な人間か思い知らされる。

そうして物語が終わり。舞台の少女の告白が始まる。

「少しだけ、もう少しだけ私の話を聞いてください！」

拍手に包まれていた会場が静寂に包まれる。自分の鼓動だけが取り残された様な感覚。私、なんでこんなにドキドキしているんだろう？

息を呑んで舞台の少女を見守る。

「私は、病気です。まだ治る見込みはありません。でも！　治る事を諦めていません。それをここの看護師さん。小鳥遊舞子さんに教わりました！」

私は手術すれば治るのに……。
「だからこのお話を考える事が出来ました。これは私が出会って来た人達との軌跡です。」
私はきっとこの子より沢山の人と出会っているのに……。
「あ、あの。でしゃばってすみませんでした。でも私はここに立てたことを誇りに思います。皆さん。ご静聴、本当にありがとうございました！」
最後に少し言葉に詰まって、照れたような声で小走りに舞台を後にする少女。それは自分とまったく変わり無い普通の女の子だった。その女の子は治らない病気の中、こんなに希望で溢れた物語を考えたのだ。その事実が私の心を罪悪感で埋めた。お腹を切るくらいなら死んだって良い。そんな事を軽く思ってしまった自分が、酷く醜いモノに思えた。
そして私は、会場からそそくさと『逃げ出した』
そこで私をこのイベントに誘った看護師さんに出会う。看護師さんは泣いていた。
「お姉さん」
泣いている看護師さんに声をかける。
肩がピクリと動き目をゴシゴシ擦る。
「あ、慧ちゃん。どうだった？さっきのイベント」
平静を装って看護師さんはそんな事を聞いてくる。
「なんか、すごかった」
私は伏し目がちに答えた。
「そ、良かった。慧ちゃんにも見てもらえて」
そう言って私の頭を撫でてくれる。
「あ、あの！」
私は大きな声を出した。自分でもなんでこんなに大きな声が出たのか、わからないくらい声が響いた。
「私、手術受けます！」
看護師さんは驚いた表情で私の目をじっと見つめていた。

「そっか、偉いね、慧ちゃんは」
あんなに我が侭を言った私にそんな風に言ってくれる。
「あの、最後の紙芝居が……その……何かすごくて……感動して……。でも自分が情けなくなって……。わかんないけど……。あのお姉ちゃんは治らない病気って聞いて……その……。私諦めていたんだって思って……。」
声が震えて自分でも何を口にしているかわからない。ただひたすらに言葉と涙が溢れてきた。
「治るのに自分は最低だって……。うう……」
私の告白を看護師さんはそっと聞いてくれていた。そして抱きしめてくれる。
「それに気付いただけで慧ちゃんは最低なんかじゃないよ！」
その言葉に私は救われた。
「あの、看護師さん……」
私から看護師さんの温もりが離れていく。
「顔すごいですよ？」
お化粧が崩れてすごい事になっていた。
「へ？　あ……やっちゃった。ちょっと顔洗ってから、やる事があるからまた後でね！」
パタパタと走って行きかけて看護師さんが振り向く。
「あ、私の名前、小鳥遊舞子！　今度から下の名前で呼んでね！」
そう言って舞お姉ちゃんは去って行った。

「お邪魔しまーす」
都心の高級マンションの三階『ご主人様』の部屋にコンビニの袋を抱えてズカズカと入っていく。
いちいちチャイムを鳴らされると面倒だからと合鍵を渡されている。もう一つの自分の家の様なものだった。
そこから仰々しいリビングとキッチンのある部屋で冷蔵庫に二リットルのペットボトルの紅茶を三本入れ、彼の居る部屋に行く。

一応ノックをする。
「入れ」
無愛想な一言が飛んでくる。
「失礼します」
沢山の本に囲まれてパソコンと向かい合っているボサボサ頭の青年。傘丘　日向だ。
「これ、適当に選んで下さい。食べないやつは冷蔵庫入れて置きますから」
私はビニール袋を逆さにして、コンビニでテキトウに見繕った甘い物を広げる。
「どれでもいい。開けてこっちによこせ」
こちらをまったく見ずに彼は喋る。
「はいはい、ご主人様。」
私はシュークリームと生クリームの盛られたプリンを、彼のデスクの上に置いた。
「おい、ごしゅじ……」
「あ、まだ全然進んでないじゃ無いですか！　いい加減次の原稿あげないと、編集部にも見限られますよ？」
『ご主人様と呼ぶな！』を遮り、進む気配の無い彼の次回作の進み具合を見る。見限られる何て事は多分無い。編集部だって久々の大ヒット作のおかげで彼には甘いのだ。
しかし彼は確実にスランプに陥っていた。
「うるさい」
その一言で片付けられた。
「もうちょっと愛想良く出来ないんですか？」
どうせ放って置いても彼の仕事がはかどる訳でもないので、私はしぶしぶこの男と無駄話をする。それが何かきっかけになれば良いと、私なりの精一杯なのだが……。
「小説書くのに愛想なんていらないだろ」
大して話が進んだ事は無かった。

「はいはい、じゃあその小説。早く書いて下さいね」
私は皮肉をたっぷり滲ませて、残った甘い物を冷蔵庫に入れに行く。
「はぁ、何やっているんだろう……私」
とりあえず近くのコップを二つばかり用意し、彼の好きなミルクティーを注ぐ。
物語を書くだけなら私の方が早いし沢山出来るのに……。そんな考えが頭をよぎる。
しかし彼の処女作にはまったく及ばない。私もあまりのヒット作なので担当になる前から読んでいたのだが、悔しいがすごく面白かった。まるで美羽お姉ちゃんの物語の様な優しさに溢れていた。
実際かなり似ていて最初はびっくりしたものだ。タイトルは『白詰草』とシンプルな物だが、中には『幸福のクローバーの天使』や『美羽』と言う名の少女が出て来ていた。
最初は盗作も疑ったが、お姉ちゃんの物語を聞いた人間は限られている。だから偶然はあるものなんだと私は疑うのを止めた。
それに、あんな暖かく優しい言葉で飾られた物語を書ける人間が悪い人なはず無いと、勝手に思い込んでいたのもある。正直この人の担当になれとお達しが来た時は本当に喜んだものだ。
「しかし、現実は非常なり」
私はそう呟いて紅茶の注がれたコップを二つ持って彼の元へ持っていく。
彼はシュークリームを半分程齧りプリンを全部平らげていた。
「そんなに甘い物ばかり食べていると体壊しますよ？」
いくら好きとは言え主食が甘味物と言うのは流石に行き過ぎだと思う。
「ふん、壊れても誰も悲しまないよ」
「編集部は泣くと思いますよ？」
「あいつらは『白詰草』が更に売れて喜ぶんじゃないか？」
「そうですかねー、そろそろ新しいのを書いてくれた方が喜ぶと思

うんですけど」
「ふん、俺はあれ以上の物なんて書けないよ」
彼は少し悲しそうに……。あくまで私の視点だが……。そんな風に言う。まあわからなくも無いけれど……。
「売れればなんだって正義なんですし、もうパパッと書いちゃえば良いじゃないですか。」
世界は想い入れの強い物に優しいとは限らない。それは私が身をもって知っている。いくつもの自信作が寡作にも残らず。埋もれて行った。
でも私は諦めない。美羽お姉ちゃんの物語に教えて貰った事だ。
「そんな物作っても、ネットで叩かれるだけだろう」
確かに最近はインターネットと言うすばらしい環境のおかげで自分の創作物への率直な意見を聞くことが出来る。しかしそれは同時に凶悪な凶器になる。言葉は使う者次第で色々な物になるのだ。
「『白詰草』も結構叩かれましたもんね。でもそれだけ多くの人が読んでくれたって事で良いじゃないですか」
多く売れれば、それだけ期待も高まり、ハードルを上げる。新人が単発で出した本は多くの評価を貰った。良いものも悪いものも。
「お前、もうちょっと優しく言えないのかよ」
それはお前の方だ！と言い返したいが我慢する。
「あら、優しくして欲しいんですか？もう十分献身的だと思いますけど」
実際かなり私は尽くしていると思う。現に彼の担当をやっている時間は私が一番長い。
「どうでもいいよ。俺はもうどうでも良いんだ」
彼は全てを諦めている様に見えた。
「『白詰草』で語った『諦めない事。』は嘘だったんですか？」
私は追い討ちをかける。諦める事だけは許せなかったから。
「はっ、あんなもん嘘っぱちだよ。昔聞いた話をパクって飾り付けただけだ。レシピ通りに作ってデコレートしただけなんだよ！」

彼は声を荒げてそんな事を言う。だが彼の怒りより私は別の事が気にかかった。
『昔聞いた話をパクって』
まさか、彼もあの話を聞いていたのか……。
「青埼小児病院」
私がその名を出すと彼はすごい勢いで、始めて私を視た。
彼の顔は青ざめていて完全に生気を失っていた。
「まさかお前！　迷子のミウを知っているのか！？」
彼の言葉が私の胸を射抜く。まさか本当に彼はこの物語を盗作していたのか……。そうだとしたら私はどうすれば良いのか……。
「知っています。迷子のミウも、九月美羽も、青崎小児病棟も、その隣の青埼サナトリウムも！」
ついつい私の声も荒くなってしまう。まさか……まさか……盗作なんて……。
その事ばかりが頭をグルグル回る。
「はは……ははははは！　傑作だ！　こんな形で俺に罰が下るなんて！」
彼は何を思ったのか笑い出した。いや、壊れてしまったのだろうか……。
「世間に公表するなりなんなりして俺を貶めれば良い！　俺はそれだけの罪を犯したんだ！　俺は……俺は……！　はははははは！」
彼の耳障りな笑い声が頭に響く。だんだんイライラしてきた。
「ふざけないで下さい！」
私は苛立つ笑い声を掻き消す様に叫んだ。
部屋が静まり返る。パソコンの無機質な音だけが聞こえてくる。
「あなたはそれで許されたいだけだ！そんな風に逃げるなんて私は許さない！」
私の声に彼は激昂し、私の胸ぐらを掴んで顔を近づける。私は目だけを逸らさずにいた。

「お前に何がわかる！？」
彼が顔の近くで叫ぶ。
「何にもわかりませんよ！　ただ……」
「ただ……美羽お姉ちゃんはそんなの望んでない！　自分の物語で誰かを不幸にするなんて彼女は望んでない！」
私は臆せず叫ぶ。彼の事はわからなくても。美羽お姉ちゃんの事ならわかる。彼女はきっと笑って許す。『私の物語をみんなに届けてくれてありがとう』って、『こんなに綺麗に飾ってくれてありがとう』って笑うに違いない。
「そんな事がなんでお前にわかる！？」
そう言って彼は私を突き飛ばす。私にはわかった。彼は怯えている。自分の傷が剥きだしにされるのを。やっと許されると思ったのに、さらに責められるのだと。
「わかりますよ。美羽お姉ちゃんは私にあの物語をくれたのだから。あの紙芝居を私に託したのだから！」
「なんだって……そんな訳あるか！　あの物語が残っているわけ無いんだ！　あっちゃいけないんだ！」
彼は混乱している。きっと彼は『白詰草』が売れる度に美羽お姉ちゃんの影に責められて来たのだろう……。
「大丈夫。大丈夫だから少し落ち着いて。そして私のうちへ行きましょう。全てはそこにありますから。」
気付けば私は彼を抱きしめていた。そこに居たのは大作家でも無く、有名人でも無く、傍若無人な我が侭人間でも無く、ただの男の子だった。
「あ、そこ左です。」
彼の車に乗って自分のうちへの道をナビゲートする。車の中の空気は硬く重い。
ただの男の子に戻った彼はずっと無口だった。
四十分程で私の家に着く。

「ちょっと散らかっていますけど……」
彼の家とはまったく違う。ボロくて狭い玄関に乱雑に靴が散らばり、狭い部屋に本が沢山積まれている。私は彼の部屋を掃除する事は多くても自分の部屋は結構テキトウだった。
「色気も何も無いな」
その言葉に怒り狂いそうになったが、いつもの調子を取り戻している事に少し安心した。
私はパソコンの置かれたデスクの引き出しの一番上を開け、そこからバインダーを取り出した。
私の一番大切な宝物。美羽お姉ちゃんが私にくれた、私の目標であり超えたいモノ。
辛い時、悲しい時、苦しい時、この紙芝居に何度も助けられてきた。その愛おしいモノを彼に見せる。
「……」
彼は言葉にならない様子で、それでも一枚、一枚丁寧にめくっていた。
「まさか、本当にあんたが持っているなんてな」
紙芝居に全て目を通し。バインダーを私の元へ戻す。
彼の目はまた『諦めて』いた。
「あなたって本当に自分勝手ですね」
私は彼を責めたてる。
美羽お姉ちゃんの言葉が頭の奥で再生される。
「私はね。言の葉使いになるの！」
私は聞いた事の無い言葉に顔をしかめた。
「言の葉使いってなあに？」
美羽お姉ちゃんの顔は少しやつれていたけれど、すごく綺麗でその夢を語った時の顔は今でも忘れられない。
「言の葉使いはね。あるべき場所であるべき言葉を使える人の事なんだよ」
そう言って美羽おねえちゃんは私の目を見据えていた。

「言葉はね、すごい物なんだよ。時には優しく、時には厳しく、時にはどうでも良くて、時にはかけがえの無い大事な物になる」
美羽お姉ちゃんの言葉に対する想いが形を為してゆく。
「例えばね、傷付いた人が傷を包帯でグルグル巻きにしていたとするでしょ？　その傷を消毒して治りを早くしたい時慧ちゃんはどうする？」
「包帯をほどいてあげる。」
私はそれしか思い浮かばなかったのでそう答えた。
「そう、解かないと傷は見えないの。でも包帯を取って傷を剥きだしにしたら痛いでしょ？そこに消毒液を付けたらもっと痛いよね？」
私は昔擦り傷を手当てしてもらった時を思い出して苦い顔をする。
「すっごく痛いよ」
「でもそれは大事な事。その傷を早く治す為に必要な事なの。だから時には傷を剥きだしにしてそこに、いたーい消毒薬を塗りつける様な言葉も使えるような人になりたいの」
「もっと色々な言葉を勉強して、必要な時に必要な言葉を使える人になって。沢山の人に言葉を使って少しずつ手助けするの。それが言の葉使い。私が考えたんだけどね。」
少し気恥ずかしそうに笑う美羽お姉ちゃん。
「美羽お姉ちゃんならきっとなれるよ！」
私は無責任にそう言った。
あの時の言葉の意味をずっと考えていた。私は今、彼の傷を目の前にしているんだ。
私が今やるべき事はきっとあの時美羽お姉ちゃんが教えてくれた事。
いたーい消毒液を塗りたくってやるんだ。
「貴方は自分勝手で、我が侭で、ずるくて、卑怯で、卑しくって、甘党で、最低な奴ですよ！」
私の言葉はたどたどしく、荒い。きっとすごく傷に沁みるだろう。
「な、なんなんだよ！　急に……大体、甘党は関係無いだろう！」

彼は戸惑っている。確かに甘党は関係無かったけど、そんな事はどうでもいい。
「だけど……あなたが美羽お姉ちゃんの言葉を飾った物語は、悔しいけど綺麗だった。」
そう、彼が飾った物はとても綺麗で、それはこの日本中に響いた。そして世界にも響こうとしている。
「そして、言の葉使いを目指した美羽お姉ちゃんはきっと喜んでいる。自分の言葉が綺麗に飾られてあるべき場所にちゃんと収められている事を……それが世界に響こうとしている事を！」
彼は呆然と私を見ていた。
言の葉使いと言う言葉の意味がわからないのかそれとも私の言葉に説得力が無いのか……。何かもう一押し出来る言葉が無いか思案していると。
彼の頬を一筋の涙が流れ落ちた。
「ごめんなさい。勝手にあなたの言葉を使って。勝手に飾り付けて……。ごめんなさい。本当にごめんなさい。」
彼は何度も謝って泣いた。彼のした事は確かにズルだけど美羽お姉ちゃんはきっと彼がこのまま苦しむ事を望まないと思う。
「許しますよ。美羽お姉ちゃんも、私も。」
だから、これで良いのだ。

四葉の加護がありますように。

彼はひとしきり泣いた後、一人になりたいと家に帰っていった。
私は彼の書いた『白詰草』を読み直す。
確かにお姉ちゃんの紙芝居と似ているけれど。それを一冊の小説にするほど広げ、飾り付けたのは彼の実力だ。私にはとても真似出来ない素敵な言葉の数々。それが人々を魅了し、沢山の人に届いたのだ。
「美羽お姉ちゃん。これで良かったんだよね？」
美羽お姉ちゃんの紙芝居に話しかける。そして私はある決意をした。
パソコンで青埼サナトリウムを調べる。
そこで私はさらなる衝撃を受ける事になった。青埼小児病棟もサナトリウムも今は閉鎖され四葉総合病院と言う大型の総合病院が出来ていた。
四葉と言う言葉に心が揺れる。ただの偶然なのか、それともこれも美羽お姉ちゃんの力なのか……。
四葉総合病院のサイトを開く。出来たての綺麗な病院で、かなり最新の設備を備えている様だった。
病院のマークとして四葉のクローバーが使われている。
鼓動が高鳴る。
挨拶の欄に院長が乗っていた。
『四葉総合病院　院長　川崎　玲』
「玲先生とカオルさんが来てくれるはずだから」
最後に美羽お姉ちゃんに紙芝居を読んでもらった日がフラッシュバックする。
あの日あそこに居た女の人。カオルさんと呼ばれた看護師さんに連れられて来たメガネの女性。
きっとあの人だ……。

私は川崎　玲について調べた。
当事まだあまり知られていなかった、病気について書いた論文が世界的に評価され、女性としては異例の年齢で大型の総合病院の院長として、この総合病院を築きあげたそうだ。
これは偶然じゃない。彼女が、九月　美羽が繋いだ物語なのだ。
後日、私は傘丘　日向の家に来ていた。良く考えればこのペンネームも美羽お姉ちゃんの影響なのだろうか。
とりあえず例の病院のホームページを見せる。
「ここがどうしたんだよ？」
彼はすっかりやつれ疲れ果てているようだった。彼の家はあの日からほとんど変わっていなかった。
「ここに！　ここに取材に行きましょう！　あなたの新しい小説のネタになるかもしれないですよ」
「嫌だ。俺はもう小説なんて書かない」
彼は完全に生気を失っていた。あれから二日経っているのに食事どころかこないだ買って行った紅茶すら飲んでいなかった。
「それはとりあえず四葉総合病院に行ってから決めるんじゃダメですか？」
私は『提案』している。
「もういいんだよ。もう疲れたんだ」
まだこの男はごねるのか。
「はいはい、ご主人様。我が侭も大概にしないと私でも怒りますよ」
いつもの様に皮肉たっぷりで彼を挑発する。
「……」
彼は無言のままだった。
「ああ、もうめんどくさい！　とにかくこれからご飯食べて、お風呂入って、髪切って、明日には四葉総合病院に行きますからね！」
私は『命令』に切り替えた。
とりあえず手料理を振舞ってあげる。彼は文句も、美味いも、言わず、ただ食べた。

そして風呂に強制的に入らせ。私のお気に入りの美容室に連れて行った。
「爽やか系でお願いします」
そう言い残して私は一足先に彼の家へ戻った。冷蔵庫にある、賞味期限の切れそうな甘い物達を食べる。
「うう、胸焼けする……」
違う意味で病院のお世話になりたくなった。
しばらくして彼は、無造作に伸ばしたボサボサ頭を、さっぱりさせて戻ってきた。
「おおー、見違えたじゃないですか。そっちの方がかっこいいですよ？」
私は率直な感想を述べる。
「美容室でも同じ事言われたよ」
まあ、誰が見てもそう言うでしょうよ。それぐらいさっきまでは酷かったのだ。
「はいはい、ご主人様はいつでもかっこいいですわよ」
私はふざけてそんな事を言う。
「もういい！　今日はもう寝ておく」
そう言って彼は顔を赤くしてベッドルームに消えて行った。
やっとまともな反応するようになって来た様だ。
私も早めに家路について、胃薬を飲んだ後。少し腹筋をしてから寝た。
なんでアイツはあんなに甘い物ばっかり取って太らないのだろう。私は世の中の理不尽を呪った。
翌日彼の車の中、私は隣で地図とにらめっこしていた。
「お金、いっぱいあるんだから、カーナビ位付けたらどうです？」
都心から高速に乗って……までは良かったのだが高速を降りてから中々目的地に付けずに居た。
「大して外出しないんだから必要ない」
車の中では陽気な音楽が流れていたが。空気は逆で重かった。

「あの、あなたは美羽お姉ちゃんを知っているんですか？」
言葉が続かなくて、確信に触れる。
「知っている。話したことは無いけどな」
抑揚の無い、いつもの調子とは少し違う、沈んだ重い声。彼はまだ吹っ切れていない様だ。
「じゃあ、あのイベント見に来ていたんですか？」
私が知っている限り不特定多数に美羽お姉ちゃんが紙芝居を読んだのは三回。
イベントで一回、小児病棟で二回、私は二回目の最後に顔を合わせ、美羽お姉ちゃんはそこで倒れたのだ。
「いや、俺が見たのは彼女が倒れた時だ。それであの人は死んだと思っていた」
「あの時の俺は周りを馬鹿にしていた。誰も信じていなかったし、何も響かなかった」
「だけど、噂になっている紙芝居がどれだけくだらない物なのか興味が出たんだ。周りのガキ共が浮かれはしゃいでいる物語がどれだけくだらない物なのか見てやろうと思った」
この人は子供の頃からこんなにひねくれていたのか……。
「だけどあの人の物語は違った。いや、あの人が読む物語だったからなのかもしれない。一つ一つの言葉の重みがどの本よりもどの言葉よりも響いた」
彼の告白。美羽お姉ちゃんはやっぱりすごかったんだ。
「俺は……あの話を忘れたくなかったんだ。だからその後必死に思い出しながら書き起こした。」
「だけど一回聞いたぐらいで覚えられるわけが無かった。だから俺は作り変えた。いつの間にか書くことが楽しくなって、気付いたら『白詰草』になっていた」
なるほど。それで少しずつ変わっていったのか。完全な悪意のある盗作じゃなかった事に少しホッとする。
「それなら、他の子や看護師さんに聞けば良かったんじゃないです

か？」
私なら、そうしていただろう。実際美羽お姉ちゃんの元まで行ったわけだし。
「言っただろう？　俺は誰も信じていなかった。誰とも馴れ合ったり、話したり、したくなかったんだよ」
何故だろう、彼がこんなに他人を嫌うのは……。何故こんなに悲しい事ばかり言えるのだろう？
「何故？　何故あなたはそんなに他人を嫌うのですか？」
心の中の疑問を吐き出す。私はこの彼を救いたい。美羽お姉ちゃんの為に。
「何故？　そんなの俺を見ていてわからないのか？　ご覧の通り最低だろ？　嘘は吐くし、ズルはするし、簡単に人を傷つける」
それは確かにそういう人もいるけれど……。
「あなたは最初から……最初からそうだったんですか？」
最初からこんなにひねくれている人間などいない。私はそう思っていた。生まれた時は誰だって幸せに満ちていると。
「ああ、最初からそうだよ。俺は生まれてすぐ親に捨てられたんだ！」
言葉が見つからなかった。
「俺は！　名前も、苗字も、希望も、何もかも持たず生まれてきたんだ！　そして生まれても与えて貰えなかった。だから迷子のミウに憧れた。俺も、名前や、苗字や、希望が欲しかったんだ！」
「だけど……だけど！　俺を導いてくれる黒猫なんて居なかった。でも、俺には一つだけ渡された物があった」
彼は車を一旦近くの路地に寄せて止めた。
自分の鞄の中から『白詰草』を取り出す。
その本の最後のページから一枚のしおりを取り出した。
「これだよ。あの人が目の前で倒れてから、二週間程した後くらいに、色々な四葉のクローバーの小物が配られた。これが唯一……唯一、俺の希望だった！」

「これは九月　美羽からのプレゼントだと言われた。でもそれは嘘だと思った。夢を見せる為の口実、大人達はずるいから、これで誤魔化そうとしたんだと、そう思った。」
　それは違う。美羽お姉ちゃんは確かにそれを自分のお金でプレゼントしたんだ。私はあの時の彼女に出会っている。
「それは、あなたの勘違いです。二週間後、九月　美羽さんは、美羽お姉ちゃんは生きていました」
　私は事実を告げる。
「私はその時にあの紙芝居を頂きました。そしてこのクローバーのキーホルダーも」
　そう言って私の鞄からお守りのキーホルダーを出す。もう色が剥がれてボロボロだ。
「私は、それが配られた時、既に退院していました。それが配られる前、美羽お姉ちゃんに会いに行ったんです。ある、約束を果たす為に」
　私はあの日の事を鮮明に覚えている。

　それは美羽お姉ちゃんに会いに行く前の日。私の退院の日だった。
「美羽お姉ちゃん大丈夫かな？」
　私は舞お姉ちゃんに聞いてみる。
「大丈夫よ。もう熱も下がったらしいし。あの日はちょっと体調悪くしちゃっただけみたいだから」
　私はその言葉を聞いて安堵する。しかし新しい欲望が生まれていた。
「じゃあ紙芝居読んでもらえるかな？」
　私は約束してもらったから気軽に読んでもらえるものだと思っていた。
「そ、それはちょっとまだ難しいかもしれないわね……」
　しかし舞お姉ちゃんの反応は良くなかった。
「えー、でも約束したのに……。私が退院しちゃったら、もう読ん

でもらえないよ」
　舞お姉ちゃんはしゃがんで私の目を見つめる。
「そんな事無いわよ。美羽ちゃんはね慧ちゃんとの約束を守ろうとして毎日ココに読みに来ていたのだと思うわ。だからね、今度はあなたが少しだけがんばってあげればいいのよ」
「私が、がんばる？」
「そ、あなたががんばるの。約束はね、お互いが守ろうと努力する事を言うのよ。例えそれが守れなかったとしても、お互い守ろうとがんばっていたなら慧ちゃんは相手を責めないでしょ？」
「うん！　でも私……どうしたら良いのかな？」
「簡単よ。あなたが美羽ちゃんの所へお見舞いに行けば良いのよ」
　舞お姉ちゃんはサナトリウムの方を見上げてそう言った。

「だからあなたが考えている事はただの勘違いです」
「大体それを希望にしていたなら、なんでそんなに卑屈な考えになるんですか」
　私はつい、言葉にトゲを含ませてしまう。
「そんな……俺は……あいつら大人を見返そうと……。これは……。これを見るたび俺は……。何度も死のうと思ったのを止めたんだ。あいつらを見返そうと。彼女の物語が消えないように。自分を戒める為に……これは……だから……希望だったんだよ」
　はぁ……そんな物は希望とは呼ばないと思うのだけど。心の中で溜息を吐く。
「もう、良いです。前も言った様に美羽お姉ちゃんはそんな事望んでいないと思います。私にはこれを伝える事しか出来ません。だからもっと美羽お姉ちゃんの事を知るために。行きましょう。四葉総合病院に」
　そうあそこにはきっと美羽お姉ちゃんに関わっていた人が居る。その人に美羽お姉ちゃんの事をちゃんと聞こう。それが彼の救いに

なるかもしれない。少なくとも私が知るあの病室は幸せや優しさで包まれていた。お互いが、お互いを思いやって、労わって、慈しんでいた。
そこに触れて居た人達なら彼を救えるかもしれない。私はそう考えた。
それから三十分程で四葉総合病院に着いた。そこは私達の、知っている。あの小児病棟とサナトリウムとはかけ離れた風景だった。
大きな総合病院の看板に、すごく広大な駐車スペース、広く取られた玄関に、沢山の人が診察を待つエントランスホール。ただただ大きく広い。
とりあえずロビーで川崎先生に会いたいと申し出る。
「ええと、面会のご予約はされていますか？」
少し困った様子でいぶかしげに私達を見る。
「いいえ、していませんけど」
私は素直に答える。
「申し訳ありません。川崎先生はお忙しいので事前に連絡を頂けないとご案内出来ないのですよ」
あっさり断られる。あぁ、こんな事なら電話くらいして来ればよかった。
後ろからの彼の視線が痛い。
「あの！　どうしてもダメですか？」
私は食い下がる。このまま帰るわけには行かない。色々な意味で……。
「申し訳ありませんが……」
あぁ、どう見ても困っている。目が忙しいのだから早くどっか行ってくれと訴えている……。
「すみません！　ちょっとだけ！　ちょっとだけで、良いですから！」
しかし、私も引く訳にはいかない。
「申し訳ありませんが、日を改めてください」

完全敗北だった……
「どうしたんですか？病院ではお静かにお願いしますよ」
不意に横から声が聞こえる。
明るめの髪に綺麗に整えられた眉毛、薄めのピンクの口紅が映える。お洒落な看護師さんが声をかけて来る。
「婦長！？　何だか川崎先生に用があるらしいんですけど、アポ取って無いらしくて……」
私達に事務的に話していた看護師さんが急にフランクな口調で婦長と呼ばれた看護師さんに告げる。
「あら、じゃあ代わりに私がお話を聞きましょうか？」
婦長さんがそう申し出る。
「あ、えと、川崎先生は……無理……ですよねー」
見た目はにこにこしているが、私を見据える目が笑っていなかった。仕方ないので彼女に名刺を差し出す。
「あらあら、編集社の方がアポも無しに取材なんて珍しいですね」
私の名刺を見て怪しまれる。
「あ、いえ、今日は私用でして……」
私は何だかおどおどしてしまう。自分の無計画さが恥ずかしい。
婦長さんは私と彼を順番に見た後。
「まあ、こんな所で立ち話もなんですから……」
と当たり障りの無い言葉で私達を応接室に案内してくれた。
「ささ、そこにどうぞ」
豪華な黒革のソファーに座るよう勧められる。
「失礼します」
私は緊張しながら、そこに座る。彼は無言のまま私に続いた。この失礼な態度がまた私をハラハラさせる。
「いま、お茶入れますね」
婦長さんは慣れているのかマイペースにそんな事を言う。
「あ、お構いなく。私達ちょっと川崎先生にお話を聞きたくて伺っただけなので。」

だけど婦長さんはテキパキとお茶とお茶請け菓子を用意してくれた。
「すみません。急に押しかけてしまって」
私は出来る限り印象を悪くしないよう努める。全部隣の無愛想な男が台無しにしていそうだが……。
「いえいえ、それだけお急ぎの用事なのでしょう？一応、私、川崎先生とは十年来の知り合いなので、簡単な質問ならお応え出来ると思いますが」
その言葉に胸が高鳴る。十年来なら美羽お姉ちゃんの事を知っているかもしれない。
「あの、私……と彼……昔ここに合った青埼小児病棟に居た事があるんです」
私は探りを入れながら話す。
「まあ、そうなんですか。私は青埼サナトリウムの頃から勤めているんですよ」
その言葉に心臓がまた一跳ねする。
「あの！　そこに入院していらした九月　美羽さんについてお伺いしたいんです。私、美羽さんから紙芝居を頂いていて……その……」
こんな事を話して美羽お姉ちゃんの事を知らなかったらどうしよう。そんな心配も杞憂に終わる。
「あら、やっぱりあなたが噂の慧ちゃんなのね。名刺を見た時は偶然かと思ったのだけれど。申し送れました。私、当時、九月　美羽ちゃんの担当をしていた田崎　カオルと申します」
私は驚きを隠せなかった。あの時一度だけしかも本当に短い時間出会ったあの人。
「玲先生とカオルさんが来てくれるはずだから」
あの時の声が蘇る。やはり美羽お姉ちゃんの物語は終わっていなかったんだ。
「あの！　私はあの時紙芝居を受け取った葉山（ハヤマ）　慧（ケイ）です。そして、こちらが『白詰草』の著者。傘丘　日向です」

軽く自己紹介をする。
彼の顔が少し強張る。
「なるほど、君が『白詰草』を書いたのね」
カオルさんは彼を値踏みする様に見定める。
「さて、何から話しましょうかね」
カオルさんは思案しながら私達を見比べている。
「まぁ、とりあえずお礼からかな。美羽ちゃんの物語を世に送り出してくれてありがとう。日向先生」
傘丘　日向は有り得ない物を見るような目でカオルさんを見ていた。
「すみ……すみませんでした！」
お礼を言うカオルさん、謝罪をする傘丘　日向、取り残される私。
「ふぅ、なんだかややこしい事情がありそうね」
私達を見比べカオルさんは溜息を吐く。
「私、まだ仕事があるから、八時にココで待っていてくれる？」
携帯を取り出し近くのメモ帳にお店の名前と電話番号を教えてくれる。
「あ、四名で予約しておいてね」
そう言って
「それじゃあまた後で」
と私達をエントランスまで送り、去って行った。
さて、どうしたものか……。
とりあえずカオルさんは私達に時間をくれたのだろう。私達と言うよりは隣で真っ青な顔をしている彼の為に。
「とりあえず、お店予約してきますから。そこに座って待っていてくださいね」
私はエントランスにずらりと並ぶソファーの一角を指差してそこに彼を座らせる。
「勝手に居なくならないで下さいよ？こんな広い病院を探し回るの、嫌ですからね」

私はそう告げて携帯を使うため外に出る。
カオルさんに渡された番号を打ち込む。
「もしもし」
品の良さそうな男の人の渋い声が聞こえた。
「もしもし、ええと、今夜八時に予約したいんですけど」
「八時ですか、はい、大丈夫ですよ。何名様ですか？」
「四名です」
「お名前をお伺いしてもよろしいですか？」
「葉山　慧です」
「ハヤマ　ケイ様ですね。わかりました。お待ちしております」
「あ、後、場所をお尋ねしたいのですが……」
そうして詳しい道順を聞いた。
「はい、わかりました。お忙しい中ありがとうございます」
「いえいえ、では八時にお待ちしております。あなたに四葉の加護がありますように」
「へ、あ……待ってください」
私は慌てて電話の向こうの相手を引き止める。
「なんで？　なんで四葉なんですか？」
「昔、聞いた素敵なお話に出てきたんですよ」
渋い声の男性はそうやって教えてくれた。
「あ、ありがとうございます。ではまた後で」
「いえいえ、ではお待ちしております」
そのやりとりの後、私は携帯の電源ボタンを押す。
今の人も美羽お姉ちゃんの関係者なのだろうか？　それとも『白詰草』を読んだ人なのか？　謎は深まってゆくばかりだった。
私は自動販売機でストレートティーとミルクティーを買って彼の元へ戻る。
彼は私の指定した場所で頭を抱えて待っていた。
そんな露骨にへこまなくても……。
そこにパジャマ姿の少女が駆け寄る。

まずい、あんな男に子供を近づけちゃいけない。
そう思って駆け寄ろうとしたが間に合わなかった。少女は彼に声をかける。
「お兄ちゃん頭痛いの？」
彼は気だるそうに頭を上げる。私はそれを見ている事しか出来なかった。
「ううん、大丈夫だよ」
笑った。彼がそう言って優しく笑ったのだ。
「でも、お兄ちゃん苦しそう」
少女は心配そうに彼を見る。座っている彼と丁度同じくらいの目線で真っ直ぐに彼を……彼の瞳の奥にあるものを。
「これ、あげる」
少女は文庫の『白詰草』を彼に渡す。
「あなたに四葉の加護がありますように」
あのレストランのおじさんと同じ言葉だ。彼は驚きの表情で少女を見る。
「お兄ちゃんそれ持っているんだ」
申し訳無さそうに彼は言う。
少女は一瞬戸惑うが彼の手に本を渡す。
「お兄ちゃんこの町は初めて？」
少女は急にそんな事を聞く。
「初めてだよ」
彼は簡潔に答えた。
「この町ではね『四葉の加護がありますように』って言われたらこの本を受け取らないといけないんだよ」
「そしてこの本をじっくり読んで、自分だけの四葉の幸せを見つけるの」
彼は今どんな気持ちでいるのだろうか……。私には計りかねた。
「それでね……」
少女は続ける。

「それでね、その本がそうやって渡されていくと家に何冊も同じ本が来ちゃう人が出ちゃうでしょ？そしたらね、『幸せのお裾分け』として困っている人や苦しんでいる人にこの本をあげるの！」
「だからお兄ちゃんはこれを受け取らないとダメなんだよ！」
そう言って少女は彼の頭を撫でた。
「そっか、ありがとう。」
彼は素直にそれを受け止める。
「ちょっと待ってね。」
彼は自分の鞄を広げ中から自分の『白詰草』を取り出す。
そこから、あのしおりを抜き取り少女に向き直る。
「はい、幸せのお裾分け。あなたに四葉の加護がありますように」
そう言ってそのしおりを手渡した彼は本物の傘丘　日向だった。
少女は一瞬困った顔をしたが笑って
「ありがとう」
と言って去って行った。
私はゆっくり彼に近付く。彼は愛おしそうに、少女から受け取った『白詰草』を撫でていた。
「良いんですか？　さっきのしおり。あげちゃって」
ミルクティーを差し出して聞いてみる。
彼は少し驚いたが、すぐに優しさと憂いの入り混じった複雑な表情で静かに、けれど高らかに、そして　ぶっきら棒に
「良いんだよ。あれで……」
と言って泣いた。

贖罪の邂逅

泣き止んだ彼を連れて、余った時間でこの町を回ることにした。
すると驚く事にそこら中で『白詰草』が売られていた。書店では平置きは当たり前で、レジ前にすら山の様に積まれている。
どこも『あなたに四葉の加護がありますように』と大々的に宣伝されていた。私は彼の担当になって半年経つが、こんな展開のされ方が行われているなんて聞いた事も無かった。
それどころか、コンビニや花屋さんにすら置いてあるようだった。
「何かすごいですね……」
私は音楽だけが流れる車の中で呟く。
「何が？」
彼はいつもの調子に戻っていた。
「『白詰草』がこんなに愛されているなんてすごいなぁって」
私は自分の本でも無いのになんだか楽しくなっていた。
でも彼は複雑な心境なのだろう。
「もう、素直に喜んだらどうですか？さっきの女の子に、笑ってあげた時の顔。素敵でしたよ？」
私は普段の鬱憤を晴らすように彼の弱点を責める。
「子供に……子供に罪は無いからな……」
彼は自分の言葉を確かめながら発していた。
『ああ、最初からそうだよ。俺は生まれてすぐ親に捨てられたんだ！』彼の言葉がリフレインする。
「そうですね。子供に罪は無いですよね」
私は彼の言葉を、彼を肯定する。彼は子供だったのだ。
もう、みんな彼を許している。私も、美羽お姉ちゃんも、カオルさんも、後は彼が、彼自身が自分を許せるかどうかだ。
後一押し、後一押し何かがあれば……私はそう考えていた。
でも、私達は既に導かれていたのだ、全てはあの夏からずっと。

「もうすぐ時間ですね」
七時五十分。私達はカオルさんに指定されたレストランの駐車場に居た。
入り口にはクローバーが沢山植えられていて、窓には黒猫が描かれていた。
「やっぱりこれだけ大々的だとプレッシャーですか？」
そわそわして車から出たがらない彼に聞く。
「そんな事無い。偶然だろ」
そんな事あるくせに。必然だってわかっているくせに。
心の中でぼやく。でも彼が子供なのだとわかった今、彼の事が少し可愛いと感じている自分もいた。
「もう、しょうがないですね。さ、行きますよ！」
私はシートベルトをはずし、さっさと車を降りた。彼もしぶしぶ付いて来る。
美羽お姉ちゃんの言葉は、私達を不幸にする物じゃない。そう信じられたから、彼もすぐに幸せになれる。私はそう確信していた。
「いらっしゃいませ！」
気持ちの良い挨拶で出迎えられる。そして予約した名を告げると、いくつもの個室の一室に通される。
どうやら個室レストランの様で、通された部屋は四人には少し広い部屋だった。
「先にお飲み物はいかがですか？」
こういうレストランにお決まりの文句、でも私達はお酒を飲まない。
「あ、じゃあウーロン茶と……アイスティーあります？」
私は彼には何も聞かず、勝手に注文を始めた。
「はい、ありますよ。レモンティーと、ミルクティーと、ストレートティーの三種類用意出来ますがどれになさいます？」
「ミルクティーで」
彼はほとんどミルクティーしか飲まない。でも私はその理由も知

らない。よく考えると彼の事はほとんど知らないのだ。生い立ちも、好きな事も、彼の想いも……。
「では、すぐにお持ちしますね。注文などお決まりになりましたらそちらのボタンでお呼び下さい」
店員さんはそう言ってメニューを置いて出て行った。
「そういえば、こうやって食事に来るの、始めてですね」
私は彼の食事を買って行ったり、作ってあげた事はあるが。こうやって外に食事に来た事は無かった。
「そうだな」
彼は面倒くさそうに答える。
「ちょっとは会話しましょうよ」
私は歩み寄ろうとする。彼の担当になった当初もそうしたはずなのに、いつの間にか私はそれを諦めていた。彼の孤独に気付く事無く。ただの面倒で我が侭な作家さんだと思い込んでいた。
「何を話せば良い？」
彼はそんな風に聞いてくる。前もそうだった。
「何でも良いんですよ。何か話したい事とか、くだらない事とか、何か無いんですか？」
私は改めて彼の少ない言葉を引き出そうとする。
「特に無い」
完全な拒絶。だけど今回は諦めない。
「じゃあ、私が質問するので、何でも良いから答えを下さい」
「……」
無言。でも諦めない。続けよう。彼だって本当は抜け出したいはずなんだから。
「日向さんはデザート以外で好きな食べ物とか無いんですか？」
始めて彼の名前を呼ぶ。ご主人様でも、日向先生でもない。近いけど遠い。『日向さん』
「別に無い」
うう、もう挫けそうだ……。正直この完全に相手を拒絶する態度

はいつも腹が立つ。でも、今日は我慢だ。
「あ、じゃあ好きな本はなんです？」
これなら絶対に何かあるはず。なんせ彼の部屋は本でいっぱいなのだから。
「本……か……」
彼は少し思案した後、静かに応える。
「『銀河鉄道の夜』や『指輪物語』あと……」
彼はもう一つ言おうとして言葉に詰まった。
「あと……、なんですか？」
「『不思議の国のアリス』」
おおよそ彼には似合わない名前が聞こえた気がする。
「……」
沈黙。それをノックの音が破る。
「失礼しまーす。ウーロン茶とアイスティーお持ちしました」
二人の微妙な空気を底抜けに明るい声が突き抜けた。
「どうぞごゆっくり」
店員さんは会話の無い二人を怪訝に思ったのか、しぼむようにして、そそくさと部屋を出て行った。
「なんだよ。笑いたければ笑えよ」
彼が急にそんな事を言う。
「何か可笑しなところありました？」
私は笑ったら失礼だと思って必死に堪える。
「顔にやけているぞ」
「へ？」
必死に堪えているのを指摘され間抜けな声をあげてしまう。
「やっぱり変だろ？　俺が『不思議の国のアリス』なんて……」
彼の声は少し沈んでいった。
「へ、変と言うか、男の人だと珍しいですよね。あ、でも『銀河鉄道の夜』も、『指輪物語』も、『不思議の国のアリス』も、全部ファンタジーですよね。そう考えるとおかしく無いのかも。たぶん…

…」
なんとか自分に言い聞かせる。どれも有名だし、私も読んだ事あるし、嫌いでは無い。ただ、彼にしてはやっぱり意外だった。
「好き……と言うより、憧れだったのかもしれない。俺は今いる世界とは別のどこかへ行ってしまいたかったんだ……。そして『不思議の国のアリス』は最初に俺を別の世界に連れて行ってくれたタイトルだから……。」
それは彼の告白だった。
「ほら、その……美羽さんが……紙芝居読む前に言っていただろ？『それはそう、不思議の国のアリスの様に』って」
「そっか、そうでしたね。美羽お姉ちゃんが、きっかけなんですね。大丈夫です。もう笑ったりしません」
「やっぱり可笑しいと思っていたんだな」
彼は不機嫌そうにアイスティーにガムシロップを垂らしながら言う。
「う……まぁ、あんまり男の人の口から『不思議の国のアリス』なんて聞かないですから……。でも好きな物をちゃんと好きって言える事って大事ですよね」
そう、それは人によってはすごく勇気の必要な事。他人とは違うんだと思ってしまった時ほど恐いものは無い。
「私は、こってこての、ラブストーリーとか好きですかね。それはもうとろける様にあまーいやつです」
彼のアイスティーを混ぜる手が止まった。じっと私の顔を見ている。
「似合わねぇ……」
な……さっき笑うのを必死に堪えた私はなんだったのだろうかと思う程の容赦の無い言葉。だけど私にとっては、衝撃の走る言葉だった。
彼が他人を評価している。私の事を見て「似合わない」と言ったのだ。

今までの虚ろでどこか投げ遣りな会話とは違う。
「もう、そう思うなら笑ったって良いんですよ？」
彼の心を探るように会話をする。一個でも間違えたら彼はまたへそを曲げてしまうかもしれない。そう思うと胸が自然とドキドキする。
「笑わないよ。お前だって我慢しただろ？」
毒が含まれているけれど、どこか優しさを感じる言葉だった。
そうしてしばらく好きな本の話をして過ごしていると。外から賑やかな声が聞こえて来た。
女性二人の声とさっき電話で応対してくれた、渋い男の人の声だった。
「お酒はダメですよ？」
「えー、良いじゃない！　せっかくだから美味しいワインとかさぁ……」
一人はカオルさんの声だ。でもさっきと違ってずいぶんフランクな様な気がする。
「ダメです。真面目な話なのでしょう？」
もう一人の女の人がカオルさんをなだめている。
「うー、じゃあマスター、アイスコーヒー二つ。それと話の折が付いたら呼ぶから、ちゃんと覚悟しておくように」
「わかりました。では、ごゆっくり」
渋い声の人はこの店のオーナーの様だ。でも話の折が付いたら呼ぶとはどう言う事なのだろう？　しかし、賑やかなカオルさんに疑問は消し去られてしまう。
「やー、おまたせー！　玲ってば中々出てこないんだもの」
「な、私は仕事で忙しかったんです！」
玲と呼ばれた女性の顔は見覚えがあった。ネットで見た四葉総合病院の院長先生。そしてあの時、最後に紙芝居を読んでもらった日に一緒にあの場に居た人。
「あはは、とりあえず遅くなってごめんなさいね」

カオルさんが穏やかな笑顔で謝る。
「とりあえず改めて自己紹介でもしましょうか」
上着を近くのハンガーにかけながらカオルさんはサクサクと仕切り始める。
「とりあえず、私は田崎　カオル。当事美羽ちゃんを担当させてもらっていた看護師です。今は四葉総合病院で婦長をやっています。趣味はウインドウショッピングかなぁ、やっぱ仕事のストレスは買い物で発散するしか無いのよね」
あはは、と簡潔に自己紹介を済ませるカオルさん。
「はい次、玲」
マイクを向ける様な仕草で四葉総合病院の院長さんにバトンを渡す。
その手を川崎先生は手で軽く払った。
「私は川崎　玲。四葉総合病院の院長を勤めさせてもらっています。昼間は忙しく、はるばる会いに来て頂いたのに、お取次ぎ出来ず申し訳ありませんでした」
川崎先生はすごく丁寧に私達に謝罪をする。
「玲ってば堅いよ……。その自己紹介」
やれやれと、次は私にどうぞとカオルさんが手をだす。
「えと、カエデ社の編集部で傘丘　日向さんの担当をさせて頂いている。葉山　慧です。当事、美羽さんから紙芝居を頂いた者です。夢は作家だったのですが御覧の通り芽が出ず、こうして仕事をしながら地道に文学賞に応募したりしています」
こうやって改めて自己紹介するのはなんとなく気恥ずかしい。夢を口にするのはもっと恥ずかしい。でも、諦めていると思われたくなくてつい、言ってしまった。
「あの時の子かぁ……。何か時間を感じるわね……」
カオルさんは感慨に耽っていた。
「さ、最後ですよ。日向先生」
カオルさんが日向さんに話を振る。『日向先生』と呼んだ事に内

心ひやひやしながら日向さんの言葉を待つ。
「傘丘　日向です。俺は……いや、僕は『白詰草』を書きました。でも、これは美羽さんのお話を流用したものです。完全な盗作です。本当にすみませんでした！」
いきなり核心に入る日向さん。二人は彼の告白に面食らってしまっていた。
そこにまたノックが響く。
「失礼しまーす！　アイスコーヒー二つお持ちしました」
元気の良い声が音の無い静かな部屋に突き抜ける。本日二度目だ。
「あ、ありがと」
カオルさんが、なんとか声を絞り出した。
「失礼しました。また御用があればそちらのボタンでお呼びください」
そう言って店員さんが出て行くと、また部屋に静寂が訪れた。
「ぷ……あはははは」
カオルさんが声をあげて笑う。
「あは……あはははは」
私もつられて笑ってしまう。きっと彼にとって一世一代の告白だったのに。
川崎先生も声には出さないがクスクスと笑っていた。
「ごめんなさい。あまりにタイミングが良過ぎたからつい……ククククク」
必死に笑いを堪えようとしているがカオルさんはまだ笑っていた。
「ま、とりあえず。美羽ちゃんはそんなの気にしていないわよ。きっと……。むしろあなたにお礼を言うと思うわ。」
「そして私達もね。改めて素敵な物語をありがとうございます。日向先生」
そうして急に日向さんに向き直りお礼を告げるカオルさん。
「そんな……俺はお礼を言われるような事なんて……。俺は……ただ美羽さんの物語を飾りつけただけで……。素敵な物語でも何でも

無いんです」
　日向さんは喋る毎に生気を奪われていくようだった。
「あら、美羽ちゃんはそれを知ってもあなたにお礼を言うと思うわよ？」
　川崎先生が声をあげる。
「私は当時、医者にあるまじき行動に出ました。まだ十五の女の子に泣きながら死を宣告したんです。私には救う術がないと。泣きながら伝えたんです」
　川崎先生は淡々と言う。
「二週間から一ヵ月。彼女にはそう伝えました。その時泣いている私に彼女はなんて言ったと思います？」
　自分の死を告げられた人の感情。それは私には考えの及ばないモノだった。
「『ありがとう』彼女はごめんなさいと泣き喚く私に『ありがとう』と言って頭を撫でてくれたのよ」
　私にそんな事が出来るのだろうか？　自分の死を告げる者に一体なんて言葉をかけられるのだろうか。
「そして彼女は諦めなかった。だから私も懸命に書物を漁り、あらゆる研究施設に問い合わせ、何とかして彼女を助けたいと思った」
　川崎先生の告白は続く。
「私は彼女を助けたかった。守りたくて仕方が無かった。どんな手を使ってでも、悪魔に身を捧げたって良い。そこまで私は美羽ちゃんに入れ込んでいた。だけど私には力が無かった。そうして絶望して、でも美羽ちゃんの真っ直ぐさが私を駆り立てて、気付くと三日三晩寝ずに。資料を漁っていたわ」
「この時点で医者失格よね。一人の患者の為に全てを投げ売っていたの。そしたら美羽ちゃん。マイペースに『紙芝居読んであげる』とか言い出してね」
「今考えると、彼女は私をなだめようとあの日、紙芝居を読んでくれたのかもしれないわね」

遠い日を思い出すように川崎先生は少し寂しそうな目をしていた。
「あの日の夜は何故だかぐっすり眠れたのよ」
ふふっと笑って川崎先生はアイスコーヒーに口を付ける。
「さて、次は私の番かしらね」
黙って聞いていたカオルさんが口を開く。
「何から話したら良いか、今日は気が気で無かったのだけれど……。そうね、君に会ったのも偶然じゃ無さそうだし、あれにしようかな。」
カオルさんは日向さんを見つめながら言う。日向さんは伏し目がちに無言で話を聞いていた。
「ねぇ、君達。『死神さん』は覚えている？」
死神さん……そういえばお姉ちゃんが紹介してくれた気がする。私が手術する前に美羽さんの前に連れて行ってもらった時に紹介してくれた黒猫だ。
「サナトリウムの方に居た黒猫ですよね？」
私はうろ覚えの記憶を辿る。
「そそ、あの紙芝居の黒猫のモデルになった子なのよ」
「そうだったんですか……俺は知らなかったです。黒猫が居たことも」
日向さんは余り美羽さんとはあまり関わっては居ない。小児病棟で美羽お姉ちゃんが倒れた日、その日だけと言っていたはずだ。
「そう……美羽ちゃんね、あの場所がすごく好きだったの。元気な時はいつもあそこに座って読書したり『死神さん』に話かけたりしていたわ」
あの日もそうだったっけ……。手術する前日。真っ白な日傘の下、穏やかにそこに在ったモノ。まるで一つの風景画みたいだった。
「そして最期の三週間。玲に軟禁されていたのだけれど、一度だけあそこに連れて行ってあげたの。もうその頃には美羽ちゃん、自分で歩く事も出来なかったわ」
ああ、やっぱり……美羽お姉ちゃんは亡くなっているんだ……。

今までどこか認めたく無かった。だけどやっぱり……。
「軟禁とは失礼ね。少しでも長く生きて欲しかったのよ。一日でも、一時間でも、一分でも……長く生きればもしかしたら美羽ちゃんを治す術も見つかるかも知れないと思ったから」
「そんな奇跡は起こらない。玲が一番良く知っているはずなのにね」
「それでも認めたく無かった。私はそれほど美羽ちゃんに魅入られていたのかもしれないわね」
ふふっと二人は笑う。
二人の言葉はすごく非情な物に思えた。なんでこの人達は一人の人間の死をこんなに嬉々と話しているのだろう。
「それでね……美羽ちゃん。いつもの様にあの白いベンチに腰掛けて、日傘を差してね。『ねぇねぇ、死神さん』って声を掛けるの」
「本当にいつも通り、自分が死ぬってわかってしまった後でも……本当にいつも通り話しかけていたの」
カオルさんの表情は穏やかで優しい顔だった。私は少しずつ心が曇っていく。
「『私、幸せだったよね？あのお父さんとお母さんの間に生まれて……』」
一瞬カオルさんが何を言っているのか、わからなかった。
「『私、幸せだったよね？こんなに優しさで溢れた人達に囲まれて……』」
言葉がズシリ、ズシリ、と音を立てて私に圧し掛かってくる。
「『私、幸せだったよね？こんなに温かい場所に来れて……』」
この言葉を側で聞いていたカオルさんは一体どんな顔をしていたのだろう？
「『ねぇねぇ、死神さん』」
カオルさんは躊躇いもせず、戸惑いもせず、言葉を失くす事も無く、続ける。
「『私、幸せだよ！』」
カオルさんは最高の笑顔で美羽お姉ちゃんを再現してみせる。そ

の頬には涙が伝っているのに。
川崎先生も涙を流していた。そして私も……。
私は自分が情けなくなった。この人達を非情だと思った自分が……。美羽お姉ちゃんを勝手に理想化していた自分が……。あの紙芝居を貰った自分が……。
「美羽ちゃんはすごかったわよ。正直、私達の常識とか、一般論とか、全部覆しちゃうくらいすごかった」
十六歳の自分を思い出す。後一ヶ月で死ぬと言われて幸せと言えるだろうか？　いや、今だってそんな風に言える自信が無い。美羽お姉ちゃんは一体どんな想いで居たのだろう？
「でもね、やっぱり美羽ちゃんも私達と同じだった。必死に私達が悲しまないようにしようとがんばっていたみたい。情けないわよね。看護師と医者が患者さんに気を使わせるなんて」
涙をハンカチで丁寧に拭きながらカオルさんは言う。
「その言葉を聞いた後ね、美羽ちゃん気になる事を言っていたの」
「『ねぇねぇ、死神さん。少しだけ気になる事があるんだ……。最後に小児病棟で紙芝居を読んだ日にね。腕と頭に包帯を巻いてすごく寂しそうな目で私の紙芝居を見ていた男の子が居たの。その目がね……昔の色々諦めちゃっていた自分に似ててさ……何かしてあげたいのに……悔しいなぁ……。体が動かないよ……。』そう言って泣いたの。私が悲しそうな顔をすると、すぐに笑って誤魔化していたけどね」
自分の無力を呪う事。誰だってある事かもしれない。きっとここに居る人はそれを経験している。川崎先生も、カオルさんも、日向さんも、私も……。
そう思って全員の顔を見渡すと、日向さんが呆けていた。
「あの、日向さん？」
心配になって声をかける。私の目的を見失っていた。この人を助けるんだ。
「そりゃ、驚くわよね。まさか美羽ちゃんが自分を見ていたなんて

思ってもいなかったでしょうからね。野川（ノガワ）　勇人（ユウト）君？」
カオルさんが日向さんを見据えながら言う。
「その名前で俺を呼ぶな！」
日向さんが突然叫ぶ。
「やっぱり……あなたがそうだったのね……。これも美羽ちゃんの力なのか、やっぱり奇跡はあるのか……。」
カオルさんが意味深に呟く。聞きたい事が山の様に増えていく。
「あの……！」
言葉にしかけてカオルさんが手を伸ばす。
「まぁまぁ、落ち着いて。とりあえずご飯、食べましょうよ」
マイペースにそんな事を言い出した。
「お腹空くとカリカリしちゃうでしょ？　ちょっとは落ち着きましょうよ」
そう言ってさっさと店員を呼ぶボタンを押す。
「ちょ、ちょっと……あの……」
私は抗議しようとする。
「ここ、天ぷらが美味しいのよねー。でも、ビールは玲がダメって言うしなぁ……。あ、二人は何にする？　好き嫌い無いなら私がテキトウにお勧め選んじゃうけど？」
半ば強引に天ぷら定食になってしまった。

「天ぷら定食四人前ね。後アイスコーヒーのおかわり下さいな」
カオルさんは注文を済ませちょっとお手洗いと席を外してしまった。残された私達には微妙な沈黙が残る。それを最初に破ったのは川崎先生だった。
「ごめんなさいね。カオルってばマイペースだから……」
川崎先生は軽い溜息を吐きながらカオルさんを弁護する。
「私達ね、美羽ちゃんの話をする時は出来るだけ明るくしようって決めているの。美羽ちゃんが私達を気遣ってくれたように私達も美

羽ちゃんに恥ずかしくないようにって……」
「だけど中々これが難しくてね。だからきっとカオルにもちょっとクールダウンする時間が必要だったのよ。それと……日向先生にもね……」
そっか、この人達はお互いを思い遣っているんだ。私にもきっとこの時間は必要な物だ。熱くならず。冷静に知らなければいけないんだ。どんな事実でも日向先生を救う為に。
日向先生は青い顔で震えている。その手をぎゅっと握る。大丈夫。もう一人じゃない。彼も美羽お姉ちゃんが死の間際でも幸せだったと言えた世界に近付いているのだから。
彼は少しだけ私の手を見つめた後、そっと手を払う……。だけど彼の震えは止まっていた。
そうしているとカオルさんが戻って来る。
「あの！」
私は声を上げる。
「川崎先生、カオルさん、ありがとうございます！」
我慢出来ずにお礼を言う。二人は目を合わせて笑った。人は不思議な生き物だ。不安になったり、泣いたり、怒ったり、笑ったり、感動したり、恥ずかしくなったり……沢山の複雑な感情をほんの二～三十分程度で経験してしまう。
神様は何を思ってこんな生き物を創ったのだろう？
「ねぇねぇ、死神さん……か……」
美羽お姉ちゃんは死の神様に何を聞いていたのだろうか？そんな複雑な事を考えていると胃をくすぐる匂いと共に天ぷら定食が運ばれて来た。
「ふー、やっと来た。お腹ペコペコだったのよねぇ。本当ココの天ぷら美味しいからじゃんじゃん食べて！」
カオルさんは無邪気に言う。
「いただきます」
三人が声をあげる。日向さんは黙ったまま箸を取った。

「あら、日向先生。それはいけないわ」
カオルさんが日向さんに待ったをかける。
「ちゃんと『いただきます』って言わないと！」
まるでお母さんの様に言って聞かせる。
「いただきます……」
呟くように日向先生が『いただきます』を口にする。
「はい、よろしい。これからもちゃんと食べる時はいただきますって言うのよ？」
日向先生はそのまま黙々と食べていた。
「もう、愛想が無いと言うかなんと言うか……いつもこうなの？」
カオルさんは会話していないと落ち着かないのか私に話を振ってくる。
「ええ、まぁ……普段はもっと酷い時もあるような……」
あははと、苦笑いで答える。
「良く担当続けていられるわねー。私だったら一日でギブアップかも……」
私は本人を前にそこまで言えるカオルさんがすごいと思います。
「まぁ、当事も相当ひねくれていたみたいだけどね」
日向先生の箸が止まる。
「当事の日向さんを知っているんですか？」
私は当時の彼を知らない。同じ場所に居たはずなのに。美羽お姉ちゃんが倒れたあの日、あの場所に。
「んー、知っていると言うか人から聞いたって感じかな。舞子がよく愚痴っていたから」
「カオルさんと舞子さんは知り合いなんですか？」
「知り合いも何も数十年来の悪友よ」
黙って天ぷら定食を食べていた川崎先生が口を挟む。
「あ、悪友って……まぁ……玲にも沢山迷惑かけたけれども……」
「本当、美羽ちゃんの一件以来二人は患者さんに熱くなり過ぎる体があってね？　本当色々やってくれたのよ……。夜中に病人を連れ

回したり、日が暮れるまで四葉のクローバー探しをさせられたり」
「う……。玲は逆に冷たくなったわよね……結局サナトリウムも小児病棟も壊してあんな大病院建てちゃうし」
「私はあなた達みたいに強くないからね」
二人の会話に完全に置いていかれてしまっていたけれど何だか二人の関係が少し羨ましかった。
「あれ？　でも……。その舞子さんは今どうしているんですか？」
そうだ、私は舞子さんにも会いたい。あの人は美羽ちゃんと一番近かった人のはずだから。
「舞子ねぇ……今どうしているのかしら……？」
カオルさんが川崎先生に聞く。
「さぁ？　今はどこに居るのか……こないだはベトナムとか言っていたわよね？」
べ、ベトナム！？　思わぬ名前が出て咽そうになる。
「そそ、それで今度はカンボジアだっけ？　とにかく国際ボランティアとか言って世界中飛び回っているわ」
舞子さんらしいと言うかなんと言うか……。
「本当。四葉総合病院の婦長の話を蹴ってそんな危ない事して回っているんだもの、呆れちゃうわ」
川崎先生はしれっと言う。
「そんな！国際ボランティアなんてすごいじゃないですか！」
私は声を荒げてしまう。舞子さんはすごい。そんな善意を馬鹿にされているようで腹が立ったのだ。
「確かにすごいわね。とても私達には真似出来ないくらい。偉いわよ。あの子は……。だからこそ玲は嫌なのよね」
カオルさんが言う。一体何が嫌なのだろう？自分の友達がそんな事をしていたら胸を張れるんじゃないだろうか？
「ええ、舞子は無鉄砲だからね……。目の届く所に居てくれないと、何しでかすかわからないし。まだ医療が確立されていない所でのボランティアなんて……。いつ死んでもおかしく無い。だから私は絶

対的な地位と、お給料まで用意したのにあっさりそれを蹴って行っちゃったのよ。あの子」
川崎先生は川崎先生なりに友人を心配していたのだ。私は全然考えの違う人とこうやって話をしている事がすごくありがたく思えた。今までと違った世界が開けていく。日向さんもそうであると良いなと思った。
「何だか素敵な関係ですね」
「ないない」
「ないない」
二人が口を揃えて言う。その姿が面白くて、微笑ましくて、暖かかった。日向さんはまだ日陰でこっちを見ている。早くこっちに来れば良いのに。
「ごちそうさま」
日向さんが突然そう呟く。見ると天ぷら定食は綺麗に無くなっていた。それより今『ごちそうさま』って言った！？　私の手料理にも何にも言わなかったクセに……。心の中がざわざわする。
「あら、早いわね。さすが男の子」
そんな驚きをよそにカオルさんは言う。
カオルさんと私は半分以上残っていた。川崎先生は食べるのが早いのかもう少しで食べ終わりそうだ。
「カオルはぺちゃくちゃ喋っているから遅いのよ」
川崎先生が言う。
「あら、ゆっくり食べた方が体に良いし太らないわよ？それに、お喋りしながら食べる方が楽しいじゃない？ね？慧ちゃん」
「そうですね。私も喋りながら食べる方が好きです」
正直に答える。
「ですってよ。日向先生？　ほら、もっとおしゃべりにならないと！」
あろう事かカオルさんは日向さんにそんな話を振る。
「な、俺は別に食えればなんでも……」

「そういう話をしているんじゃ無いんだけどなぁ」
カオルさんがにやにやしながら私達を見ている。私達にそんな浮いた話を期待されても……。
「ま、良いわ。積もる話もあるでしょうしささっと食べちゃいますかね」
そう言って「やっぱ美味しい」とか「エビはやっぱり最後よね」とか喋りながら私達も食べ終えた。
食べ終えた食器を片付けに来てくれた店員さんに「ごちそうさま」とカオルさんは言う。
「ほらほら、みんなも……」
そう言って勧められるまま
「ごちそうさまでした」
と言う。そうすると店員さんは
「おそまつさまでした」
とにっこり笑って言ってくれた。それが何だかくすぐったいけれど気持ち良い。
「ここの店員さん良く出来ているでしょ？」
突然カオルさんがそんな風に言う。
「え、そう言えば対応とか丁寧で親切ですよね」
「まあそれも重要なんだけどね……。他にも色々あるのよ。まぁ、あなた達もこれからの人生で学んでゆくでしょう」
「また、そんな悟った様な事言って。美羽ちゃんの受け売りのクセに」
「う……。でもやっぱり『いただきます』や『ごちそうさま』は言ってもらえると気持ち良いものだものね。言葉ってやっぱり大事なんだわ。その中でも挨拶は基本だからこそ、かかしちゃいけないと思うのよ」
そっか……。私は自分の小説に難しい言葉や難解な表現で無理やり『文学的』に仕上げようとしていた。でもこういう『基本の言葉』自体を見失っていたかもしれない。

「さ、本題に入りましょう。まずは傘丘　日向先生。さっきの名前で呼ばれるのは気に入らないみたいだから、日向先生と呼ばせてもらうけれど。美羽ちゃんはあなたを心配していたのは確かよ。さっき言っていた様に、当事あなたは、頭に傷を負い、腕を骨折して入院していたわよね？」

皆の視線が日向さんに注がれる。

「はい……」

日向さんは静かに答えた。

「やっぱり……。それならあなたはそんなに自分を責めないで。美羽ちゃんの声はもう聞けないけれど。あの子が自分の物語で誰かを不幸にするなんて望むわけ無いから。私はあなたの事を良く知っているわけじゃないから、あなたを弁護したいわけじゃない。これは『お願い』なの。私は美羽ちゃんの為に言っているの」

カオルさんの言葉は容赦が無かった。だけどやっぱり私と同じ意見だ。それが嬉しい。

「私は最初、『白詰草』は慧さんが書いた物だと思っていたのだけれどね」

川崎先生が静かに言う。

「私には才能無くて……」

私は苦笑いで返すしか無かった。努力もしたし、沢山勉強もしたけれど結果は付いて来なかった。

「あらあら、でも諦められなくて編集社で、お仕事しているんでしょう？」

カオルさんがさっき言った言葉を口にする。口ではなんとでも言えるけれど、私には自信が無い。

「そうなんですけどね……やっぱり、日向さんには敵わなくて……」

また、苦笑い。いつの間にか私が追い詰められている。

「俺にだって才能なんて無いよ。現に新しい物は書けていないじゃないか」

日向さんから思わぬ言葉が飛んで来た。

「ふふ、あなた達やっと人間らしくなって来たじゃない」
カオルさんが突然変な事を言う。日向さんは、確かに愛想は無いし、おかしな所もあるけれど普通に人間だ。私だって普通の人間なはずだ。非凡で取り得なんて行動力くらいしかないけれど人間だ。
「それはどういう意味ですか？」
私の声が少し乱暴に出る。
「そのままの意味よ。人は他人に認められて始めて人間になれるのよ」
人間……。一体何を言っているのだろう。私にはわからない。
「お互いがお互いを思いやり、尊重し、互いを認める。それは人と人の繋がり。言の葉を操る人間だからこそ出来る事。それが出来るから人間なんだって……美羽ちゃんは言っていたわ」
美羽さんの言葉……。
「そして日向先生が言った言葉は、卑屈だけれど間違いなく慧ちゃんを思いやっていた。私が見ていた限りでは今までの日向先生は他人に興味なんて無かった様に見えたけれどね」
日向先生は否定も肯定もしない。私も言葉が見つからない。
「私達には神様の考えなんてわからないけれど、せっかく貰った能力なんだから上手く使いたいよね。美羽ちゃんはそう言って言の葉使いになりたいと、夢を語ったわ」
言の葉使い……。最後に私達に紙芝居を読んでくれた日に教えてくれた美羽さんの夢。彼女は自分がもうすぐ死ぬと知っていたのに、私の夢を優しく受け入れ、その上で自分の夢を話してくれた。叶わないと知っていたのに……。
「美羽お姉ちゃんは、どうしてそんなに強いんでしょうか……。」
私は言葉を上手く扱えない。日向先生を救う力も、自分の夢を掴む力も無い。美羽お姉ちゃんの強さが羨ましい。十六歳の女の子にすら敵わない自分が歯痒い。
「美羽ちゃんが特別強かったわけじゃないわ。彼女は色々な人に支えられそれに気付けたから強くなれた。誰かを思いやる。それは誰

かの為に自分を傷つける事になっても、それを選べる強さ。そして思われた相手もまた相手を思いやる。そうして無限に広がってゆく。それが美羽ちゃんと舞子が持っていた物。そしてそれは私や、玲、優さんや、日向先生、慧ちゃんに広がって『白詰草』はこの町や、全国、世界にも伝わっているわ」

カオルさんの言葉と美羽お姉ちゃんの言葉が降り積もってゆく。

「だけど……俺は……」

日向さんはまだ割り切れていないようだ。

「まぁ、そんなにすぐには許せないわよね。自分の罪は自分が一番重く受け止めてしまう物。玲だって、それであんな大病院まで建てたわけだしね」

「な、私は……そんな訳では……」

川崎先生が言いよどむ。

「あら、美羽ちゃんに泣いて死を告げた事を後悔して、あの病院を作ったのでしょう？」

「そうなのだけれど……。やっぱりそれで許されたとは思えないわ」

「そ、この通りみんな中々割り切れない物なのよ。さて、そろそろもう一人の罪人を呼びましょうかね」

もう一人の罪人？　私は唖然としている事しか出来なかった。カオルさんは何を思ったか店員さんを呼ぶ。

「マスター呼んで来て」

そう言ってアイスコーヒーに口を付ける。

「あ、そうそう。日向先生。深呼吸しておいてね」

「え？」

意味がわからなかった。この人は何を知っているのだろうか。

そしてノックの音と共にあの渋い声が聞こえてきた。

「失礼します」

全員の視線が扉に注がれる。

「うわぁぁぁぁぁぁ！」

瞬間、男の人の叫び声が聞こえた。日向さんが扉とは反対の壁に

後ずさり。叫んでいた。
「やっぱり……」
カオルさんはこちら側に来て日向さんを抱きしめる。
「落ち着いて、もう大丈夫だから……」
そうやって日向さんをなだめた。それを重い表情で見ているマスターと呼ばれた男性。
「な、なんで……お前が……」
日向さんが搾り出すように声にする。その声は震えていた。
「く、すまない。いや、ごめんなさい」
そう言ってマスターと呼ばれた男性は土下座をする。
「ふざけるなぁ！」
日向さんが叫ぶ。私は何が起きているのかまだ理解出来ずにいた。
「許されるとは思っていない。だけど、俺には謝ることしか出来ないんだ……」
ただひたすら床に顔を付けたまま、マスターと呼ばれた男性は謝り続ける。ごめんなさい。ごめんなさい。と……。
「彼はね……。加山（カヤマ）　宗一（ソウイチ）青埼十字孤児院で日向先生を虐待していたのよ」
カオルさんが私に説明してくれる。虐待。私には縁の無かった言葉。そうだ世界は優しさだけで溢れている訳じゃないんだ……。私には何が出来るのだろう？　この場で私には何が？　いくら考えても何も出来なかった。
カオルさんの様に日向さんを抱きしめる事も美羽お姉ちゃんの様に言葉で人の心を動かす事も。
「そんな……酷いですよ……。そんなの……」
そう呟く事しか出来ない自分が歯痒い。
「そうね、酷い事ね。でも、彼は今、この店を経営して孤児院の子達を働かせてあげたり、御馳走してあげたりしているわ。だけど今も苦しんでいる。自分の罪を許せずにね。それは今の日向先生にならわかるでしょう？」

カオルさんは日向さんに言う。確かに日向さんも自分を責めていた。だけど……こんなの……。
「それにね、彼が更生したのもあなた達と無関係では無いのよ？ちょうど日向先生が過度の虐待による骨折で運びこまれた日が美羽ちゃんの公演の日だったの。そして彼は日向先生が治療を受けている間に、美羽ちゃんの物語を聞いた。それで彼は自分を見つめ直し、自首をした」
「さて、これは偶然なのか、奇跡なのか、必然なのか……どれかはわからないけれど私達は一人の女の子を通じてここに集まった。私は美羽ちゃんに関わった人間として、ここに居るみんなに幸せになってもらいたい。例え誰かを許せなくても……。自分を許せなくても……。ここからどうしてゆくかはあなた達次第だけれど、私は今日話したこと、行った事を後悔はしない。美羽ちゃんや舞子の様に上手くは出来ないけれど、これが私の精一杯だから」
そうやって誇らしげにカオルさんは言う。
「さて、みんな色々な思いがあるだろうけれど、今日はこの辺でお開きにしましょう。あ、日向先生と慧ちゃんはこれから私の家に来ない？もう夜も遅いし、こっち泊まって行きなさいよ」
呆然とする私達を強引にこっちの世界に引き戻すカオルさん。
最後まで加山　宗一さんは顔をあげなかった。
「ちょっと先に行っていて」
そう言ってカオルさんは私達を先に店の外に出す。私と、日向先生と、川崎先生、この微妙な三人はさっきより重い沈黙に包まれていた。外はすっかり暗くなり近くを走る車さえまったく無く。ちょっと遠くを見れば果てしない闇だった。まるで今の私達みたいだ。
「私、明日も早いからそろそろお暇させていただくわ」
川崎先生はそう言って去ろうとする。
「あ……、今日は突然押しかけてすみませんでした」
私は精一杯思いついた事を口にする。本当は頭の中は色々な事がぐちゃぐちゃに回って何を言って良いかわからない。

「いえいえ、私は改めて自分を見つめ直す良い機会になったわ。ありがとう」
「あなた達に四葉の加護がありますように。それじゃあ、おやすみなさい」
「おやすみなさい」
私はなんとか挨拶を搾り出した。そうして川崎先生は自分の車に乗ってさっさと行ってしまった。
店の灯りだけが頼りない。その入り口に私と日向さんは居る。私はかける言葉が見つけられない。沈黙が重い。
「なぁ……」
日向さんが手すりに手を付いて虚空に口を開く。
「なんですか？」
私は『聞いていますよ』という意思表示をする。
「俺、かっこ悪いよな」
「そんなに悪くは無いと思いますよ？髪切ってからは……」
バツが悪くてわざと見た目の事を言う。
「はは……昔は見た目もかっこ悪かったんだな」
乾いた笑い。だけどこの人が私と会話している時に笑うなんて初めてだった。
「かっこ悪いついでにもう少しだけ聞いてくれないか？」
酷く頼りなく震えた声が静かな夜に澄んで聞こえてくる。
「俺さ、アイツが出て来た時……恐くてさ……恐くて、恐くて、どうしようもなくてさ……」
日向さんの言葉が聞こえる度に心が軋む音が聞こえる様だ。
「椅子を振り上げて、何度も、何度も、殴られたんだ。泣いても喚いても殴られるだけでさ……」
ポツポツと鉄骨の手すりに黒い染みが広がっていく。
「本当は……俺……美羽さんに恋していたんだ。だけど目の前で倒れて……俺には何にも出来なくて……。駆け寄ることも出来なくて……。あの人からのプレゼントだって四葉のクローバーのしおりを

渡された時すげー嬉しくてさ」
私はただ聞いているしか出来無いでいた。
「だけど、同時に悲しくて。俺なんかが届く様な人じゃ無いって思うだけで苦しくて、俺は彼女を殺したんだ。プレゼントは大人の嘘にして。彼女は死んだ事にした。そうして悲劇の主人公のフリをして、彼女の物語を勝手に思い起こしで書いた」
「そう……ですか……」
「だけど寝る度に彼女が責めるんだ。すげー綺麗な笑顔で『私の物語で大金持ちになって羨ましいわ』って……。それとは裏腹に本は売れてどんどん騒ぎが大きくなって……。いつか責められる。気付かれる。って今度はビクビクしながら過ごして……」
もう、限界だった。私は彼を抱きしめる。これ以上聞いていられない。彼はもう十分苦しんだ。
「もう、良いんです。美羽お姉ちゃんはカオルさんや川崎先生が教えてくれた様にあなたをそんな風に恨んだりしないです。だからもう苦しまないで……。どうしても苦しくなったらこうしてまた吐き出せば良いですから……。一人で悩まないで……」
私は涙が溢れるのを止められなかった。気付けば雨が降っている。
「なぁ……」
彼は消え入りそうな声で呟く。
「ありがとう」

思い出と、酒乱と、決意

「もー、困っちゃうわよ。マスターと少し話をして戻ったらラブシーンの真っ最中なんですもの」
カオルさんは缶ビール片手についさっきの恥ずかしい瞬間を語る。
「だから、そう言うのじゃ無いんですってば！」
私は必死に弁解する。日向さんはお風呂を借りている。
「やーね、独り身には厳しいわぁ。まったく……」
お酒が入ってからものすごく愚痴が多くなった。さっきまであんなに衝撃的な場に居た人とは思えないくらい人が変わった。
「もう……ほどほどにして下さいね」
「はいはい、まったく……玲もノリ悪いし、由香は結婚しちゃうし、舞子帰ってこないかなぁ」
由香って誰だろう？　と言うか誰でも良いから助けてください！
と心の中で叫ぶ。
「あ、そうそう、舞子と言えばねー」
そう言いながらタンスの上に飾られていたフォトフレームを持ってくる。
「えーと、どうやるんだっけ？」
「そっちのボタンじゃ無いですかね？」
私はなんとなくで操作の仕方を教える。
「あはは、やっぱ年取ると機械に弱くなるのよねぇ……。最近は携帯も満足に使えないわ」
そんなものなのだろうか……。まぁ確かにパソコンとかになってくると私も自信無いけれど……。
「でもインターネットとかじゃないと舞子と満足に連絡も取れないからさ……っと、あった、あった」
そこに映し出されたのは色々な国で子供達や、他の国の看護師さんなどと写されている舞子さんだった。

「ぷっつり連絡が途切れたと思ったら、急にそうやって満面の笑みで写真のデータ送ってくるのよ」
どの写真も笑顔で溢れていた。衣服さえまともじゃない国の人達も、痩せ細った体の子達でさえも笑っていた。
「まったく……すごいわよね。気付いたら私なんか足元にも及ばない所に行っちゃったわ」
どこか寂しそうなカオルさん。どうして私達は笑って過ごせていないのだろう。ここに写っている人達の方がよっぽど良い笑顔で過ごしているのでは無いのだろうか？
「私達は贅沢になり過ぎたんですかね？」
私はきっと贅沢だ、みんなが笑って過ごせれば良いと思っている。だけどそんな事は現実にはありえない。
「あはは、確かに贅沢かもしれないわね。だけどね、きっとそれに負い目を感じたり、この子達に同情するのも何か違うと思うのよね。誰だって幸せを願う権利くらいはあるって信じたいじゃない？」
「カオルさんは自分に正直で羨ましいです」
「あら、これでも結構身を削って生きているのよ？」
「本当ですかー？」
「そうじゃなきゃ婦長なんて職業やってられないわよ。私達は私達の精一杯で生きるしか無いのだから……」
カオルさんの言葉はすごく身近に感じられた。私は高い所ばかり見ていた。美羽お姉ちゃんや、舞子さん、それに日向さん。だけど私も何かしたい何か……。
「あ、そうそう。そこには入ってないのだけれどね」
そう言ってクローゼットを開けて中を漁る。
「これ！」
そう言って差し出されたアルバムの中の二つの写真。それを見て私の心が少し温かくなる。
「わー、やっぱり美羽お姉ちゃん可愛いですね。でも、こっち……なんでみんなポカンとしているんですか？」

一枚の写真は笑顔では無く呆気に取られた顔だった。
「その時さー、由香ってば写真撮る掛け声に『膝は英語でー？』とか聞いてきたのよ。それでみんな呆気に取られちゃってさ。その後、それに大笑いしたのが後の写真」
聞いているだけで楽しかった事が伝わってくる。
「でも、写真って一瞬を写しているだけなのよね。そこで笑っているみんなも日常に戻れば苦しんだり、悲しんだり、している。だから写真に惑わされないで私達は笑顔で居られる時間を目指さないとね。この笑顔達だってここに辿り着くまでにはきっと色々な事があったのだろうから……」
そっか、笑顔に向かって努力する事が『生きる』事なのかもしれない。
それから私はカオルさんに美羽お姉ちゃんとの思い出を語ってもらった。
「お風呂ありがとうございました」
日向さんがお風呂から出てくる。こういう礼儀は心得ているのか……。
「いえいえ、次は日向先生が私の相手ねー。よーしお姉さんが沢山手取り足取りお・し・え・て・あ・げ・る」
何だかこの二人を残すのは心配だけれど……
「がんばってくださいね」
日向さんとすれ違い際に呟く。流石のご主人様もこの人にかかれば形無しだろうと、お風呂に入る事にした。
「ふぅ……長い一日だったなぁ……」
なんだかすごく長い一日だった気がする。湯船に使って考え事をする。日向さんを救うのが目的だったのに、いつの間にか私まで迷路に迷い込んで救われた様だった。
私はなんとなく自分のやりたい事が決まって来て居た。日常に戻ったら笑顔になれる努力をする。
「さて、どうやってあの人を説得するかなぁ……」

しばらく悩み、のぼせそうになったのでお風呂から上がるとそこは修羅場だった……
「た、助けてくれ……」
日向さんが私に懇願する。
「おらー、私の酒が飲めないのかー！　大の男が情けないぞー」
「は、吐きそう……」
日向さんは缶チューハイを飲んだようだ。まったくお酒が飲めないのに。可哀相に、青白い顔になっていた。
「と、とりあえずトイレはあっちですよ」
「う……」
そう呻いて日向さんは走ってゆく。
「カオルさん……カンベンしてあげてください」
私はへべれけのカオルさんをなだめる。
「うー、ノリ悪いなぁ。これだから草食系はー！」
川崎先生がお酒を止めた訳が分かった気がする。
「チューハイ一本飲んだだけでも十分日向さんはノッた方ですよ」
そう言ってカオルさんをベッドに運ぶ。
「さ、今日はもう寝てください」
早く大人しくしてもらおうと寝かせる作戦に出る。
「わーたーしーはーまーだー……飲み足りないぞー！」
「叫ばないでください！」
そうしてベッドでしばらく格闘していたら、ちょっとするとすぐに眠ってくれた。やはり疲れているのだろう。看護師は激務だと言う。なんだかんだでカオルさんもストレスが溜まっていたのかもしれない。
「はぁ……でも酒乱だとはなぁ……」
溜息を吐いて今度はトイレに日向さんの様子を見に行く。
トイレのドアをノックする。
中からはコンコンと音が返ってくる。
「大丈夫ですかー？」

「な、なんとか……」
中からやつれた声が聞こえる。
「今日は災難でしたね」
「お前がそれを言うか……」
「あはは、元はと言えば、私が誘ったんですもんね」
から笑い。
「でも、私もメッタメタに打ちのめされちゃいました」
そう、自分の力の無さや、甘さ、弱さを思い知らされた。
「私、ダメですね。なんの力も無くて、弱い。美羽お姉ちゃんの紙芝居。受け取るべきじゃ無かったかもしれないです」
私、なんでこんなに弱いんだろう。日向さんを助けたかったはずなのに……。いつの間にかこんな弱音を吐いている。
「俺もだ。俺も弱いよ。何もかも嫌になって酒に逃げようとしても、それすら出来なかった」
「それで飲んだんですか……。もう……」
「情けないだろ？」
「そうですね。って言いたい所ですけど、私もそんな気分です」
でも、私は沢山教えてもらった。カオルさんと川崎先生、日向さん、過去の美羽お姉ちゃん、舞お姉ちゃんに。
「ねぇ、日向さん。私達どうするべきだと思います？」
本当は決意している。何かしたい。しなきゃ今まで出会って来た人達に胸を張れない。
「わからない。でも、人間になるには何かしなきゃいけないと思う」
『あなた達やっと、人間らしくなってきたじゃない』カオルさんの言葉が蘇る。
「今までの日向さん、人間離れし過ぎていましたもんね」
「そう……なのかな？」
酷く頼りない声が返ってきた。冗談のつもりだったんだけど……
「冗談ですよ。立派に人間でした。恐がりで、臆病で、ずるくって、嘘吐きで、弱い」

「酷い言われようだな」
「あはは、まるで鏡に映った自分を見ているようでした」
「……」
「そんな事、無いよ。お前は俺にきっかけをくれた。何もしようとしなかった俺よりずっとすごいよ」
「じゃあこれからはもうちょっと労わってくださいね」
「いいや、帰ったら担当クビにしてやる」
「な……」
絶句。いくらなんでもそれは……。
「夢なんだろ？作家になるの……がんばれよ」
「無責任な事、言わないで下さい！　生きていくにはそれじゃダメなんです！　私は作家になれるほどの力なんて無いんです！」
「生きていければ良いんだろ？　生活費くらい面倒見てやるよ。だから、がんばれよ」
淡々と日向さんは言う。
「そんなの納得出来る訳無いじゃないですか！」
「でも！　俺にはそれくらいしか、してやれる事無いんだよ！」
日向さんの声も荒くなる。
「そんな事無い！　あなたには言葉が……言葉がある！　『白詰草』を書いたあなたなら、もっと出来る事が！」
言の葉使い。美羽お姉ちゃんの夢。
「ダメだよ。俺の言葉は人の物語を飾る事しか出来ない。ゼロから生み出す事は出来ないんだ……」
弱々しい掠れた声。だけど日向さんはもっと先に行ける。もちろん私だって。
「それで良いんですよ！」
私は最後の力を込める。彼を引き上げる最後の力。
「私と！　私と一緒に紡ぎましょう。美羽お姉ちゃんのお話を！ゼロから生めないならある物を飾りましょう！」
「お前、何を言って……」

「彼女の！　美羽お姉ちゃんの人生を本にするんです。私がいろんな人から話しを聞きます。怒られても、なじられても、必ず、美羽お姉ちゃんの生きた時間を……一言一句残さずに聞いて来ます。だから、あなたはそれを全力で！　今ある全ての言葉を持って飾ってください。『白詰草』の様に……」

私がきっと人生をかけても届かないであろうと思ってしまった。素敵な物語。大好きだからこそ届かないと分かってしまったから。だからこそ、彼に、傘丘　日向に書いてもらいたい。

「はは、やっぱ、すごいよ。お前、いや慧。俺にはそんな事、思いもつかなかったよ」

「私だって一人じゃ思いつかなかったと思います。日向さんと、日向さんの物語が在ったから、思いついたんです」

私は努力するんだ。私達が笑って過ごせる日の為に、例え一瞬しか笑えなかったとしてもそこからまた笑えるように努力する。世界中の人が笑って過ごせるなんて夢物語だけど、隣に居る人くらい笑顔にしたい。だから、自分に出来る事をがんばるんだ！

「じゃあ、私、先に寝ますね。お布団敷いておきますから、落ち着いたら日向さんも休んでくださいね」

「ああ、ありがとう」

彼の声がすごく澄み渡った気がした。

「おはよう、慧ちゃん、日向先生」

昨日の事なんて無かったようにそうやって爽やかに笑うカオルさん。

「お、おはようございます」

ぎこちない私達の挨拶。

「何？　二人昨日何かあった？　やっぱり若いわねー」

「や、やめてください。そんなんじゃないですから！」

はぁ……この人は何て言うか……。

「いやぁ、それにしてもこんな人生経験豊富な美女と、まだまだ初心なあどけなさの残る美少女相手に、何もしないなんて日向先生も罪な男ね」
「もう、やめてください。こっちが恥ずかしくなります」
まぁ、日向さんも顔を真っ赤にしている訳だけれど……。
「さて、お二人さんは、今日どうするのかな？私は夜勤だから午前中しか付き合えないんだけど……」
「とりあえず、美羽お姉ちゃんのお話を知っている限り聞きたいんですけど……」
「あら、昨日の話しじゃ、足りなかった？」
「あ、いえ、そう言う訳じゃなくて……」
いきさつを軽く説明する。
「なるほどねー。考えたわね。私は全面的に賛成なのだけれど……」
カオルさんは語尾を窄ませて考える仕草をする。
「それにはまず、乗り越えなきゃいけない事があるわね」
乗り越えなきゃいけない事？なんだろう？
「あなた、死んだ人だからって誰の了解も得ずに書くつもり？」
そうだった……ちゃんと美羽お姉ちゃんの両親に了解を得ないと。
「あう、突発的に思いついたので何も考えていなくて……」
「まぁ、そういうの、嫌いじゃ無いけれどね。美羽ちゃんの両親には私が紹介してあげるわ。だから美羽ちゃんのお話は、また今度にしましょう。玲の知っている話と合わせてまとめておいてあげるから」
「何から何まで本当にありがとうございます」
「いえいえ、美羽ちゃんもきっと喜んでいると思うわよ」
そうだと良いのだけれど……。
「あの……」
突然日向さんが声をあげる。
「なら、午前中もう一度あの人と会わせてもらえませんか？」
あの人って誰だろう？

「あの人って？」
カオルさんも見当が付いていない様だった。
「加山　宗一……あいつに会って話をしたいんです」
私とカオルさんは絶句した。だけど日向さんの決意はすごい。どんな気持ちで居るのかはわからないけれど、自分が同じ状況だったらこんな事が言えるだろうか？
「ふぅ、本当にすごいわね。あなた達、一晩で本当に変わったわ」
私と日向さんを見比べてカオルさんは言う。
「良いでしょう。午前中は孤児院の方に居ると思うけれど……大丈夫？」
カオルさんは日向さんに覚悟を確かめる。
「大丈夫です」
日向さんが手をぎゅっと握り締めたのが見えた。やっぱりここに来て良かった。ありがとう。美羽お姉ちゃん。

決別は新たなる出会い

青埼十字孤児院は思っていたよりずっと静かだった。小さな子供達以外は学校に行っている様だった。

カオルさんが子供達に囲まれる。

「やほー、みんな元気にしてたー？」

子供達は口々に自分達の元気を告げる。正直私は日向さんみたいなのが沢山居る物だと思っていたので素直な反応にほっとする。でも、この子達は親と暮らしていない。そう思うと、切ない様な、やるせない様な気持ちが私を襲った。

カオルさんは子供達と遊んでいた、エプロン姿の女性に話しかける。

私達は少し遠くから軽く会釈をする。

カオルさんは施設の中へ行ってしまった。エプロン姿の女性と子供達が私達の方へ来る。

「こんにちは」

『こんにちはーーー！』

エプロン姿の女性が挨拶すると子供達も大きな声で挨拶してくれる。

「こんにちは」

私はにっこり笑って。日向先生は少し戸惑いながら……。でもちゃんと挨拶をする。

「私はここでボランティアをさせてもらっている。宮藤（ミヤフジ）　守（マモリ）と申します。あの……失礼ですが。あなたがあの『白詰草』を書いた傘丘日向先生ですか？」

彼女は丁寧に挨拶をしてくれた後、日向さんに向き直る。

「はい、俺が……書きました」

少し躊躇いが見られたけれど、彼は宣言した。

「そうなんですか。あの物語。私、大好きなんです。彼女は嬉しそ

うに言う」
「そんな、すみません。あの物語は俺だけの力で書いた物じゃ無いんです」
対照的に日向さんはしぼんでゆく。
「美羽さんの……お話が元なんですか？」
彼女は申し訳無さそうに日向さんに聞く。
「美羽さんを知っているんですか？」
日向さんと私は驚いて向き合う。
「ええ、当事……今もなんですけど。引っ込み思案な私は美羽さんを驚かせてしまって……。でも、あの紙芝居はうろ覚えで……『白詰草』を読んだ時は本当に驚いたけれど、すぐに大好きになりました。もし、美羽さんの物語を元にした物だとしても、私はあの物語に出会えて良かったと思います」
彼女はそう言ってにっこり笑う。でも手が震えているのが見えてしまった。
「あの？　大丈夫ですか？」
私は彼女に声をかける。
「あ、すみません。私、本当に引っ込み思案なもので……知らない人と会うといつもこうなっちゃって……失礼ですよね……」
彼女はおずおずと引っ込んでしまう。
「や、そんな事無いですよ」
私は慌てて弁解をする。
「お姉ちゃんを虐めるな！」
子供達が守さんを庇う様に私に群がる。
「あ、こら、お姉ちゃん虐められてないから！　大丈夫だから！」
守さんが慌てて子供達をなだめる。
「すみません。本当すみません！」
何だか妙な空間になってしまった。
「あはは、大丈夫ですから、そんな恐縮しないでください」
そう話をしているとカオルさんがあの人を連れて来た。

隣に居るだけで日向さんの緊張と恐怖が伝わってくる。
雰囲気が伝わったのか、守さんも困惑している。
「ほら、連れて来たわよ。子供達の前じゃあれだから向こうで話してらっしゃい」
そう言って隣の教会を指す。
「ありがとうございます」
日向さんはカオルさんに頭を下げた。
「私は子供達と遊んでいるから……二人で行ってらっしゃい」
そう言って私達の背中をポンと叩く。
「行きましょう。日向さん」
私は側に居てあげるしか出来ないけれど、きっと一人よりは良い。
そう思いたい。
「あ、守さん」
もう一つ日向さんを勇気付ける為に私も出来る事をしよう。
「これ、良かったら……。子供達に読んであげて下さい」
大事に、大事にして来た美羽お姉ちゃんの紙芝居。私は沢山勇気をもらったから、もう大丈夫。
「え、これって……」
その場に居るみんなが驚きの顔になる。
「そうです。美羽お姉ちゃんの紙芝居です。良かったらここで使ってあげてください」
決別。少しだけ寂しいけれど、日向さんがしおりを少女に渡したように。私も、私に出来る事をしたいのだ。
私は守さんと子供達に向き直る。
「あなた達に四葉の加護がありますように」
そうして私と日向さんと加山　宗一さんは教会へ向かった。
「まさか、もう一度会ってくれるとは思わなかったよ」
加山さんは重い口を開く。
ステンドグラスから差し込む光だけが照らす室内は薄暗く重厚な空気だった。

日向さんは震えている。まだ恐怖は拭い切れていない様だ。
「俺は……一晩考えた……」
「色々な人から色々な話を聞いて、正直混乱した。そこにアンタが現れて俺はもう考える事すら諦めかけた」
彼は必死に言葉を紡ぐ。文にするのは上手だけれど喋るのは苦手なのだろう。たどたどしい言葉が続く。
「だけど、慧が、コイツが居てくれたから……。俺はなんとか立ち直れた。俺も、アンタも、罪を犯した。だけどこうやって償っているアンタと、やけになっていた俺じゃ、全然違う。アンタが苦しんでいるのはなんとなく解る。だから俺が許した所でアンタは救われないと思う。だけど俺はアンタを許すよ」
正直驚いた。まさか許す……。なんて……。
「な……俺はお前にあんなに酷い事をしたんだぞ！？」
加山さんも衝撃を受けていた。
「ああ、だけど、いつまでもそれに縛られていちゃここの子供たちを幸せに出来ると思わない。それに俺も決別したいんだ。弱い自分と……だから！　俺は許す。そしてその上で俺は名前を捨てる。野川　勇人でも傘丘　日向でも無い。俺は、生まれ変わる。うじうじ悩むのも、もう止める。慧と美羽さんの物語を書くのに相応しい人間になる！」
彼の決意と言葉に私が泣きそうになる。だけど最初に声をあげて泣いたのは加山さんだった。
「うぅ……すまない。本当にすまなかった……」
膝を付き、頭を床に擦りつけながら何度も謝る。
「顔を上げてくれ」
日向さんは加山さんに視線を合わせる様に片膝を付く。
「これからは、あいつらの為に……子供達の為に、がんばってやってくれ。俺もがんばるから……。そして、俺がもし、美羽さんの物語をちゃんと書けたら……。久しぶりにみんなで飯を食おう。ここの子供達と、守さんと、カオルさんと、川崎さんと、俺と、慧とア

ンタ……みんなでだ。アンタの自慢の料理でさ……。昨日の天ぷら悔しいけど美味かったんだよ」
最後は照れながら日向さんは言い切った。彼はやっぱり根幹は優しいのだ。そして、強く、温かい。私の読んだ『白詰草』そのものだ。
そうしてしばらく、二人の様子を見送り子供達の居る孤児院の方へ戻ってゆく。そこではさっそく守さんによって紙芝居が読まれていた。
「『ああ、もうどうでもいいや、どうせ私は何も持っていないもの』」
「でもミウは思い出します。自分とあまり年の変わらない女の子からもらった名前を」
「『私は美羽（ミウ）』」
「そしてまた思い出します。お姉さんの様な年の離れた女性からもらった苗字を」
「『私は小鳥遊（タカナシ）美羽（ミウ）』」
「そして最後に思い出します。お母さんの様な女性からもらった希望を」
私は守さんに彼女を重ねてしまう。
「美羽……お姉ちゃん」
隣には優しい顔でその姿を見守る日向さん。そして少し疲れてはいるけれど愛おしいものを見る様な目で見ている加山さん。
「なぁ、慧」
日向さんが私に声をかける。
「なんですか？日向さん」
そう言って彼は名前を捨てたのだとハッとする。
「ご、ごめんなさい。日向さんじゃ無いんですよね」
「いや、良いよ。名前無いと不便だからさ、お前が俺に名前をくれないか？」
「そんな大事な物。私に決められないですよ！」

そうだ、名前は大事な物。そんな簡単に決められない。
「いや、大事だからお前に決めて欲しいんだ。ここまで導いてくれたのは慧だからな」
「そんな事言われても……」
「大丈夫。慧にならどんな名前を貰っても大丈夫な気がするんだ」
まったく……この人はなんでこんなに……彼の人生を考える。虐待、出会い、『白詰草』、出会い、変化、自由……
「『私は、名前を、苗字を、希望を、諦めない心を手に入れたから。それがまた欲しくなったら自分で探しに行くわ』ミウは言います」
守さんの声が聞こえる。そして彼を縛っていた加山さんを見る。
「小鳥遊（たかなし）　言羽（ことは）なんてどうですか？」
加山さんと言う鷹が消えた彼なら言葉と言う羽を羽ばたかせて自由に遊べるはず。そういう願いを込める。
「ありがとう。俺がその名前の様になれるかはわからないけれど、名前に負けないようにがんばろうと思う。その名前と、希望と、諦めない心を持って……」
う……何か、かっこいいし……。良いなぁ。でも、私も負けない。少しずつでも前に進む為に。
「こうしてミウは天使になり世界中に四つ葉のクローバーが稀に生えるようにし、それを手にしたモノに幸福を与える天使になりました」
「おしまい」
守さんが終わりを告げる。加山さんが何かに取り付かれたように拍手を送る。目からは涙が溢れていた。
私達も拍手をする。そうすると子供達にも伝わってゆく。守さんは恥ずかしそうにこちらにお辞儀をする。
「お疲れ様」
カオルさんがそっと彼女を支える。
ここには美羽さんの繋いだ物語達が合った。彼女のくれた一つの物語が、これだけの物を生み出したのだ。

「あー、宗にーちゃん泣いているー」
子供達が加山さんを心配する。
「どうしたの？　宗おにーちゃん？　どっか痛いの？」
子供達は言羽さんを虐待していた頃の加山さんなど知らないのだろう。
「違うよ。今のお話に感動してね……」
そっと加山さんが子供達を抱きしめる。
「さ、みんなのご飯を作らないと」
加山さんはそう言って立ち上がる。
「勇人……いや、言羽君。また……会おう」
「ああ、約束守れよ」
「わかっている」
そう言って子供達を連れて加山さんは施設に戻って行った。
「どうやら日向先生、吹っ切れたみたいね」
カオルさんが守さんとこちらに来る。
「ええ、そしてもう傘丘　日向も、野崎　勇人も、捨てました」
「捨てた？」
「はい、それで彼女に、慧に名前を貰ったんです」
言羽さんは落ち着いている。
「小鳥遊　言羽と言う、素敵な名前を……」
「あはは、やっぱりあなた達すごいわ！　私達なんかよりずっと美羽ちゃんの意思を受け継いでいる」
「本当……素敵な名前……」
守さんが呟く。
「あなたも言羽さんと、慧ちゃんと、一緒に居れば変われるかもよ？」
カオルさんが守さんを撫でる。
「え……でも……」
守さんが言いよどむ。
私と言羽さんは顔を見合わせる。

「私と……」
「俺と……」
私達の声がシンクロしてゆく
『友達になってくれませんか？』

悩み多き若者達～一輪の向日葵～

数日後……

私達は、カオルさんの紹介で美羽お姉ちゃんのご両親に会いに来た。

『すみませんでした！』

開口一番、私達は二人で謝罪の言葉を口にする。

言羽さんは美羽さんの物語を盗作してしまった事。私はあの紙芝居を青埼十字孤児院にあげてしまった　事をそれぞれに話した。

「そんな、顔を上げてください」

美羽お姉ちゃんのお母さん、九月（クツキ）　亜美（アミ）さんが申し訳無さそうに私達の隣に来て背中に手を当ててくれる。

それでも私達はまだ顔を上げられない。私達は持てる全ての誠意を持ってこの人達にお願いをしなければならないからだ。

「大体の経緯は田崎さんから聞いていますから」

美羽お姉ちゃんのお父さん、九月（クツキ）　羽衣（ハイ）さんがさらに私達に顔をあげて欲しいと言う。

そうして私達はやっと顔を上げる。

「あの時の子がこんなに大きくなっているなんて時間を感じるわね」

亜美さんがそう言って私の顔をマジマジと見つめている。

「見た目だけじゃない。二人ともすごく出来た人間だ」

羽衣さんがそうやって私達を褒める。出来て無いからこうやって謝っているんだけどなぁ。

「大丈夫。二人の事を美羽は責めたりしないですよ。もちろん私達も」

亜美さんが優しく私達を許す。

『ありがとうございます！』

どちらからともなく出た声が、最初と同じ様に重なる。

それを二人は顔を見合わせて笑った。そして美羽お姉ちゃんの仏

壇へ案内してくれる。
仏壇に飾られている写真はそこには不釣合いな黒いヘッドドレスにゴスロリ風のフリルの写真だった。
「この時の笑顔が一番綺麗だったから……少し変ですけどね」
そう言って亜美さんは線香をあげてやってくださいと勧めてくれる。私達は順番に美羽お姉ちゃんに線香をあげる。
私は仏壇に手を合わせ美羽お姉ちゃんに沢山の事を報告し、謝り、お礼を言う。
そして、私達は今日ここに訪れた本当の理由を話す。
「あの、実はお願いがあって、お二人に会いに来たんです！」
そう、美羽お姉ちゃんの人生を本にしたいと言うお願い。いや、わがままだ。どんなに否定されても引くわけには行かない。
「なんでしょう？　私達に出来る事なら協力は惜しまないつもりですが……」
羽衣さんがそんな風に言ってくれる。
「美羽お姉ちゃん……いえ、美羽さんの人生を本にしたいんです」
二人は少し困惑する。
「俺からもお願いします。俺に……美羽さんの物語を勝手に奪った俺にそんな資格があるかわからないけれど、もし俺の言葉で美羽さんの人生を飾れるのなら……俺の力で世に出せるなら……俺みたいなどうしようも無い人間も、もっと救えると思うんです」
言羽さんも願いを言葉に込める。今までと違って声に出す言葉にもすごく力がある様に感じられた。やっぱり私には敵わない。
「その……美羽の事を売り物にする気ですか？」
羽衣さんの容赦の無い言葉。だけど事実だ……・売り物にならなければ会社は本を出してくれない。
「はい、その通りです。だけど！　お金を稼ぎたい訳では無いんです。私達は純粋に……彼女の生き方や強さに惹かれました。それが繋がって今ここに居ます。だから……美羽さんの物語はもっと多くの人に繋がりや、優しさ、そういう物をくれると思うんです。だか

ら！」
「なるほど……」
羽衣さんは考え込む。
「少し二人で相談する時間をくれませんか？　お二人の決意や思いは良くわかりました。ただ父として、娘の事を書かれそれを世の中の人に読んでもらうと言うのは少し不安があるもので……だから少し時間を下さい」
当たり前だ。羽衣さんの言う事は何も間違っていない。どこの馬の骨とも言えない他人が自分の娘の事を勝手に書こうと言うのだ。しかも本人は亡くなっている。だから美羽さんの考えや思いは想像で書くしかない。それを売り物にしようと言うのだから困ってしまうのも無理は無い。
「あの、よろしかったらその間。美羽のお墓参りに行かれてはいかがです？」
亜美さんがそう提案してくれる。
「え、でも……良いんですか？」
私達二人だけでなんて良いのだろうか……
「構いません。美羽も喜ぶと思いますし。後出来ればお花も交換していただきたいので……」
そう言って、近くのお花屋さんで、向日葵を買って行って欲しいと頼まれ。地図を描いてもらい、私達はお墓へ向かう事になった。
「優しい人達で良かったですね」
言羽さんの車の中でナビと地図を交互に見ながら話す。
「本当に、美羽さんの関係者は優しい人ばかりだ」
「えー、そうですか？」
私はとぼける。
「そうだろ？　みんな優しいじゃないか？」
言羽さんは当然の様に言う。
「いや、私は一人例外が居ると思うんですけどね……」
私の隣にね……。

「誰だよ？」
「わからないなら良いです。あ、そこ左です」
私は、はぐらかす。まあ本当は言羽さんも優しい人だとは思うけれど。
「なんなんだよ……まったく……」
言羽さんは納得いってない様だった。
しばらく行くと花屋さんが見えて来た。
色とりどりの花が並び心に彩りを与えてくれる。だけど私達はお供えのお花を買うのだ。浮かれている場合じゃない。
「ええと、お供え用にお花が欲しいんですけど……」
近くで花の手入れをしていた店員さんに話しかける。
「お供えですか。白あがりで良いですか？」
「え、あ……白あがりってなんですか？　とりあえず向日葵は入れたいんですけど……」
「白あがりって言うのは白いお花だけで飾ったお花で一般的には四十九日まではこちらを選ばれる方が多いですね。今では故人様が好きだった花を飾ってあげたいと言う方も多いので、特別な思い入れがあるようでしたら向日葵でも大丈夫だと思いますよ？」
そう言って丁寧に店員さんが教えてくれる。
「じゃあ、向日葵でお願いします」
そう言われて始めて気付いた。なぜ、向日葵なのだろうか……美羽お姉ちゃんが好きだったのだろうか？
そうして包んでもらった向日葵を抱え車に戻る。
「綺麗だな」
ちょっとだけこちらに視線を走らせ言羽さんが呟く。
「……言羽さんにもそういう感情あったんですね？」
「な、悪いかよ？」
「いや、悪くないですけど何て言うか、あの日以来キャラ変わり過ぎて付いて行けていないと言うかなんと言うか……」
あれから、ずいぶん変わった気がする。カーナビだって気付いた

ら付けていたし。積極的にコンタクト取ってくれるし、守ちゃんに手紙も書いているみたいだし……。何よりご飯に『いただきます』と『ごちそうさま』を言う様になったし……。
「まぁ、良い方向に変わっているから良いんですけどね……」
わざと窓の外の過ぎて行く風景に目をやる。言羽さんはきっと耳まで真っ赤だろうから。
「あ、今の道、右でした……」
そんな事を考えていたらナビを忘れてしまった。

「いやー、結構時間かかっちゃいましたね」
あれからUターンする場所が見つからずここに来るまで随分かかってしまった。
「お前のせいだろ！」
「返す言葉もございません」
私は向日葵の花束を抱えながら頭を下げる。
「でも、一応お墓なのでもうちょっと荘厳な雰囲気で居たほうが良いと思うと言うか……そんなに全力で突っ込まなくても良いんじゃないかなーと思うと言うか……」
「お前もな」
「ご、ごめんなさい」
あまりこういうのに慣れていないので何だか緊張してしまっている。
「えーと、九月さんのお墓は一つしか無いって言っていましたよね？　どこにあるんでしょう？」
「名前見て行くしか無いだろう」
「う……でも人のお墓眺めながら行くのって何か違いません？」
「じゃあ場所まで聞いておけば良かったじゃないか」
「なんでそんな冷たい言い方するんですか。自分はずっと黙っていたクセに！」
なんだか他人まかせな、この人がすごくむかついて来た。

「ほら、行くぞ」
「え、ちょ……待ってくださいよ」
すたすたと行ってしまう言羽さんに、早足で着いていく。お墓で走るのは躊躇われた。
「ほら、あったぞ」
言羽さんは一つの墓石の前で立ち止まる。
九月さんと言う苗字は珍しくわかりやすかった。
簡素な作りの墓石、周りとほとんど違わない。似たような造りの墓石がなんだか物悲しかった。
「あれ？　向日葵、既にありますね」
その墓石には不釣合いな黄色い大輪の向日葵が一輪墓前に寝かされていた。
「美羽さんの両親が飾ったんじゃないか？」
言羽さんはそう言って、私の持つ向日葵の花束から一輪抜いて墓前に同じように添える。
「何か、あるな……」
向日葵の下に白い封筒が置かれていた。
「何でしょう？手紙……みたいですけど……」
少し気になったが、墓前に添えられている物を勝手に見るのもどうかと思うので止めて私は花束を墓前に置こうとする。
「おい、それ全部置く気かよ」
それを言羽さんに静止される。
「一輪にしておけ、何だかその方が良い気がするんだ」
「なんですか？それ……何かのおまじないですか？」
私は意味がわからなかった。
「そんなにどっさり飾ったら目立つだろう？ただでさえ墓場では目立つ色なんだ、一本で十分だろ」
そういうものだろうか？いっぱいあった方が綺麗な気もするし何よりもったいない気がする。だけど言羽さんの言う様に一本だけ飾る事にした。

三本の向日葵が美羽お姉ちゃんの墓前に飾られる。
言羽さんと二人、手を合わせ、目を閉じる。
美羽お姉ちゃんは今の私達をどう思っているのだろうか？　あれだけ信頼を寄せて居た人なのに私は彼女と余り顔を合わせていない。言葉もあまり交わしたわけではない。実は美羽お姉ちゃんの事をあまり知らないのだ。
こんな私に美羽お姉ちゃんの人生を本にする資格なんてあるのだろうか？　作家になると誇らしげに語ったくせに、言羽さんに劣るからと、人任せにしている私を、美羽お姉ちゃんはどう思うのだろうか？
今までは、行き当たりばったりでなんとかなっていたが、いつまでもそう言う訳にはいかない。
「慧！　慧！」
急に言羽さんに肩を揺すられる。
「なんですか？」
考え事をしていて言羽さんの声を聞いていなかった。
「青い顔して、ずっと目を開けないから心配したんだよ！」
そんなに長い間目を瞑って居ただろうか？
「ちょっと自信無くなっちゃって……」
あはは、とカラ笑い。
肩を揺すっていた手が私に差し出される。
「俺もだ」
そう言って手を取り立ち上がらせてくれる。
「俺達は美羽さんみたいにはなれないかもしれない」
彼の言葉は対極的に、私を地の底へ引き擦り込む。
「だけど……俺達は一人じゃないから、二人でがんばれば、一人分位にはなれるんじゃないか？」
「だから、何て言うか……これからも、その……よろしく頼む。」
まったく、この人は素直じゃないと言うか、なんと言うか……だけど私は多分、この時彼に、恋をした。

お墓の前で不謹慎かもしれないけれど、まるで地の底まで私を助けに来た王子様の様にすら思えた。
「もう、仕方ないですね、ご主人様」
私も大概、素直じゃない。だけど、これが私達なのだろう。
「な、ご主人様は、止めろって、言ったろ！」
「そうでしたね。ご主人様」
「もういい！」
そう言って手を振り解かれる。少し名残惜しいけれど、私は甘えている訳にはいかない。二人で一人分くらいに……そう言って励ましてくれた言羽さんに負けない様にがんばらなければ。
そうして美羽お姉ちゃんの墓前に向き合い。今度は誓いを立てる。何があってもあの人を支えよう。例え想いが遂げられなくても。あの人の力になりたい。そしてもう一度ここに来よう、あの人と作った本を持って、今度は二人で一輪の向日葵を持って……。
「ほら、置いて行くぞ！」
言羽さんはそう言いながら一足先に歩き出していた。私は慌てず、急がず、ゆっくり立ち上がり、追いかける。

「おかえりなさい。あら、そんなに沢山、向日葵を抱えてどうしたんですか？」
私達は、九月さんの家に戻って来た。
「これは……ちょっと買い過ぎてしまいまして。既に一輪、お供えしてあったので、私達も一輪ずつにしたんです」
「あら、それは悪い事をしましたね。ちゃんと最初に言っておけば良かったかしら」
「いえ、気にしないで下さい。それでこれは良かったら美羽お姉ちゃんの仏壇の方に……」
「あら、ありがとう。それにしても一輪と言う事は一緒に手紙が置いてありませんでした？」
やっぱり、あれは手紙だった様だ。

「えと、白い封筒みたいな物が、向日葵の下にありました」
「やっぱり……。あの人が来たんですね。そうですね、やっぱりあなた達は美羽に導かれているのかも知れないですね」
亜美さんはそう言って微笑んだ。美羽さんに導かれている……。確かに偶然にしては出来すぎている気もするけれど、本当にそんな事があるのだろうか？
「お父さん、優さんがまた、美羽にお手紙をくれたみたいですよ」
客間に通され、亜美さんはお茶を煎れてくれる。どうやら『優さん』と言う人があの向日葵と手紙を置いて行った様だ。『優さん』も、美羽お姉ちゃんの関係者なのだろうか？
「優さんが来ていたのか、やっぱり運命なのかも知れないな」
運命、偶然、奇跡、必然、どれであっても私達は諦めるわけには行かない。そう覚悟する。
「さて、私達の考えの前に一つ、二人に聞いて置きたい事があります」
亜美さんが私と言羽さんを見据える。
「あなた達は、美羽の事をどう思っていますか？」
どう思っているのか……。やばい、すごく難しい。二人はどんな答えを期待しているのだろう？
「天使……。俺は天使だと思っていました」
思案する私を他所に言羽さんが口を開く。
「そうして、自分の届かない存在だと思い込み、彼女を絶対と思っていました」
言葉が出ない。私は今もそう思っている。
「でも、違いました。田崎さんと、川崎さんが教えてくれた、美羽さんは俺達と変わらない人間でした。強いけど、天使や神様じゃない。人間でした。俺はここに居る慧に、変わるきっかけを貰いました。そして、田崎さんに弱い自分を変える機会を貰いました」
私は……まだ曇っている。いつの間にか言羽さんはずっと先に居る。

「そして、美羽さんにそんな人達との出会いを貰いました。直接話した事は無いけれど、それだけの人を惹き付けた人に興味が沸きました。どんな人だろう？　どんな風に過ごしていたのだろう？　と。そして俺は、美羽さんは、もっと沢山の人を幸せに出来ると思うんです。彼女はそういう力を持っている。そういう人だと思います。」

言羽さんはそう言ってのけた。私にはこれだけの事を言えるだろうか？　いや、違う。私の今の答えを言えば良いんだ。

「私は、天使の様な人だと思います。今も彼女に導かれている様な、不思議な力によって操られている様な、そんな気分です。だけど、私は美羽お姉ちゃんの物語を書きたいと思いました。でも、私には残念ながら言羽さんの様な言葉の使い方が出来ません。だから私は彼にお願いしました。言羽さんなら美羽さんの物語を最高に輝かせてくれると思います」

言羽さんに比べ、なんと頼りない言葉だろう。だけど今の私にはこれしかない。

「ふふ、ごめんなさいね。変な事を聞いてしまって」

そう言って亜美さんは真剣な顔を崩した。

「実は、私達は最初から答えを決めていたんだよ。君達なら大丈夫だと思っていてね」

羽衣さんもそう言って微笑んだ。

「田崎さんにお願いされちゃってね。『若者をちょっと悩ませてやってください』ですって、もう、私達の意思がばれない様に、緊張しっぱなしでしたよ」

……カオルさん。人が悪過ぎます。

こうして私達は、美羽お姉ちゃんの物語を綴り始めた。

美羽お姉ちゃんの両親、カオルさん、川崎先生、そして優さん何週間、何ヶ月と細かく連絡を取り合い一言一句洩らさず言葉を拾って行く。それを言羽さんに渡し、綺麗に飾り付けてもらう。

その間に言羽さんは正式に名前を変えた。本当に小鳥遊　言羽になってしまった。

私は忙しなく駆けずり回った。自分に出来る事。今はコレしか無いから……。

何度も取材に通い、会社にも掛け合う。伝説の『白詰草』の作者。傘丘　日向は名前を変え九月　美羽と言う無名の少女の人生を書く。口に出した時は笑われたが、私は諦めなかった。読者に対するインパクトは絶大な事。彼女はどこか神秘的ですごい影響力がある事。を熱弁する。

でも、結局は言羽さんが会社にこれしか二作目は無いと断言した事が決め手で、出版が決定した。

言羽さんは、『慧のおかげで……』と良く言ってくれるが、私はいまいち自信が持てなかった。話を聞けば聞くほど美羽お姉ちゃんは大きく膨れ上がり、また、周りに居た人達のすごさも思い知らされる。

そうして半年程経った頃、舞子さんが戻ると言う知らせが届いた。

生意気で、横柄で、弱虫で、恐がりで、無茶ばっかりして、強がりで、格好付け

「私の事覚えていますかねぇ？」
空港のロビーで舞子さんの帰りを待ちながら、カオルさんと話しをしていた。
「どうかしらね。舞子なら私の事すら覚えていないかもよ？」
そう言ってカオルさんは笑った。
「あ、来た！」
カオルさんの声が弾む。
私の鼓動も高鳴る。舞子さんは、大きなトランクケースを引きずりながら、両手に沢山の荷物を抱えて優雅に歩いていた。
「ありゃ、今日の出迎えは賑やかね」
私達の所に来た舞子さんの第一声。私とカオルさんの二人だけなのだけれど……。
「いつもは連絡も無しに帰ってくるからでしょうに……。さ、ちゃっちゃと行くわよ。ほっとくと、あなた、他の飛行機に乗って、また行ってしまいそうだから」
そんなやり取りの中、私は置いてきぼり状態で、気付いたら車の中だった。
「それにしてもカオル。こんな大きい子が居たのね」
やっぱり、覚えて無いよね……。
「違うわよ。まったく、あなたが残した遺産よ！　遺産！　彼女のおかげで忙しい毎日が、さらに忙しくなったんだから！」
うう、本当の事だけれど何だか傷つく。
「私の遺産？　んー、思い出せないわ……」
バックミラー越しに後ろで縮こまっている私を見る。
「小鳥遊　慧ちゃん。思い出せない？」
「か、カオルさん！　違いますって！」
私は必死に否定する。まだ……じゃなくて、違う。とにかく違う

のだ！
「私は葉山　慧です。昔、青埼小児病棟で舞子さんにお世話になったんです」
「ああ！　あの時の！　すっかり美人になっちゃっていたから、分からなかったわ」
うわ、すごくテキトウな事言っている。こんな人だったっけ……？
「ずっと気になっていたんだけれど、あなたが『白詰草』を書いたの？」
ああ、舞子さんもそう思っていたのか。
「それが違ったのよ。あの時、虐待を受けて入院していた子居たでしょ？ほら孤児院の子、あの子が書いたらしいのよ。で、そっちの慧ちゃんは彼の恋人」
「だーかーらー！」
「はいはい、まだ違ったわね」
もう！　最近のカオルさんはいつもこうだ。だけど私は言羽さんに想いを告げていない。本が書き終わるまで余計な事はしたくないのだ。
「へー、私が居ない間に、随分楽しい事になっていそうね。まったく、カオルもいい加減パソコンでメールくらい打てる様になりなさいよね。そうすれば私だけ情報に遅れる事も無いのに！」
そう、カオルさんは機械音痴で私と出会うまで携帯ですらメールのやり取りが出来なかった。
「あら、でも私も進歩しているのよ？携帯でメール出来る様になったんだから！」
相当時間かかりましたけどね……。
「嘘！？　あぁ、この世の終わりが近いのかしら？　それとも世界の異常気象はあなたのせいだったのね！」
舞子さんは喋る毎に、私のイメージから遠ざかってゆく。
「ほら、そうゆうのは後で良いから、とりあえず取材しちゃえば？」
カオルさんは舞子さんをさらっとかわし、突然私に、話を振る。

「あら、取材？　記者さんにでもなったの？　確かあの時は作家になるのが夢って言っていたのにねぇ」
覚えていてくれている。だけどちょっとその言葉は心に刺さる。
「あはは、いやぁ、一応、作家志望なんですけど……。今、出版社で仕事しているんです。それで今度、美羽お姉ちゃんの人生を本にしようとしていまして……」
言っている事が矛盾している気もする。作家志望か……。声に出してみて、まだ諦めていなかったのかと思ってしまう。
「美羽ちゃんの……本……」
舞子さんは少し考え込む。もしかして舞子さんは反対なのだろうか？
「それで、舞子さんに当事の美羽お姉ちゃんの事を聞きたいと思っていたんです」
「なるほどねぇ。美羽ちゃんかぁ……。何から話そうかしら？　でも、性格とかはカオルや、玲から聞いているんでしょう？」
確かに、色々聞いてはいるけれど……。
「出来るだけ色々な面を知りたいので、舞子さんから見た美羽お姉ちゃんを聞かせてもらいたいんです」
そう、人によって全然見え方が違うのだ。儚く優しい子。強く、たくましい子。天使の様な子。人を惹き付ける天才。
「んー、生意気で、横柄で、弱虫で、恐がりで、無茶ばっかりして、強がりで、格好付けで、そのくせ泣き虫で、寂しがりで、ずるい子かな？」
「へ？」
一言一句逃さずに、と構えていたペンは一文字も書く事が出来なかった。
「あー、あと見た目可愛いのに愛想笑いばっかりで、表情が可愛く無かったのよねぇ、最初。いかにも私は不幸の真只中に居ますって顔していて、無気力だったわ」
あ、あれ？私は本当に同じ人の事を聞いているのだろうか？

「え、えっと、クツキ　ミハネさんの事ですよね？」
思わず尋ねてしまう。
「そうよ。美羽ちゃんの事よ？」
舞子さんは、はっきり言い切った。
「は、はぁ……」
私は絶句してしまった。もちろんペンも動かない。
「舞子、ちょっと言い過ぎじゃない？」
カオルさんから聞いていた美羽お姉ちゃんもこんなでは無かった。
「あら、私から見たらこんな感じだったけれど？　でもね、こんな子が精一杯、意地張って、精一杯あがいて、生きたから、こんなに色々な人に影響を与えたのだと思うわ。弱いのにがんばる。ここが萌えポイントなのよ」
も、萌え……。私の中の美羽お姉ちゃんが崩れてゆく。そして舞子さんも……。
『美羽さんは俺達と変わらない人間でした。強いけど、天使や神様じゃない。人間でした。』言羽さんの言葉が思い出される。確かに今まで聞いてきた、美羽さんより人間らしいけれど、私の知っている美羽お姉ちゃんとは全然違った。
「あ、あのー、後、死神さんについて聞きたいのですけれど……」
そう、私はあまり知らなかったけれど、美羽さんとは切っても切れない関係だったらしい死神さん。
「あー、死神さんね。あれは美羽ちゃんの友達みたいなものかなぁ……。よく、『ねぇねぇ、死神さん』って話かけていたわね。あ、そうそう、後、独り言が多かったかな」
ふふっと、昔を懐かしむ様に笑う。そう、みんなここだけは同じ、彼女の事を語る時は優しい顔になる。
「最初に会った時にね、あの猫には触れないように、って注意したのよ。それなのにあの子ってば触るどころか首輪まで付けちゃって」
「あの時の美羽ちゃんは少し恐かったわ。今にもそのまま天使の羽を生やして飛んでいってしまいそうだった」

「私としては、本当は、死神さんに触れて欲しく無かったんだけれどね」
舞子さんは寂しそうに呟く。
「なまじ死神さんに心がある様に見えてしまったから、余計に不安になってしまったわ。本当にあの黒猫は死神なんじゃないかって……。そして不安になって美羽ちゃんの方に駆け出すと、美羽ちゃん倒れそうになるし……。」
そう、その後、青埼サナトリウムでは、美羽お姉ちゃんは、伝説になったらしい。
「でも、今思うと本当にあの黒猫は死神だったのかもね」
カオルさんがぼそりと言葉を落とす。暗く重たい言葉。
『ねぇねぇ、死神さん』そう問いかける美羽お姉ちゃんは何を思っていたのだろう？
「ま、私の知っている美羽ちゃんはこんなものかなぁ……」
「もう終わりですか！？」
一番親しかった人だと聞いていたのに、あまりの短さに驚いてしまう。
「んー、だって武勇伝は沢山聞いているでしょ？　屋上に来た話とか、家族で泣き合った日とか、紙芝居の話とか、首輪のプレゼントとか……」
「まぁ、確かにその辺は私達が話しちゃったわね」
カオルさんが続く。でも、私は舞子さん視点のお話を聞きたいのだ。
「さっきも言った様に舞子さんの視点で聞きたいんですよー！」
私は批難の声をあげる。
「えー、面倒だし、あまりみんなと変わらないわよ」
「そ・れ・よ・り……『白詰草』の方のお話聞かせてよ！　何かすごく楽しそうなんだもん。カオルが慧ちゃんをあんな楽しそうにいじっていて、しかも『白詰草』を書いたのが慧ちゃんでは無く、あの勇人君で、慧が携帯でメール出来るようになったなんて……。面

白く無い訳無いわ！」
うあ、何か色々聞かれたくない方に話が向かっている。
「あー、それは楽しいわよー。とりあえず彼、勇人君じゃ無くなっちゃったから、今は小鳥遊　言羽って言うのよ。この名前はそこの慧ちゃんが付けたの」
ああ、カオルさんは意地悪だ……。
「へー、それで今度、慧ちゃんが小鳥遊になる予定だと……。式には是非、私も呼んでね！」
「うう……だから……違うんですってばぁ……」
私はその後も、これまでの経緯を話しながらいじられ続けた。

「つ、疲れた……」
思わず零れ出た言葉。今は青埼十字孤児院で守さんと加山さんのお手伝いで野菜の皮を剥いている。
「あはは、災難でしたね。それなら休んでいても良いんですよ」
加山さんがそう勧めてくれる。
「いえ、何かしてないと、それはそれで落ち着かないので……」
舞子さんとカオルさんは子供達と遊んでいる。二人は同じ人間とは思えない程タフだった。
「はぁ、それにしてもあの二人が一緒になると、あんな事になるなんて……」
飛行場から4時間程……ほぼ、喋りたおしていた。
「私も始めは驚きました。人見知りなんてしている暇も無いくらいずっと話しかけられて、いじられて……。でもそれに救われたんです」
守さんがジャガイモの皮を剥きながら淡々と話す。彼女と友達になって以来。よくこの孤児院にも遊びに来ている。そして彼女がいじめに合って、不登校になっている事、何度もリストカットを繰り返し、舞子さんに救われた事を聞いていた。
「手首切って運ばれてきた女の子の前で、あのテンションだったん

ですよ？すごいですよね、正直」
あはは、と笑って守ちゃんは言う。彼女の傷……それを笑い飛ばせるようになったのは紛れも無くカオルさんと、舞子さんの力だ。
「本当、私もびっくりしましたよ。急に、刑務所に入った私に面会に来たんですよ？舞子さん。それで面会時間いっぱい説教されました。あれは堪えましたねぇ」
加山さんが昔を思い出す様に語る。美羽さんの紙芝居に打ちのめされた後、自首して、さらに舞子さんにお説教された様だ。
「あはは、舞子さんでも一冊本が作れちゃいそうですね」
本当に、それぐらい話題の尽きない人だった。
「それにしても本当に言羽さん、来ないんですか？」
守ちゃんが残念そうに言う。その言葉と雰囲気に少し心がうずく。
「あはは、『俺は約束を守るまでいけない』とか意地張っちゃって。来ないんですよ。まぁ、あと最近は少し煮詰まっちゃっていて……」
「そっかぁ、残念ですね」
守ちゃんと言羽さんもたまにメールのやり取りをしていると言う。それが最近の気掛りであり、悩みだ。嫉妬している自分が嫌になる。
「また三人で、ご飯とか行きたいですね」
守ちゃんは朗らかに言う。彼女の事も嫌いでは無い。むしろ好きだ。それなのに私は……
「いたっ！」
考え事をしていたら指を切ってしまった。なんてベタな事しているんだろう私……
「大丈夫ですか！？」
守ちゃんが心配そうに見ている。
「大丈夫。ちょっとだけ切っちゃっただけだから」
傷口から血が滲む。
「守さん、こっちは大丈夫ですから消毒してあげてください」
加山さんに勧められるまま私達は厨房を後にした。
「ごめんね、手伝いに来たのに足引っ張っちゃって……」

本当、私は何をやっているのだろう？　傷口の痛みより心の方が痛かった。
「そんな事無いですよ。慧さんいつも、沢山私の事、助けてくれるじゃないですか」
「私、何か、したっけ？」
本当に心当たりが無かった。
「私と友達になってくれたじゃないですか」
そう言いながら守ちゃんは救護室で、手馴れたように救急箱を開けて、ガーゼと消毒液を出す。
「それって助けているの？　私は純粋に守ちゃんと友達になりたいと思ったからなっただけなのに……」
そう、助けたいとかそういう思いからじゃない。
「それでも、友達って、だけで助けになっているんです。ほら、メールしたり、くだらない話をしたり、一緒にご飯を食べたり……。私、昔から虐められっこで、誰かと特別仲良くなったりした事無かったから……。だから、対等に扱ってもらえるのが嬉しいんです。子供達や、ずっと大人な人達とは違う。年の近いお友達って慧さんが始めてなんです」
私には普通で、当たり前だった事。私は人の深い所を知れば知るほど自分がちっぽけな存在に思えてくる。普通だと思っていた事がどれだけ幸せだったのか思い知らされる。
「でも、それだったら言羽さんだって友達じゃない」
私は最低だ。口を開くだけで自分が嫌いになってゆく。
「そうですね……。でも言羽さんは……男の子だから……」
胸が締め付けられるようだった。もし守ちゃんも言羽さんの事を想っていたら……。
「はい、ちょっと沁みますよー」
そう言って守ちゃんが私の指に消毒液を塗る。
「いたっ……」
傷口が熱い。だけど心はもっと焼け爛れていた。

「慧さん、何か元気無いです？」
守ちゃんが傷口に絆創膏を張りながら上目遣いで聞いてくる。
「そんな事、無いよ」
愛想笑い。自分でもぎこちない顔しているって、わかってしまう。
『あー、あと見た目可愛いのに愛想笑いばっかりで、表情が可愛く無かったのよねぇ、最初、いかにも私は不幸の真只中に居ますって顔していて、無気力だったわ』
舞子さんが美羽お姉ちゃんを語った言葉。それは私の知らない弱い美羽お姉ちゃん。美羽お姉ちゃんもこんな風に笑ったのだろうか？
「私じゃ、力になれないですか？」
守ちゃんが今にも泣き出しそうな顔で私を見上げていた。
「頼りにしてもらえないのは、友達として悔しいです」
私は本当に何をしているのだろう？
「ごめんね。そういうつもりじゃなくて……。私、何だか自信無くなっちゃって……」
本当の事を全て打ち明けるのが恐くて、曖昧な表現をしてしまう。
「自信かぁ……私も無いからなんとも言えないですけど……。隣の芝生は青く見えちゃうものなんだと思いますよ。私は慧さんや、カオルさん、舞子さん、言羽さん、加山さん、それに美羽お姉ちゃん、みんなが羨ましいですもの」
また、言葉が出ない。私はいつも大事な時にこうだ。
「でも、私は羨んでばかりでした。そうして、ココに逃げ込んだんです。孤児院なら、自分より不幸な子ばかりだろうって……。でも、実際は加山さんや、カオルさんの様な眩しい人ばかりで、その上子供達より自分の方が不幸だったんです。どこに行っても私の居場所は無いんだって諦めて、さらに自分の殻に引き篭もって、必死に不幸じゃないってフリして、笑うんです。今の慧さんみたいに」
ああ、やっぱり私はそんな顔していたんだ……。
「でも、慧さんと、言羽さんが、私に教えてくれたんです。あの日、突然この孤児院にやって来て。名前も告げずに、美羽お姉ちゃんの

紙芝居を私に渡して行ってしまった。女の子に教えられました。『世界は自分の尺度だけじゃ測れないって』そして、その日名前を貰った男の子に教えてもらいました。『人は何度だって生まれ変われるって』だから、私、決めたんです。もし二人が迷う様な事が合ったら、私が二人に教えようって」

守さんは真直ぐ私を見る。

「慧さん、もし今の自分が嫌いなら、捨てたって良いんです。もし、自分が不幸だと思うならそれは、間違いなんかじゃ無いんです。誰だって悩みもあれば辛い時もあります。自分に自信が持てないなら。逃げちゃえば良いんです。ズルしちゃえば良いんです。もし、それが本当に悪い事なら、私が叱ります。それで、怒られたら反省すればいいんです。間違っていたなら、ごめんなさいって謝れば良いんです。そしたら私が許します。仕方ないなって笑って、私が許します。きっと、それが友達だから」

「守ちゃん……」

私はきっとこの子の事を見下していた。過去の守ちゃんの様にこの子に逃げ場を求めていた。最低だ……。だけど、最低だからこそ見える物があるんだ……。

「ごめんなさい……。ごめんなさい……。ごめんなさい……」

私は溢れる涙と言葉を止められなかった。

「もう、仕方ないですね。」

そう言って抱きしめてくれる。

「守ちゃん……これからも……、友達で居てね」

私は泣きながらなんとか彼女にお願いする。

「慧さん……違います」

守ちゃんはそっと耳元で囁く。まるで秘密のお話をする様に。私にだけ魔法をかける様に。

「私達は親友です」

ああ、私はやっぱり大馬鹿者だ。だけど、馬鹿だからこそ、もっとがんばろう。下から上を見上げよう。登れなくても良い。自分の

世界を精一杯生きるんだ。何にも出来ないなら出来る事を探そう。
「守ちゃん……。ありがとう」
それから私は、守ちゃんに全て打ち明けた。彼女は酷く驚いていた。
「もう、付き合っているんだと思っていました」
私、本当何やっているんだろう……。

ワイワイ、ガヤガヤ、ギャーギャー、ボキャブラリーの無い私にはどの表現が正しいのか分からない。とにかく今は戦場だ。
「こらー！　それ私の！」
「へっへーん！　これもらったー！」
「あー、舞おねーちゃんずるいー」
「あら、早いもの勝ちだわ」
「はいはい、みんなー、まだまだあるから落ち着こうねー」
みんなでご飯を食べている……。はずなのだけれど、私はあまりにも無力だった。目の前の天ぷらは飛ぶように消えてゆく。
と言うか、たまに本当に天ぷらが宙を舞う。
「こらー、食べ物で遊ぶなー！」
「あー、それ私の！」
「うわーん」
ワイワイ、ガヤガヤ、ギャーギャー……
結局、私は子供達の声をおかずに白いご飯を食べた。
そして次は、洗い物。ここでは皆が自分の洗い物を洗う事になっているのだが、それも中々、上手く行かない。子供とはそういう生き物だ。
ワイワイ、ガヤガヤ、ギャーギャー、夜の十時までそんな時間が続いた。ただ、ひたすらに……
「はぁはぁ……やっとみんな寝てくれたかな？　今日は一段とすごかったですね」
「まぁ、舞子が居たからねぇ……」

カオルさんも相当お疲れだ。
そう、舞子さんが子供と一緒になってはしゃぎ、一緒になってケンカし、一緒になって天ぷらを取り合い、一緒になって水浸しになり、今はお風呂に入っている。
「舞子さんって、あんな人でしたっけ？」
私はあの頃の記憶を手繰り寄せる。
「思い出は美化されて行くものなのよ」
カオルさんはそうやって意味深に呟く。
「おーい！」
突然舞子さんの大声が聞こえてくる。やっと子供達が寝たのに。起こしてしまうんじゃないかとハラハラする。
「慧ちゃーん！　居ないのー？」
居ます。居ますから静かにして下さい。
そう心の中でお願いしながら浴場に駆けて行く。ここは子供達が大勢で入れる様に大浴場になっている。
「なんですか！？」
はぁはぁと肩で息をしながら、浴場の扉を開ける。
「ありゃ、居るなら返事してよー。お姉さん寂しかったわ」
「大声出すと子供達が起きちゃうからです！」
私はお湯に浸かって気持ち良さそうにしている舞子さんに怒る。
「まぁまぁ、そうカリカリしないで、慧ちゃんもとっとと服脱いで、おいでなさいな」
へ……？
「わ、私は良いですよ！」
「良くないわ、ほら親睦を深めるのはやっぱり裸の付き合いが一番でしょ」
うう……人とお風呂入るのは苦手なのに……。
「さ、早く、早くー！　早くしないとお姉さんのぼせちゃうぞー！」
大声で私を急かす。
「もう！　わかりましたから、静かにして下さい！」

私は観念して一緒にお風呂に入る事にした。
服を脱ぎ近くに合ったバスタオルを巻いて浴場に入る。
「こら、タオル巻くなんて邪道だぞー！　ほら、取った、取った」
この人は何でこんなに無茶苦茶なんだろう。
私は仕方なしにバスタオルを取る。
「やっぱり、傷跡、残っちゃったんだね」
突然、舞子さんは悲しそうに呟いた。
「ごめんね、辛いのは分かるけど、ちゃんと確認しておきたくてさ」
突然、恐縮する舞子さん。私はどう答えていいのか分からなかった。
「仕方ないですよ。それに私、この傷見ると美羽お姉ちゃんの顔思い出すから、嫌いじゃ無いです」
精一杯の強がり。
「ふふ……美羽ちゃんね……。懐かしいなぁ」
舞子さんは遠い目をしていた。
「あれから十二年かぁ……長かった様な、短かった様な、不思議な感覚だわ」
「私も、そんな感じでした」
作家になると言いながら、本を読み、物語を書く毎日。親に反対されるので成績は落とさない様に無難に勉強し、そこそこの大学まで出て、結果、出版社に就職。それは長い様で短い日々だった。
「ねぇ、美羽ちゃんの本ってどのくらい出来ているの？」
不意に舞子さんが尋ねる。
「半分位ですかねー。やっぱりページ数のノルマが合って言羽さん煮詰まっちゃっていて」
そう、決して悪い状況では無いけれどエピソードが足りなかった。美羽お姉ちゃんのインパクトのある出来事はほとんど青埼サナトリウムに来てからなのだ。
「彼女言っていたわ。『自分はあそこで生まれた』って、そして『ここで死ぬんだって』最初それ聞いた時は思わず怒鳴っちゃったわ。

私との約束は忘れたのかー！　って……諦めないって子供達に聞かせたのは嘘だったのかー！　って……」
　私は、舞子さんの顔を、見られなかった。
「私はその時、彼女が自分の命がもう長くないって知っているなんて思ってなかったからさ……随分酷い事、言ったと思う。でも、あの子は優しく、強かった。怒鳴った私に『私は、どんなに長く生きても、短い命でもここで死にたいんだ。死神さんの居る。この場所で……』そう言って窓の外の黒猫を見ていた」
「私、すごく安心した。それで、彼女は大丈夫だって勝手に思い込んでいた。友達が、一番大事な友達が、もうすぐ死ぬかもしれないって恐怖と闘っていたのに……。何もしてあげられなかった。結局最後に聞いた言葉は『またね』って言葉だった」
　私は無神経だった。一番近い人だからこそ、舞子さんはまだ苦しんでいるんだ。そんな人に美羽お姉ちゃんの事を話して欲しいなんて、私はなんて身勝手なのだろう。
「でもさ、あの子、最初にあなたに言った通り、生意気で、横柄で、弱虫で、恐がりで、無茶ばっかりして、強がりで、格好付けで、そのくせ泣き虫で、寂しがりで、ずるい子なのよ。だからきっと、美羽ちゃんは恐かったと思う。最後の瞬間まで恐い思いをしていたと思う。だって、あの子だって普通の女の子なんだもん」
「どうして……。今、その話をしたんですか？」
　どうして、車の中ではこの話をしなかったのだろう？
「だって慧ちゃん、言っていたでしょ？　『舞子さんから見た美羽お姉ちゃんを聞かせてもらいたいんです』って。でもね、あの子は誰から見ても九月　美羽だったのよ。ただ、みんなに気付かせ無かっただけの生意気で、横柄で、弱虫で、恐がりで、無茶ばっかりして、強がりで、格好付けで、そのくせ泣き虫で、寂しがりで、ずるい女の子。だから私だけの美羽ちゃんは残念ながら知らないの。ただ、私の傷は裸でいる、この場所でしか見せられないから、今、この話をしたのかもね」

そう言って私のお腹の傷を撫でる。
「うひゃあ！」
すごく、くすぐったくて変な声が出てしまった。
「ふふ、美羽ちゃんも良くそうやって驚いていたなぁ。あなたたち案外、似た者同士かもよ？」
「それって……私が生意気で、横柄で、弱虫で、恐がりで、無茶ばっかりして、強がりで、格好付けで、そのくせ泣き虫で、寂しがりで、ずるい子って事ですか？」
一言一句逃さない。私は美羽さんの全てを言羽さんに届けるんだ。
「そ、それなのに優しくて、強い。強がりでも貫けば本当の強さになる。ずるさも裏返せば優しさになる。不思議な事にね」
「私にも出来ますかね？」
「出来るかどうかじゃなくて、やろうと思うか。だと思うわ」
「舞子さん、ずるいです」
「あら、女の子はみんな、生意気で、横柄で、弱虫で、恐がりで、無茶ばっかりして、強がりで、格好付けで、そのくせ泣き虫で、寂しがりで、ずるい子なのよ」
そう言って微笑んだ舞子さんはやっぱりずるかった
私は待ち切れず、孤児院を飛び出した。言羽さんに美羽お姉ちゃんの事を伝えるために。

「言羽さん！」
息が荒く言葉が途切れ途切れになる。
「どうしたんだよ？こんな時間に……」
夜中の二時。
「こんな……時間まで……がんばっている人に言われたくないです」
暗い部屋、パソコンの明かりだけが頼りなく、陰鬱だった。
「美羽さんの事、聞いたから。忘れないうちに、話さないといけないと思って」
いつもならメモに取るけれど、今回はそんな事はしていない。

「はぁ……はぁ……美羽さんは！　生意気で、横柄で、弱虫で、恐がりで、無茶ばっかりして、強がりで、格好付けで、そのくせ泣き虫で、寂しがりで、ずるい女の子。だそうです！」
「言羽さんが前に美羽さんの両親に言った通りでした。彼女は私達と何にも変わらない！　普通の女の子なんです！」
私は呼吸をするのも忘れて言い切る。
「慧……。ありがとう！」
そうして言羽さんはパソコンと向き合った。彼のタイピングの音が聞こえている。私は荒い息が落ち着くと、ゆっくり闇の中に落ちていった。
それから一週間程で美羽お姉ちゃんの物語は完成した。

ねぇねぇ、死神さん

私は今、彼の原稿を読んでいる。
それは、意外にも美羽さんの目線で書かれた物だった。彼女の心理描写が今まで聞いてきた美羽さんと合致してゆく。
そして、最期の二週間が書かれた所に辿り着く。そこには彼の……言葉さんの葛藤が書かれていた。

僕は、死を目前にした事が無いのでここから先の表現には自信がありません。ですが、僕は想像する事で、美羽さんの物語を伝えたいと思います。
ここまで読んだ方には違った解釈が出来る方も居るかも知れません。それはそれで間違いでは無いと思います。人の死や気持ちは本人にしか分からない事なのです。
だから正解や答えがあるものでは無いと思います。だけど美羽さんの一番の理解者、小鳥遊　舞子さんは言いました。彼女は『生意気で、横柄で、弱虫で、恐がりで、無茶ばっかりして、強がりで、格好付けで、そのくせ泣き虫で、寂しがりで、ずるい女の子』だと。だから僕はそんな女の子を描きます。この本を読んでいるあなたや、あなたの側に居る何の変哲も無い女の子を……。

玲先生に死の宣告をされて一週間。まだ実感は沸かなかった。
この事を知っているのは玲先生とカオルさんだけだ。私は泣きながら死を告げた玲先生にお願いをした。両親と舞子さんには伝えないで欲しいと。
こんな馬鹿なお願いを、玲先生は受け入れてくれた。
「私、本当に医者失格ね」

と言いながら……。医者としては失格なのかも知れないけれど、私の友人としては最高だった。

「二週間から一ヶ月か……」

窓の外、眩しいくらいの日差しの下、白いフリルと、リボンのあしらわれた、日傘の影の中で、穏やかに眠る赤い首輪の黒猫を眺める。

「ねぇねぇ、死神さん……」

ほんの数日前まで隣に居た死神さんが、今はすごく遠くに感じる。私はもう、ほとんど自分で歩く力を失っていた。

日傘、日向、向日葵、どれも今の寂びた目には眩しい。

「私の最期にも鳴いてくれますか？」

窓の外の黒い塊に問いかける。錆びていく身体が恐怖を掻き立てる。今にも涙が溢れ出しそうだった。

だけど必死に我慢する。だって私は幸せなのだから。そう自分に言い聞かせる。

壁にかけられた、オレンジの丘の絵。夕日か朝日かは、わからないけれど、私は朝日であって欲しいと思う。

舞子さんとの約束、守れそうに無いや……。

今度、舞子さんに会ったらどんな顔をすれば良いのだろう？どんな言葉で喋れば良いのだろう？『言の葉使い』死ぬと言われてから出来た、ちっぽけな夢。慧ちゃんは『美羽お姉ちゃんなら、きっとなれるよ』そう言って、笑ってくれた。あの子の夢を壊してしまう自分が、無力で、ちっぽけで、酷く弱くて、脆い。諦めてしまうのはもったいないと舞子さんは言ったけれど、今の私は、諦めてしまっている。

だけど、諦めたから出来る事もあると思う。

そうして私はペンを走らせた。

優さん。ごめんなさい。この手紙があなたの元に届く頃、私はもうこの世に居ないと思います。優さんは、優しいから、私の手紙に

返事をくれるでしょう。その手紙に返事を書ける自信が無いので、今ここに、記します。

本当に、短い間だったけれど優さんと出会えて、すごく良かったと思っています。私は優さんの歌、大好きです。希望や、夢や、愛で溢れていて、優しくて温かい歌声がそれを引き立てる。

それが私には、眩しくて、羨ましくて、少し嫉妬してしまいます。

そんな自分が、情けなく思えます。それに、あの紙芝居で語った『諦めない事』それも、やっぱり私には無理でした。一所懸命になって、私の為に勉強している玲先生を見ると、『もう良いんだよ』って言ってあげたくなってしまったのです。

だから、私は自分の命を諦めてしまいました。もう、みんなに誇れる事は、何にも無いかも知れません。

それでも、自分を不幸だとは思いません。優さんの歌を聴いて、それに感動する心が合った事。舞子さんと出会って、人の為に一所懸命になれた事。そして、白い日傘を貰った事。悩みに悩んで、紙芝居を作った事。始めて死神さんに触れ、首輪をプレゼントした事。思い返せば、書ききれない位、幸せな事が浮かびます。

だから、私は死ぬ事を隠して残りの日々を精一杯、生きます。私の思い出が出来るだけ幸せで多くなる様に。

周りの人達が、出来るだけ、笑顔で居られる時間が、長くなるように。それが弱くて、ずるい私の、精一杯の強がりです。

まだまだ書きたい事でいっぱいなのですが、それを書いてしまうと、終わりがすぐに来てしまいそうで恐いので、この辺で止めておきます。

これから、優さんにも辛い時、悲しい時、苦しい時が、訪れるかもしれませんが、どうか優さんに四葉の加護がありますように。

こうやって思い、悩みながら、手紙を書くだけで、一日を使ってしまう。実感が無いのに、毎日が不安で仕方が無い。生きたい。それだけの願いが叶わない。その現実が重く、暗く、冷たい。たまら

なく誰かに会いたくなる。泣きつきたくなる。だけど今は誰も来ない。
どうか、どうか明日も目を開けられますように。そう祈って目を閉じた。

翌朝、まだ私は目を開けられた。霞む世界にカオルさんが映る。
「おはよう。美羽ちゃん」
「おはようございます。カオルさん」
そんな当たり前のやり取りが嬉しくて泣きそうになってしまう。カオルさんは私の命が残り少ない事を知っている。カオルさんはどんな気持ちで私を見ているのだろう？　どんな気持ちで『おはよう』と声をかけてくれるのだろう？
それを思うと、泣いてしまう訳にはいかない。彼女にも、笑顔で居てもらいたい。その一心で、堪える。
「ね、カオルさん。あの香水使ってみた？」
「ええ、とっても良い香りだったわ。でも、もったいなくて中々使えないわ」
「もう、使ってくれないと、意味無いのに」
「意味ならあるわよ？　あの小瓶を見るだけで、あれを貰った時の気持ちを、思い出すもの」
だけど、もし私が死んでしまったら。それは呪いの小瓶になってしまうんじゃないか？　そんな恐怖が、込み上げる。
「やっぱり、使ってよ」
「んー、そうね、好きな人が出来たら使うわ。勝負時には、あの香水って、今決めた！」
そうじゃないのに。
「でね、使い切っても、あの小瓶だけは捨てないわ。あれは大事に取っておいて。お母さんになったら、子供に自慢して。お婆ちゃんになったら、孫に自慢して。受け継いでゆくの」
「大げさ過ぎだよ」

今まで、カオルさんに悲しい思いをさせてしまうのを、恐がってしまっていたのに、今度は、簡単に未来を語れるカオルさんに、嫉妬している。私は我が侭で脆い。
「そうかもね。でも、きっと美羽ちゃんから貰わなかったら、こんな大げさな物にはならなかったわ」
「さ、そろそろ行くね。また後でね」
そう言ってカオルさんは出てゆく。誰も居なくなった部屋で私はついに泣いてしまった。

「ねぇねぇ、死神さん」
弱い私でも許してくれますか？
「いや、強くならないとね。」
そう呟いて優さんのCDをヘッドホンで聴く。窓から差す日が、暖かく、気付いたら眠ってしまっていた。お昼の時間になり、カオルさんに起こされる。
「おはよう。美羽ちゃん」
「おはようございます。カオルさん」
朝と同じやりとり。
「目ヤニ付いているわよ？」
そう言って近くのティッシュで、目の辺りを拭いてくれる。
「ご飯、食べられそう？」
「うん、変だね、どっちかって言うとお腹ペコペコ」
「変じゃないわよ。それが普通なの」
味気ない病院のご飯。それでも、それを口に運ぶ事すら、幸せに思える。
「一回くらい、みんなでご飯食べてみたかったなぁ……」
「みんなって？」
「舞子さんと、カオルさんと、玲先生と、優さんと、あ、後、由香さん！今度は忘れなかったよ」
「ふふ、由香に言っといてあげる。その時は由香だけゴスロリで来

てって」
「えー、それは私達が恥ずかしいよ」
「そうね。でも由香ってば空気読めないからなぁ……」
「あはは、由香さんらしくて、良いじゃない」
そんな他愛の無い話。これが後、何回出来るのだろう？
お昼、ただ本を読む。好きな本、読んだ事の無い本、どちらも頭に入って来ない。こんな事をしていて良いのだろうか？　もっと何か出来る事があるんじゃないだろうか？
でも、考えるだけで何も出来ない。そうして一日が終わる。当たり前の日常。死へのカウントダウン。でも、実感は無い。だって明日死んでしまうかもしれないのは、みんな同じなのだから……。
翌朝、私は熱を出した。頭が重くて痛い。少しずつ身体から色々な物が奪われてゆく感覚。羽が一枚、一枚、？がれてゆく様な痛み。身体より、心が痛い。
時間の感覚が分からない。外は暗く、雨が降っている。今日は死にたくない。絶対に今日は嫌だ。死神さんが居ないから……。だけど、身体が弱ってゆくのが分かる。ご飯の時に身体が起こせない……。腕が上がらない……。どんどん身体が錆びてゆく。
その感覚がただひたすら恐い。絶望と恐怖が螺旋の様に、ぐるぐると回って気が滅入る。だけど弱音は吐かない。カオルさんには、笑って顔を合わせる。玲先生には、からかってみせる。
そうして周りの人の笑顔だけは守ろうと努力する。
部屋に一人になると、こっそり泣く。そうしないと、自分を繋ぎ止められなかった。
それから二日程、寝込んでいたがなんとか持ち堪えた。
少し体調が回復したその日、舞子さんが、会いに来てくれると言う、知らせを聞いた。
「カオルさん、私の事……舞子さんには、話していないんだよね？」
「ええ、ちょっと体調崩しちゃった。くらいしか話していないわ」
「ありがとう」

「なんでお礼なんて言うのよ」
「なんか言いたくなるの。最近は誰にでもありがとうって言いたい。あ、死神さんだ」
のそのそと、いつものベンチに向かって、ゆっくりと歩いているのが見えた。
「カオルさん、今日は風も無いし、お願い」
「はいはい」
そう言ってカオルさんは手馴れた手付きで、側に置いてある日傘を持ってあのベンチへ向かう。
そして、死神さんに、影を落とす。後ろには、鮮やかな向日葵が綺麗に咲いている。
「おかえりなさい」
私の元に戻って来た、カオルさんに声をかける。
「ただいま。もう外は真夏の陽気よ。死神さん、あんな日向で、よく寝ていられるわよね」
「絶対、熱いよね。黒って日の光を吸収するし」
そうやってまた笑う。昔の愛想笑いとは違う。だけど嘘の笑い。今度は本気でみんなを騙そうとしている。だから上手くなったはずだ。これならきっと舞子さんも騙せる。
お昼過ぎ。舞子さんが部屋にやってきた。
「やほー、今日も暑いわねー。まあこれも真夏の楽しみよね」
いつもと変わらない、眩しいくらいの笑顔。
「だねー、すっごく、暑い」
私は手をパタパタさせて見せる。本当は、これぐらいの動作しかできない。
「ねぇ、舞子さん？」
必死に平静を装って、尋ねる。
「小児科はどう？」
「んー、相変わらず大変よ。手のかかる子ばっかりだし。私の言う事なんて、まったく聞きやしないし、わんわん泣くし、でも、楽し

いわ」
「そっか、本当に楽しそう」
「そだ、美羽ちゃんの紙芝居が、また聞きたいって子も、いっぱい居るわよ？」
「あはは、また描かないとね」
本当は、もう描けない。あんなお話も、絵も、今の私には描く資格が無い。
「……」
沈黙。いけない、不自然じゃないように、しないと。
「ねぇ、舞子さん？」
必死に、平静を装って尋ねる。
「こないだ、カオルさんと話をしていたんだけどね。いつかみんなでご飯食べに行ってみたいな」
もう叶わない、小さな夢。
「みんなって？」
舞子さんがカオルさんと、同じ反応をする。
「えへへ、名前上げるとキリが無いから、止めとく。とにかくみーんな！」
あの日とは違う答え。
「行けるよ。美羽ちゃんは何食べたいの？」
舞子さんの言葉に心臓を鷲掴みにされる。
「んー、何が良いかなぁ。あ、カレーかな！　大人数でカレーって良くあるじゃない？　私、学校とか行った事ないからそういうのが良い。みんなで作ってみんなで食べるの」
そうだ、私はそういう普通の事がしたい。ただそれだけなのに……
「でも、美羽ちゃん辛いもの苦手よね？」
「う、そこは甘口で……」
「もー、子供なんだから。カレーは辛くないとダメなの！」
「うー、じゃあ辛くても我慢するから、カレーが良い！」
未来を語る度に、心が削れてゆく。

「あはは、じゃあ、みんなでカレーパーティーね」
そう、私が居なくても、みんなで……
「そう言えば、美羽ちゃん。身体は大丈夫？　ちょっと体調崩したって、聞いたけれど？」
「うん、大丈夫。よくある熱だよ。もう慣れちゃった」
あははと、笑って見せる。
「慣れる訳無いでしょうに。もう……また何か、無茶したんじゃないでしょうね？」
「あー、ひどーい。そんなにいつも、無茶ばっかりしていないもん。」
少し膨れてみせる。
「ほー、本当かなー？　お姉さん、黙っているから、本当の事言ってみなさいよ！」
「残念ながら今回は、本当に何にも無いよ」
「そっかー、残念」
何を期待しているんだか。
「ねぇ、舞子さん？」
必死に平静を装って尋ねる。
「……」
言葉が出ない。
「なぁに？美羽ちゃん」
舞子さんは死神さんの様に、黙っては居ない。
「あの、ありがとね」
ついポロっと言ってしまう。
「どうしたの？急に、私、何かしたかな？」
色々してくれたじゃない。本当に色々……
「日傘！死神さんと日傘の風景、私、好きなの」
「……」
沈黙。
「何言っているのよ。私は、美羽ちゃんもあそこに居る風景の方が、

好きだわ」
ふふ、この人は本当に仕方ない人だ。どうしたらこんなに前ばかり見ていられるのだろう？
「そっか、秋が来たら、本が読んでいる所に落ち葉が落ちて来て。冬が来たら雪が積もって。春が来たら桜が綺麗で。その後は、また青葉が付いて。夏が来たら向日葵が横に咲いて。来年も、再来年も変わらないで在るのかな？」
ダメだ、そんなはず無いのに。こんな話をしていたら、泣いてしまう。舞子さんに悟られる訳にはいかない。
「何言っているのよ。秋には病気が治って、みんなで、落ち葉で焼き芋焼いて。冬が来たら雪合戦して。雪だるま作って遊んで。春が来たらお花見でちょっとだけお酒飲んで。夏は海にみんなで合宿よ！」
無茶苦茶だ……。でもそんな未来が私も欲しい。
「お酒はダメだよ。私、未成年だもん」
「良いのよ。ちょっとだけ背伸びしてお酒飲むの。でも苦くてすぐ止めちゃうの」
もう……この人は……
「そうそう、お酒って言ったらカオルよ、カオル！　あの子に飲ませると大変な事になるんだから……」
舞子さんはたっぷりカオルさんの酒乱っぷりを語る。
やばい。本格的に舞子さんの語る世界が眩しい。私には叶わない。もうきっと行けない世界。諦めてしまった世界が……
「ねぇ、舞子さん？」
必死に、平静を装って尋ねる。
「私ね、ココで生まれたんだ」
「ここ産婦人科、無いよ？」
「そういう意味じゃなくて！　ほら、覚えてない？　ここで日傘を貰った日。あの日、私泣いたでしょ？　あれって産声だった気がするの」

それまでは、生きている実感が無かった。いつ死んでも良いと思っていた。それが死を目の前にしたら、こんなに恐い。でも、それは『生きて』いるからなんだ。
「難しい事、言うなぁ」
舞子さんは、苦笑い。
「ねぇ、舞子さん？」
私は、最期まで貫く。
「私、ここで死ぬんだ」
「何、言っているの？」
舞子さんは信じられないような物を見るような目で私を見ていた。
「私との約束は！？　この絵の景色、見に行くんでしょ！？　諦めない事が大切だって子供達に語ったのは！？　あれは嘘なの！？」
舞子さんが取り乱す。こんな舞子さんを見るのは始めてだ。やっぱり、この人には最期まで隠さなきゃ、ダメなんだ。
「落ち着いてよ。舞子さん、何も今、死ぬなんて言ってないでしょ？　私ね、どんなに長い命でも、短い命でも、ここで死にたいの。死神さんにお願いしちゃったから……。私の魂を導いてくださいって」
「なんだ……脅かさないでよ」
「いつも私の事、脅かしている仕返し」
これで良い。これで……
「あら、もうこんな時間。そろそろ行かないと」
「やっぱり楽しい時間は、すぐ終わっちゃうね」
そう、楽しい時間は短く、辛い時間は長く、人間はそういう生き物だ。でも、私は幸せだった時間の方が沢山あったと気付けた。
「ねぇ、舞子さん？」
「またね！」
精一杯強がって手を上げる。こんな事にすら、がんばらなきゃいけない自分の体が、情けない。

翌朝、私の身体はまた悲鳴をあげた。意識を失い、次に目覚めたのは四日程経ってからだった。
「美羽ちゃん！」
お母さんが側に居た。仕事を辞めて付きっ切りで看病していてくれたらしい。一度、危篤状態にまで陥ったそうだ。でもカオルさんは、舞子さんには黙っていてくれたらしい。
私は、朦朧とする意識の中で、手を握り返す。
苦しい。身体がバラバラになったみたいだ。どこも、まともに動かない。
「お母さん……泣かないで。」
精一杯呟く。もうすぐ、私、死んじゃうのかな……。
「美羽ちゃん！」
玲先生とカオルさんが飛び込んでくる。
「二人とも……焦りすぎだよ……」
えへへ、と笑って見せる。
だけど二人を笑わせる事は出来なかった。
「ねぇ……死神さんは……？」
「ちゃんとあそこに居るよ。だから美羽ちゃんはまだ死なない！大丈夫だから！」
カオルさんが叫ぶ。窓の外に目を向けるといつもの場所に日傘と、日向と、向日葵があった。そして、　私の大好きな黒も……。いや、今は黒と赤だ。
「私、幸せ者だ……こんなにみんなが泣いてくれる」
だけど、なんだか瞼が重い。
「美羽ちゃん！　美羽ちゃん……！」
意識が薄れてゆく。
翌日、私はまた目を覚ました。
今度はお父さんと、お母さんが居る。見ているこっちが辛くなるほど、目を真っ赤にしてやつれていた。
「二人とも、すごい顔だよ」

そう喋ったつもりだった……だけど音がはっきり分からない。
「……は……ね……ん……ぴー……」
何か必死に喋っている。よく見たらカオルさんと玲先生も居る。
「……が……じょ……う……」
耳がおかしい。嫌だ、こんなの……これじゃ死神さんの声が聞こえない！
「死神さんは！？」
そう叫んだつもりなのに、自分の声すらも、わからない。
嫌だ、嫌だ、嫌だ！
必死にもがき、手を伸ばす。窓の外、あの世界だけは今でも鮮明に思い出せる。
今になっても恐い。ただひたすら恐い。死ぬのが恐い。でも、みんなが泣くのはもっと嫌だ。
「な・か・な・い・で」
声になっているのか分からないので、必死に口を動かした。
泣かないで、でも死神さんに鳴いて欲しい。私はあの黒猫と逝くんだ。
あぁ……もう、ダメだ。身体が動かない。瞼が重たい。泥の沼地に沈み込んでいく様な、鈍い感覚。
でも、『諦めたくない！』心の中で叫んだ。
なんの音も聞こえない。真っ暗な闇の中、最期に私は、確かに聞いた。
チリリ。
鈴音、刹那。
「ミャーオ」
鳴き声だった。
確かに聞こえた。
最後の力を振り絞る。
「あ・り・が・と・う」

これが、僕達が聞いた美羽さんの物語です。
美羽さんの気持ちや思いは最初に書いたとおり僕の想像です。ですが、僕の答えはこうです。彼女の物語に力をもらって今ここに立っている僕は、もっといろんな人にこの物語を知って欲しい。と思いました。
そして、何より僕にこの物語を書くよう勧めてくれた人に、感謝の気持ちをここに綴り、そしてこの物語を読んでくださった皆様にも心からこの言葉を送りたいと思います。
『言の葉使い』を目指した、美羽さんの最後の言葉。
「ありがとう」

「どうだ？」
最後のページを捲った私に言羽さんは問いかける。
私は既に何回も泣いていた。
「どうも、何も私なんかの感想が役立つ訳無いじゃないですか！」
泣きながら訴える。
「なんでだよ？」
飄々と言ってのける言羽さん。
「私みたいな一般人には、天才の力なんてわかんないんです」
ただ言葉が響いてこの涙を生んでいることだけは確かだ。
「良いんだよ。読む人間はお前の言う一般人なんだから。その感想を聞かせてくれ」
そんなもの最初から決まっている。
「こんな素敵な物語をありがとう。って感じです」
「そっか……。そういや、もう一枚あるんだが……」
そう言って一枚の原稿用紙を私に差し出す。
そこに書かれていたのは私達の物語の続きだった。

――――結婚してくれないか？――――

そう書かれた一枚の原稿用紙。私はまた涙が止まらなくなった。
「こんなのずるいです……」
「ずるくても良いんだよ」
そう言ってデスクの引き出しから言羽さんは指輪のケースを取り出した。
「これ、安物なんだけどさ」
そう言って、蓋を開ける。そこには四葉のクローバーがあしらわれたシルバーのリングが合った。
「四葉で探したら三千円くらいのしか無くて迷ったんだけど。やっぱり俺はこっちの方が良いと思ってさ……」
「そう言うのは、言わないほうがカッコイイですよ」
「そう……なのか……すまない」
しおらしくしている言羽さんが可愛い。
「もう！でも……」
いつも持ち歩いているペンで原稿用紙に書き記す。

――はいはい。ご主人様。――

こうして、私達の物語は続いてゆく。美羽さんが紡いでくれた物語は、沢山の繋がりを生んで広がった。そして、またそれを言羽さんが紡いで広げてゆく。私はこれを見守ろう。
だけど諦めない。私の夢……作家になる事。それと、もう一つ。迷子のミウを子供に読んであげる事。
そして、九月　美羽の物語は世に送り出され、私達は結婚する事になった。

Ｈａｐｐｙ　Ｗｅｄｄｉｎｇ　―誓いと願い―

青埼十字孤児院の隣、あの日、言羽さんの生まれた場所で私達は結婚式をあげる事になった。

「式には絶対呼んでね」と言っていた舞子さんは世界を飛び回っている。

結婚を私の両親に承諾してもらうために、言羽さんは頭を下げに行ったが二つ返事でオッケーだった……。まぁ、もはや、全国的に有名な作家さんなので気持ちが分からなくも無いけれど……なんだか納得いかなかった。

そして今。私は真白なウエディングドレスに身を包んでいる。

青埼十字孤児院の一室を準備室としてお借りしている。

なんだかすごく緊張してきた。

はぁ……と一つ溜息。なんだかこういう堅苦しいのは似合わない気がする。

「慧さーん、そろそろ時間ですよー」

守ちゃんの声だ。色々お手伝いをしてくれている。

「わ、慧さん……すごく綺麗」

守ちゃんはまさしく絶句している。

「何か、恥ずかしいよ」

私は照れ笑い。

「もう、せっかくの機会なんですから、そんな事言わないで喜びましょうよ」

「あはは、そうなんだけど、何だか私らしくないと言うか……」

「あの舞台に立った時の、美羽お姉ちゃんも同じ気持ちだったんじゃないですかね？」

守ちゃんが言う。あの舞台の時の真黒な美羽お姉ちゃん……

「そっか……。そうかもね」

「守ちゃん。ありがとう」

私は、守ちゃんと共に孤児院から教会へ向かう。
教会の前、入り口の所でお父さんが待っていた。
私達は身内で些細な結婚式を選んだ。私は、式は無くても良いと思っていたのだが言羽さんがやっておこうと言うのでやる事にした。
「お父さん、右足からね」
お父さんと軽く腕を組み打ち合わせをする。
守ちゃんが扉を開け、中と確認を取る。ブーケを胸元に持ちゆっくり歩き出す。
入り口でお父さんがお辞儀。それに続いて私もお辞儀をする。
ゆっくり顔を上げる。そこには孤児院の子供達と美羽さんと関わった人達。美羽さんの両親までお祝いに来てくれた。
ゆっくり、一人、一人の顔を見てゆく。
足、震えている。緊張で手の平が汗ばんでいる。
一番愛おしい人はまだ先、一段上から私を見守っている。
ベール越しに見る教会の景色はあの時と違い、賑やかで華やかだった。
でも、神様なんて信じていない私がこんな所に居て良いのだろうか？
少しずつ、言羽さんが近付いて来る。白のタキシードに身を包んだ言羽さんはいつもと雰囲気が違って、格好良かった。
お父さんが、私を言羽さんに託す。でも、これもなんだか違う気がする。
「綺麗だ……」
言羽さんが耳元で囁く。それは、ものすごく嬉しかった。
少しの拍手が鳴った後、神父さんがゆっくり口を開く。
「賛美歌斉唱」
「へ？」
私はそんなのがある事を聞いていなかったのでびっくりしてしまう。
教会の別の扉から優さんがアコースティックギターを抱えて、出

て来た。
アルペジオの穏やかな旋律が荘厳な教会に響く。
長椅子に座っていた全員が立ち上がり優さんと共に歌う。
下手っぴな子供達の声。川崎先生の美声、恥ずかしそうなお父さんの声、無難に歌うカオルさん、一所懸命な守ちゃん、渋く低い声の加山さん、優しく見守る様に歌うお母さん……
沢山の歌声が集まって、ぐちゃぐちゃな歌が響く。ハーモニーとはとても呼べないけれど、私にはこれくらいが丁度良い気がした。
やばい。もう目頭が熱くなっている。
最後は手拍子の後、優さんの綺麗な歌声で終わる。
「それでは誓いの言葉の前に、一言お二人にお伝えします」
神父さんの声が教会に響く。
「教会結婚という形を模して居ますが。あなた達は、神様に誓うより、認めて欲しい相手が居ますね？」
突然の神父さんの問いかけ、確かに居るけれど良いのだろうか？
頼りなく言羽さんを見上げる。彼は真直ぐ、迷わず声にした。
「はい」
そっか、それで良いんだ。私も後に続く。
「はい」
神父さんがそっと頷く。
「それでは汝、言羽は、この女、慧を妻とし、九月　美羽と死神の名の元にその健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を尽くすことを誓いますか？」
結婚式の会場で美羽おねえちゃんと死神さんの名前を聞くなんて……。これは誓わないわけにはいかないや。
「誓います」
「誓います」
私達は二人、誓い合う。

「二人に四葉の加護がありますように」
神父さんは聖書の代わりに『白詰草』を持っていた。
それに手を置いて祈る。
「それでは指輪を交換してください」
神父さんがそれぞれに指輪を手渡してくれる。二人共、安っぽい四葉のクローバーのシルバーリング。
言羽さんが私の左手をそっと取り指輪をはめてくれる。
私も同じ様に言羽さんに指輪をはめる。
美羽お姉ちゃんは、死神さんにプレゼントした首輪を願いのリングだと言ったそうだ。
きっとこれも同じ。二人の願いのこもったリング。
「それでは誓いのキスを」
いよいよだ……人前でキスなんてすごく恥ずかしい。
言羽さんと向き合い少しかがむ。
ゆっくりとベールがあがり、視界が鮮明になる。私はそっと目を瞑る。
唇に暖かい感触が触れた。このキスに願いを込める。この人を支えられる人になりたいと。
美羽お姉ちゃんと同じになれなくても、私にも出来る事をして行きたいと。
そうして私達の結婚式は幕を閉じた。余談だがブーケを受け取ったのはカオルさんでも玲さんでも無く守ちゃんだった。あの二人はまだ当分結婚は、出来なさそうだ。

「ふぅ、やっぱりこっちの方が落ち着くなぁ」
結婚式も無事に終わり、今は孤児院の方で子供達と遊んでいる。
「慧ねーちゃん綺麗だったよー！」
「私もお嫁さんになりたいなー」
とか、子供達にまで、からかわれてしまったけれど。
「あ、慧さん！　居ないと思ったら何やっているんですかー！」

守ちゃんが大きな声で呼んでいる。
「何って、子供達と遊んでいるんだよ？」
「もう！　主役なんだからゆっくりしていてくださいよ」
「そういうのはちょっとガラじゃ無いと言うか落ち着かないんだもん」
「もう……結婚式の日くらいもうちょっと女の子らしくしても良いと思うんだけどなぁ」
「あははは」
苦笑い。
「あ、そうだ！　守ちゃん！　あれ貸して」
私は思いつきで話題を逸らす。
「あれ？」
「そう、アレ！　美羽お姉ちゃんの紙芝居！」
「もう、仕方ないですね」
そう言って孤児院の方に戻っていった。
「みんなー、今日は私が『迷子のミウ』読んであげるね！」
子供達に宣言する。美羽お姉ちゃんの様に……だけど美羽お姉ちゃんとは違う。
「はい、慧さん」
戻って来た守ちゃんから紙芝居を受け取る。懐かしい様な、新しい様な、不思議な感じ。
「さ、始めるよー！」
全部、頭の中に入っているけれど……美羽お姉ちゃんの手書きの文字が愛おしい。
「これは不思議な世界で迷子になった女の子のお話。それはそう、不思議の国のアリスの様に」
私は一枚ページを捲る。自分の物語を進めるように。
子供達の前で紙芝居を読み上げた後。
言羽さんの約束だった『みんなでご飯』を実現した。大量の天ぷらは圧巻だったけれど、加山さんの揚げる天ぷらはやっぱり極上だ

った。

～朝日差す丘で～

これからも私達の物語は繋がってゆく。私と言羽さんは独立して出版社を立ち上げた。

カオルさんと玲さんは四葉総合病院で忙しく働いて、沢山の命と向き合っている。優さんは、舞子さんの支援をしながら一緒に歌を広める活動を始めた。

しばらくして私達は絵本『迷子のミウ』を出版。さらに言羽さんは、私がくすぶらせていた物語をいくつも飾り付けてくれた。そして、私には子供が出来た。女の子だったので、迷わず名前は、小鳥遊（タカナシ）　美羽（ミウ）と名付けた。

その後、ブーケの行方通り、加山さんと守さんが結婚。年の差十八歳というカップルが誕生した。二人の式でも美羽お姉ちゃんと死神さんに誓い合っていた。カオルさんと、玲さんは、「男なんてー！」と、自棄酒を飲んで大変だった。

そうしてあっという間に十年の歳月が流れた。

私達は今、アメリカに来ている。カオルさんと、玲さん、美羽さんの両親と共に。

「ハロー」

雑な英語で舞子さんと、優さんが私達を迎える。

「良かった、皆、来られて」

「ほら、美羽。お姉ちゃん達に挨拶」

私と言羽さんの娘。今年で8歳になる。

「始めまして。小鳥遊　美羽です。」

ペコリと頭を下げる姿が愛らしい。私は親馬鹿全開だった。

「まさか、本当に二人が結婚するとはねぇ」

舞子さんが私達をじっとり見ている。

「ふふ、まあ積もる話もあるかも知れないけれど、立ち話じゃなん

だし一旦ホテルに向かいましょう。明日は早いですよ」
優さんが私達を案内してくれる。ホテルでチェックインを済ませそれぞれの荷物を置いて。昔話に花を咲かせながら観光して過ごした。
そして、午前二時。舞子さん運転の車と、優さん運転の車に分かれて私達はある場所に向かっていた。美羽はすやすや眠っている。
「晴れそうで良かったですね」
私達家族は優さんの車。
「そうね、それにしても久しぶりね。あの時は、ごめんなさいね」
優さんは突然謝罪を口にする。
「あの時？」
言羽さんが尋ねる。
「私が美羽（ミハネ）さんの、最後の手紙を見せるのを断った時よ」
そう、私達は美羽お姉ちゃんが最後の手紙を書いた事しか知らなかったのだ。
「でも、まさか、『想像』で、あそこまで一緒だったからびっくりしちゃった」
言羽さんが想像で書いた手紙と、美羽（ミハネ）お姉ちゃんの手紙は酷似していた。あまりにそっくりだったので後から見せてくれたのだ。
「良いんですよ。私だって自分が書いた手紙が知らないところで読まれたら嫌ですもん」
そう、昔の優さんはそう言って断った。
だけど、言羽さんは見事に美羽お姉ちゃんになりきった。
「俺も、優さんが、あの手紙を読ませてくれなかったから書けたんだと思います。人には見せたくない手紙って思ったから……」
「ふふ、本当に二人共、舞子さんの言っていた通りね」
そう言って優しく微笑む。まさしく「優」の名の通り。
「さて、ここからが本番よ」
道が森の前で途切れていた。
先行していた舞子さんの車も止まっている。

「はぁはぁ……こりゃオバサン達にはきついわ……」
玲さんがそんな悲鳴をあげる。真夜中の獣道を私達は歩いていた。
美羽は言羽さんの背中ですやすや眠っている。
「すみません。もう少しだけがんばってください」
舞子さんが美羽（ミハネ）お姉ちゃんの両親。亜美さんと、羽衣さんをエスコートする。
「大丈夫です。あの子の夢ですから」
亜美さんが言葉にする。美羽（ミハネ）お姉ちゃんの夢。
そうしてしばらく歩いた後、私達は小高い丘に出た。
時刻は四時半を過ぎた所。
「そろそろね」
舞子さんが携帯電話を見る。
丘から見える水平線に日が昇ってゆく
「美羽、起きて！」
美羽を起こす。美羽は眠そうに目を開けた。
「なぁに、お母さん？」
「良いから、見ていてごらん」
頭をそっと撫でる。
紫がかっていた空がオレンジに変わってゆく。
そう、迷子のミウの最後のページ。オレンジの朝焼け。元は美羽（ミハネ）お姉ちゃんのお父さんが間違って買って来た。絵の丘。舞子さんはずっとあの絵の場所を、世界中ボランティアの旅をしながら、探していたそうだ。
「わぁ……綺麗」
そこに居る全員が、その景色に魅入っていた。
本当に天使が舞い上がりそうな風景。まるで幻想世界に紛れ込んだ様な感覚。
チリリ
鈴音に皆が現実に引き戻される。だけどそこは現実では無かったのかもしれない。

美羽の足元に黒い子猫が居た。首には真っ赤な首輪と、シルバーの鈴。

「ミャーオ」

そして一声、鳴き声をあげる。

これが奇跡なのか、必然なのか、偶然なのかは分からないけれど。

素敵な物語である事。だけは、確かだ。

おしまい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9795s/

サナトリウムの黒猫

2011年7月4日03時38分発行